*

国立西洋美術館年報

NO.10

*

BULLETIN ANNUEL
DU
MUSEE NATIONAL D'ART OCCIDENTAL

*

TOKYO 1976

*

国立西洋美術館年報

NO.10

（昭和50年度）

新収作品：クロード・ローラン《踊るサテュロスとニンフのいる風景》

目次

昭和50年度の新収作品について　山田智三郎 ――― 4
Nouvelles acquisitions, par Chisaburoh F. YAMADA

新収作品目録 ――― 8
Nouvelles acquisitions (catalogue)

アレクサンドロス大王の空中飛行 その美術作品カタログ　越　宏一 ――― 22
Die Luftfahrt Alexander des Grossen
— Ein Werkkatalog der Bildzeugnisse, von Koichi KOSHI

ジェンティー・ダ・ファブリアーノの文献　生田　圓 ――― 74
Bibliografia (1930-1976) di Gentile de Fabriano, a cura di Madoka IKUTA

昭和50年度事業記録：
特別展記録・巡廻展記録・修復記録・講演会記録 ――― 88

資料
昭和50年度主要記事・国立西洋美術館新館建設計画・
規則の制定・改正・歳入実績額・歳出予算額・観覧者一覧表・
所蔵作品一覧・職員名簿 ――― 92

昭和50年度の新収作品について

山田　智三郎

Nouvelles acquisitions

Par Chisaburoh F. Yamada

国立西洋美術館は，昭和50年度に，1億2,300万円の購入費をもって，絵画4点，彫刻1対2点，素描1点を購入し，さらに，文化庁に特別にお願いして，その特別購入費によって2点の油絵を購入して頂いたものを当館に管理換させて頂いた。それら各作品の題名とデータについては別項の購入作品目録および管理換作品リストを御覧頂くことにして，ここにはそのうちの主なものについてのみ報告する。（寸法の単位はメートル。縦×横の順）

購入作品

15世紀フランドル派「悲しみの聖母」

油彩　板　0.496×0.354

15世紀の後半，ディリック・バウツ（1415頃—75）その他によって，しばしば描れた，涙を流す「悲しみの聖母」図の一つである。この構図は元来，「荊冠のキリスト」の顔を描いたものと一対として構想されたものであるが，現在，キリストの顔を描いたものよりも「悲しみの聖母」図の方がより多く残っているところを見ると，聖母礼拝の対象図として，この図のみ描れた場合もあったのではないかとも考えられる。16世紀後半以後は，この図のみ描れた場合が多い。本作品図もそうしたものの一つか，或いはもとは「荊冠のキリスト」と一対をなすものとして描れて，キリスト図の方が失なわれて了ったものか，その点は分らない。

金地をバックにした本図の構図は，バウツの描いた「悲しみの聖母」に近いが，そのかぶり物や両手の描き方は，ルーヴルにあるロジェ・ファン・デル・ヴェイデン（1400頃—1464）作「ド・ブラック祭壇画」の，聖母と福音者ヨハネとの間にキリストを描いた中央パネルの，キリストを礼拝する聖母のそれに近似している。然し，本作品のマドンナの顔のモデリングは，ロジェよりも，またバウツよりも，やわらかく丸身がある。本図は彼らよりもより若い，そしてどちらかのアトリエ出身の画家によって，15世紀末描かれたものかと思われる。

この絵の購入によって，西洋美術館はパティニール作「エジプトへの逃避上の聖母子」と「聖ルチア伝の画家」作の「聖ヒエロニムス」と合せて3点の初期フランドル画を所有することとなり，中世薄暮期の美しさと近世黎明期の清新さとをあわせもった初期フランドルの宗教芸術と自然美表現の発達とを一通り示すことが出来るようになった。

フィリップ・ド・シャンパーニュ筆

「マグダラのマリア」

油彩　カンヴァス　0.725×0.59

フランドル出身のフィリップ・ド・シャンパーニュは，はじめ，ヴァン・ダイク風の，動感の強い宗教画や肖像画を描いていたが，壮年期にポール・ロワイヤル修道院を訪れて，敬虔なジャンセニストとなって以来，その芸術の精神性を深め，質実な描写のうちに対象の内面性をよく把えた肖像画の傑作を数多く描き，同時に宗教画にも優れた作品を残している。シャンパーニュの研究家であるドリヴァル教授によれば，この「マグダラのマリア」はその後期の作品で，その時期の作品の特性である「メチエの柔軟さ・内面性・慎み深さ・精神的密度」が見られる。ただし，この絵は貴族の注文によったものであろう。ポール・ロワイヤル修道院のための

作品のような宗教的な厳しさはなく，気品ある優雅な美しさをもっている。

ドリヴァル教授の研究によれば，シャンパーニュが「マグダラのマリア」の上半身を描いた絵は3点現存しており，その1点はヒューストンの美術館にあるもので，1648年の作，第2はそのレプリカで1657年の作，第3が本図で，ルイ14世の名宰相コルベールの所蔵であった可能性が強いという。コルベールが所蔵していたシャンパーニュの「マグダラのマリア」図は，その後画家エティエンヌ・ルシュールの所有となったが，彼のコレクションが売立てられた1791年11月22日のオークションの目録に出ているその絵の寸法と，本図は同寸法であるからである。

ウジェーヌ・ドラクロア筆
「墓に運ばれるキリスト」1859年作
油彩　カンヴァス　0.56×0.46

大作ではないが，ドラクロア晩年の名作の一つである。有名な晩年の傑作「レベッカの掠奪」(100×81cm　1858年作）や「十字架の道行」などと共に1859年のサロンに出品され，評判となった作品である。ボードレールは，彼の有名なサロン評のなかで，この絵をティチアノの仕事と比べて絶賛している。

上記3点の外に，ルオー晩年の力作で，道化の顔を描いた「リュリュ」（油彩，39.5×25cm）1点と，ブーシェの素描「ヘベ（赤と黒のチョークに白のハイライト，36.0×22.8cm）を購入した。前者は梅原龍三郎氏がルオーから直接手に入れられたもの。後者は素描ではあるが非常に丁寧に描き込んであって，ブーシェ芸術の装飾美と魅力を十二分に示す非常に美しい素描である。さらに18世紀の装飾的彫刻芸術を示すものとして，コルネイユ・ヴァン・クレーヴの作と考えられるブロンズ彫像一対を購入した。「ヴィーナスとキューピッド」と「プシュケとキューピッド」を現わしたものである。このうちの後者と同じものの別のキャストがウォーレス・コレクションに所蔵され，作者不明の18世紀のものとして出陳されているが，この一対は，ヴァン・クレーヴが1704年のサロンに出品した「セレーネとエンディミオン」に様式上近似しているところから，彼の作と考えられる。優雅な美しさに満ちたこの一対は1710年代のレヂャンス様式に近いものを既に示しており，「セレーネとエンディミオン」よりさらに晩年の作と思われる。

コルネイユ・ヴァン・クレーブは，1645年パリに生れたフランドル系の彫刻家で，ローマで6年，ヴェネチアで3年勉強した後パリに帰り，ルイ14世の宮廷のための仕事をした。1681年にはアカデミーの会員になっている。

管理換

上に述べたのは，本館の作品購入費をもって購入したものであるが，本年は別に文化庁より下記の2点の油彩画を所管替えして頂いた。そのうちの1点のルノアールは，昨年度文化庁にお願いして購入して頂いたものであり，他の1点，クロード・ロランの名作は，本年度，文化庁に特にお願いして西洋美術館のために購入して頂いたものである。

ルノアール筆　1916年作

「風景の中の三人」

油彩　カンヴァス　0.653×0.543

ルノアール最晩年の，手が不自由になってはいたが，円熟し切った画境のうちに制作された，豊潤な色彩の作品である。旧所有者である梅原龍三郎氏によると，1965年パリの画商のところで見て，その美に魅せられて手に入れられたものという。この絵は，ルノアールの死後そのアトリエにあったもので，ベルネイム・ジューヌ編さんの "L'Atelier de Renoir" 第2巻の図版177に載っており，その題名は「風景の中の3人の女」(Trois femmes dans un paysage) となっている。しかし，よく見ると3人の人物中の1人は男性と考えられるので，当館では「風景の中の3人」と題することにした。晩年のルノアールとその家族を親しく知っておられた梅原龍三郎氏によると，描かれているのは息子のジャン（向って右）とその妻およびモデル，ガブリエル（向って左）であるという。

クロード・ロラン

「踊るサテュロスとニンフのいる風景」

油彩　カンヴァス　0.98×1.25

署名　年記1646

この絵は18世紀から英国にあってよく知られた絵であったが，1918年，ホウ伯爵所蔵品の売立てで売られて以来所在が不明になっていた。近年ブルッセルのコレクターが所有していることが知られ，その絵をパリのエイム画廊が買ってスイスに保存してあったものである。それを本年度，文化庁長官と文化財保護部および大蔵省の関係官各位の理解ある御好意によって，文化財保護部の特別購入予算をもって購入して頂き，今まで日本では見られなかったフランスの古典的風景画の典型的な作品を日本の方にお見せすることが出来るようになったのは嬉しい。

周知のように，クロードはその油絵作品の構図をスケッチして記録し，「リベル・ヴェリタティス」と題するアルバム（大英博物館所蔵）に集大成しているが，その108番にこの絵は描かれている。ただ，素描には空に数羽の鳥が飛んでいるが，本図には描かれていない。

クロード・ロランの全作品目録（「クロード・ロラン」，プリンストン大学1961年刊）の著者であるジュネーブ大学のロトリスベルガー教授は，この絵がベルギーで再発見されて間もなく，イタリアの美術史研究誌「パラゴーネ」に論文を発表し（Nuovi Aspetti di Claude Lorrain, Paragone, 1972）この絵について詳述しているが，それによると，この絵に署名とともに書かれた年記の最後の数字は明らかでないが，6と判読され，1646年の作と考えられる。この絵を注文したデュフールはリヨンの大商人で，人文学者であり，コレクターでもあったという。クロードがあまり描いたことがないパンとニンフを主題に選んだのも，デュフールの注文による可能性が強く，しかも結婚を記念しての注文であったかも知れないと同教授は推論している。

前景右手に描かれたパンは花冠をつけ，同じく花冠をつけた1人の美しいニンフと並んで腰かけ，中央より左寄りに描かれたサテュロスとニンフの踊りを見ている。特定の神話を主題とせぬ，二人の愛を祝福するような情趣豊かな，典雅な情景である。

しかし，この絵の本当の主題は，幾分理想化された，所謂ヒロイック・ランドスケープであることは言うまでもない。右手に巨大な樹々が繁る丘があり，左半分には，遠くの山にまで拡がる，ゆるやかに起伏する丘と湖のある広大な空間が描かれ，おそい午後の陽光が照し出す風景の美しさが，細部に至るまで鋭敏，繊細な感覚でとらえられている。

微妙な調子の変化で描き出されている，近景から中景をへて遠景に至る空間の拡がりは，見る人の心を大きくするような効果があり，この画家が大成したヒロイック・ランドスケープの真価を示している。

寄贈作品

昨年度時価総額5億円にも達する名作7点を寄贈して下さった梅原龍三郎画伯は，今年度さらに，高さ60cmもあるキュクラデス彫刻の名品と，ルノワールが若い時ルーヴルで，ルーベンスの「マリー・ド・メディシスの生涯」シリーズのうちの「マリーの統治」を模写した油彩画を寄贈して下さった。後者は394×702cmの大作を，45.8×83.5cmの小画面に，生命感溢れるドラマチックな動き，豪華な色彩，しっかりしたモデリングなど，原画の美しさを少しも損わずに生き生きと模写したもので，当時僅か25歳であったルノワールの達者な筆技に感心させられる。なお，ルノワールの研究家で，ルノワール全作品集の編著者であるフランソア・ドールト氏は，ルーヴル美術館で，ルノワールがこの絵の模写願いを提出した時の書類を発見した由である。

このような貴重な美術品を寄贈して下さった梅原画伯に，本館を代表してここに深甚の敬意と感謝の意を表する。

この外，画商水嶋徳蔵氏がジョン・E・ミレイ（1829—1896）の「あひるの子」を寄贈して下さった。もと松方コレクションにあったもので，その後神戸の和田コレクションにあったが，近年水嶋氏が購入，寄贈されたものである。署名とともに1889年の年記があり，ミレイ晩年の作である。ミレイはホルマン・ハントとロセッティとともに1848年プレ・ラファエライト兄弟団を組織して，プレ・ラファエライト運動を起したが，1853年頃より次第にこの運動より離れて描法が写実的になった。1863年頃よりは，さらに自由で大まかな筆遣いで，幾分ロマンティクなところのある，詩的な題材を好んで描いた。これは彼のそうした後期の様式を示す可愛らしい絵である。英国絵画にとぼしい本館としては，ヴィクトリア女王時代の英国絵画の一典型であり，しかももと松方コレクションにあったこの絵を寄贈して頂いたことは有難い。水嶋氏に厚く御礼申しあげる。

新収作品目録

この目録は，昭和50年度刊行の「国立西洋美術館年報 No. 9」に収載分以後，昭和51年3月までに当館予算で購入した作品と寄贈作品を含む。作品番号のPは絵画，Dは素描．Gは版画，Sは彫刻．OAは工芸品，大きさの表示は縦×横×奥行の順，単位はメートルである。

購入作品（7点）

15世紀フランドル派
École flamande du 15e siècle

P・1975-1
悲しみの聖母
油彩　板　0.496×0.354

来歴：パリ，オットー・ヴェルトハイマー

ドラクロワ，ウジェーヌ
シャラントン・サン・モーリス1798〜パリ1863
DELACROIX, Eugène
Charenton-Saint-Maurice 1798—Paris 1863

P・1975—2
墓に運ばれるキリスト
1859年
油彩　カンヴァス　0.56×0.46
左下に署名，年記：Eug. Delacroix 1859
来歴：M・A・ベルジョー；A・マーニュ；ジョルジュ・ベルネーム；ブエノス・アイレス，サンタ・マリーナ・コレクション

展覧会歴：『1859年のサロン』パリ，産業館，1859年，No. 320；『ドラクロワ』，パリ，国立美術学校，1885年，No. 133；『19世紀の20人の画家』，パリ，ジョルジュ・プティ画廊，1910年；『フランス派』，ブエノス・アイレス，1933年，No. 35；『ダヴィッ

NOUVELLES ACQUISITIONS

Ce supplément constitue la suite à notre Bulletin Annuel No. 9 *en 1975. Il comprend donc toutes les œuvres achetées et données depuis cette date jusqu'à la fin du mars de 1976. Le numéro précédant chaque œuvre indique notre numéro inventaire,* P *étant pour la peinture,* D *pour le dessin,* G *pour la gravure,* S *pour la sculpture, et* OA *pour le objet d'art. Les dimensions sont données en mètres, la hauteur précédant la largeur et la profondeur.*

ŒUVRES ACHETÉES

P • 1975-1
MATER DOLOROSA
Huile sur bois H. 0,496; L. 0,354

Prov.: Otto Wertheimer, Paris

P • 1975-2
LE CHRIST DESCENDU AU TOMBEAU
1859
Huile sur toile H. 0,56; L. 0,46
Signé en bas à gauche: Eug. Delacroix 1859

Prov.: M.A. Bergeaud; Mme. A. Magne; Georges Bernheim; Coll. Santa Marina, Buenos Aires

Exp.: Paris, Palais de l'Industrie, *Salon de 1859*, No. 320; Paris, Ecole Nationale des Beaux-Arts, *Delacroix*, 1885, No. 133; Paris, Gal. Georges Petit *"Vingt Peintres du 19e Siècle"*, 1910; Buenos Aires *"Escuela Francesa"*, 1933, No. 35; Buenos Aires, Museo Nacional de Bellas Artes, *La Pintura Francesa de David a Nostros Dias*, July-August 1939, No. 51; Musée de Bordeaux, *"De-*

ドから現代までのフランス絵画』，ブエノス・アイレス国立美術館，1933年7月～8月，No. 51；『ドラクロワ，その師，その友，その弟子』，ボルドー美術館，1963年9月，No. 55.

文献：A.-P. Chalons d'Arge *"Notices sur les principaux tableaux de l'exposition de 1859"*, Paris 1859; Z. Astruc *"Les Quatorze Stations du Salon"*, Paris 1859 (Préface par George Sand), pp. 255–275; M. Aubert *"Souvenirs du Salon de 1859"*, Paris 1859 pp. 145–149; L. Auvray *"Exposition des Beaux-Arts, Salon de 1859"*, Paris 1859, pp. 19–21; E. Chesneau *"Livre étude sur l'Art Contemporain. Salon de 1859"*, Paris 1859, pp. 164–166; A. Dumas *"L'Art et les Artistes Contemporains, Salon de 1859"*, Paris 1859, pp. 9–13; Ch. Baudelaire *"Le Salon de 1859"*, dans *"Revue Française"*, Paris 1859; Ch. Baudelaire *"Les Curiosités Esthétiques"*, Paris 1859, pp. 281–290; H. Dumesnil *"Le Salon de 1859"*, pp. 78–83; H. Fouquer *"Etudes Artistiques"*, Marseille 1859, pp. 7–9; V-Fournel *"Le Correspondant"* Paris 25 Mai 1859, pp. 157–159; Th. Gautier "L'Exposition de 1859, M. Eugène Delacroix", in *"Moniteur Universel"*, Paris 1859; A. Houssaye *"Le Monde Illustré"* Paris 7 Mai 1859, p. 295; L. Jourdan *"Les Peintres Français, Salon de 1859"* Paris 1859; M. de Lescure "La Peinture religieuse", dans *"Gazette de France"* Mai –Juin 1859; P. Mantz "Gazette des Beaux-Arts", Paris Mai 1859, vol. II, pp. 135–139; A. de Montaiglon "Revue Universelle des Arts", Paris 1859, vol. IX, p. 442; J. Rousseau "Le Figaro", Paris 10 Mai 1859; P. de Saint-Vicor "La Presse", Paris 23 Avril 1859; M. Stevens *"Impression d'une Femme au Salon de 1859"* Paris 1859, pp. 26–34; A. Tardieu "Le Constitutionnel", Paris 22 Avril 1859; A. Canteloube *"Eugène Delacroix"* Paris 1864, p. 193; A. Moreau *"E. Delacroix et son Oeuvre"*, Paris 1873, p. 193; A. Robaut *"L'œuvre complet d'Eugène Delacroix,"* Paris 1885, p. 371, No. 1380; M. Tourneaux *"Eugène Delacroix devant ses Contemporains"* Paris 1886, pp. 98–103; E.

ド・シャンパーニュ，フィリップ
ブリュセル1602～パリ1674
CHAMPAIGNE, Philippe de
Bruxelles 1602～Paris 1674

P・1975-6
マグダラのマリア
油彩　カンヴァス　0.725×0.59
署名なし

来歴：ジャン・バティスト・コルベール；エティエンヌ・ル・スール；ロンドン，ハイム・ギャラリー

文献：*Catalogue des tableaux des trois écoles... composant le cabinet de M. Le Sueur, Peintre...* Paris, 22 novembre 1791, n° 17; E. Bonaffé, Dictionnaire des amateurs francais au XVIIe siècle. Paris 1884, p. 349; Heim Gallery Catalogue—*Religious and Biblical Themes in French Baroque Painting*, Summer Exhibition 1974, no. 4, plate.
B. Dorival, Philippe de Champaigne, 1602–1674, 2 vols, Paris 1976, Vol II, pp. 386–7.

昭和50年度購入作品

Véron *"Eugène Delacroiwx"* 1887, p. 102; *"Chefs-d'œuvre de l'Ecole Française, Vingt Peintres du XIXe Siècle"*, Paris 1911, pp. 66–149. reprod.; E. Moreau-Nélaton *"Delacroix raconté par lui-même"*, Paris 1916, vol. II, fig. 405; R. Escholier *"Delacroix"*, Paris 1929, vol. III, p. 241, 249, reprod.; R. Huyghe *"L'Art et l'Âme"*, Paris 1960, p. 432, fig. 256; M. Sérullaz *"Mémorial de l'Exposition Eugène Delacroix organisée au Musée du Louvre"*, Paris 1963, nos. 498, 499; R. Huyghe *"Delacroix ou le combat solitaire,"* Paris 1964, pp. 482–483, pl. 366; A. Robaut / E. Chesneau, *L'œuvre complet de Eugène Delacroix*, New York, 1969, p. 371; L.R. Bortolatto, *L'opera pittorica completa di Delacroix*, Milano, 1972, p. 131 (N. 766); M. Strauss / D. Cooper, *Impressionism & Modern Art*. London & New York, 1974, pp. 2–3; M. Sérullaz, *Eugène Delacroix* New York, n.d, p.36.

昭和50年度購入作品

lacroix, ses Maîtres, ses Amis, ses Elèves", Mai—Septembre 1963, No. 55.

Bibl.: voir le text dans la section Japonaise

Achat du Musée en 1975

P • 1975-6
LA MADELEINE
Huile sur toile H. 0,725; L. 0,59
Non signé

Prov.: Collection Colbert, Vente Etienne Le Sueur, Paris 22 novembre 1791, Peut-être vente du 30 Messidor au X—19 juillet 1802 à Paris (n° 289 sans dimensions), puis vente Caillard (Paris, 3 mai 1830 n° 18) et vente Dowa (Cambrai, 28 avril 1873, n° 5), Heim Gallery, London

Bibl.: *Catalogue des tableaux des trois écoles... composant le cabinet de M. Le Sueur, Peintre...* Paris, 22 novembre 1791, n° 17; E. Bonaffé, Dictionnaire des amateurs français au XVIIe siècle, Paris 1884, p. 349; Heim Gallery Catalogue—*Religious and Biblical Themes in French Baroque Painting*, Summer Exhibition 1974, No. 4, plate; B. Dorival, Philippe de Champaigne, 1602–1674, 2 vols, Paris 1976, vol II, pp. 386–7.

Achat du Musée en 1975

ルオー，ジョルジュ
パリ1871～パリ1958
ROUAULT, Georges
Paris 1871～Paris 1958

P・1975-7
リュリュ（道化の顔）
1952年
油彩　カンヴァス　0.395×0.25
左下方に署名：GR

来歴：東京，梅原龍三郎氏；東京，島田啓作氏

昭和50年度購入作品

ブーシェ，フランソワ
パリ1703～パリ1770
BOUCHER, François
Paris 1703～Paris 1770

D・1975-1
へべ
三色のクレヨン　灰色紙　0.360×0.228
署名なし

来歴：1845年4月14～15日のパリの売立て(49番)；L. コブレンツ夫妻コレクション（1917年1月24～25日パリのオテル・ドゥルオで売立て，25番）；1920年11月22日パリのガレリー・ジョルジュ・プティで売立て，4番，フランス，個人コレクション；ニューヨーク，ウィルデンスタイン

展覧会歴：『北アメリカのコレクションにあるフランソワ・ブーシェ：素描100点』，ワシントン，ナショナル・ギャラリー・オブ・アート，1973年12月23日～1974年3月17日，および，シカゴ，アート・インスティテュート，1974年4月4日～5月12日

文献：A. Ananoff, *L'œuvre dessiné de François Boucher (1703–1770), Catalogue raisonné I,* Paris, 1966, pp. 194–195, n° 747, fig. 122; R. Sh. Slatkin, *François Boucher in North American Collections; 100 Drawings,* Washington—Chicago 1973/74, p. 48, n° 37, fig; E. Williams, François Boucher in North American Collections, *Master Drawings,* XII, n° 2, 1974, p. 173.

昭和50年度購入作品

P • 1975-2
LULU (TÊTE DE CLOWN)
1952
Huile sur toile H. 0,395; L. 0,25
Signé à gauche, vers le bas: GR

Prov.: M. Ryuzaburo Umehara, Tokyo; M. Keisaku Shimada, Tokyo

Achat du Musée en 1975

D • 1975-1
HÉBÉ
Trois Crayons sur papier gris H. 0,360; L. 0,228
Non signé

Prov.: Paris, Vente anonyme, 14—15 Avril 1845, n° 45; M. et Mme L. Coblentz (Paris, Hôtel Drouet, Vente M. et Mme L. C., 24—25 janvier 1917, p. 11, n° 25, pl. 1); Paris, Galerie Georges Petit, Vente anonyme, 22 novembre 1920, n° 4; Collection particulière, France; Wildenstein, New York

Exp.: *François Boucher in North American Collections: 100 Drawings*, National Gallery of Art, Washington, D.C. (December 23, 1973~March 17, 1974) and The Art Institute of Chicago (April 4~May 12, 1974), No. 37, fig.

Bibl.: A. Ananoff, *L'Oeuvre dessiné de François Boucher (1703–1770), catalogue raisonné, I*, Paris, 1966, pp. 194–195, n° 747, fig. 122; R. Sh. Slatkin, *François Boucher in North American Collections: 100 Drawing*, Washington—Chicago 1973/74, p. 48, n° 37, fig; E. Williams, François Boucher in North American Collections, *Master Drawings*, XII, n° 2, 1974, p. 173.

Achat du Musée en 1975

ヴァン・クレーヴ，コルネイユ
パリ1645～パリ1732
VAN CLÈVE, Corneille
Paris 1645～Paris 1732

S・1975-1
ヴィーナスとキューピッド
1700～1710年頃
ブロンズ　高さ0.457

S・1975-2
プシュケとキューピッド
1700～1710年頃
ブロンズ　高さ0.473

以上2点は対の作品

来歴：パリ，ハイム画廊

展覧会歴：これらの像で金箔を施したものが1776年のル・マリエの売立てに出た。また，これとは別の一対の作品がロンドンとニューヨークの展覧会に出品された。(French Paintings and Sculptures of the XVIIIth century, Heim, London, 1968, nos. 38–40 repr.; The French Bronze, 1500–1800, Knoedler, New York, 1968, no. 43 A.B. repr.).

文献：F.-G. Joullain, 《*Catalogue de sculptures en bronze... provenant du Cabinet de M. Le Marié, ancien conseiller au Châtelet*》, Paris, 9-12 septembre 1776, n° 5 (《Vénus et l'Amour: pour pendant, Psiché tenant une lampe, regarde l'Amour endormi. Hauteur 16 pouces... Le tout de bronze doré》); H.R. Weihrauch, *Europälischen Bronzestatuetten, 15–18 Jahrhundert*, Braunschweig, 1967 (p. 415, pl. 498).

昭和50年度購入作品

S • 1975-1
VÉNUS DÉSARMANT L'AMOUR
Vers 1700–1710
Bronze H. 0,457

S • 1975-2
PSYCHÉ DÉCOUVRANT L'AMOUR
Vers 1700–1710
Bronze H. 0,473

Paires de bronzes

Prov.: Galerie Heim, Paris

Exp.: Une paire de ces bronzes, dorés, figurait à la vente Le Marié en 1776; deux autres paires furent récemment exposées à Londres et à New York (*French Paintings and Sculptures of the XVIIIth century*, Heim, London, 1968, n°s 38-40 repr.; *The French Bronze, 1500–1800*, Knoedler, New York, 1968, n° 43 A.B. repr.).

Bibl.: F.-G. Joullain, «*Catalogue de sculptures en bronze...provenant du Cabinet de M. Le Marié, ancien conseiller au Châtelet*», Paris, 9-12 septembre 1776, n° 5 («Vénus et l'Amour: pour pendant, Psiché tenant une lampe, regarde l'Amour endormi. Hauteur 16 pouces...Le tout de bronze doré)»; H.R. Weihrauch, *Europäische Bronzestatuetten 15-18 Jahrhundert*, Braunschweig, 1967 (p. 415, pl. 498).

Achat du Musée en 1975

寄贈作品（5点）

フィッサー，カレル N.
パーペンドレヒト1928～
VISSER, Carel N.
Papendrecht 1928～

G・1975-1
16 のブロック
1972年
木版　紙　0.57×0.84（紙面）
右下に署名・年記と書き込み：1–4

展覧会歴：『第8回東京国際版画ビエンナーレ展』東京国立近代美術館，1972年11月～12月，カタログ no. 102

昭和50年度購入作品

ファールシュトレーム，オイヴィンド
サンパウロ1928～
FAHLSTRÖM, Oyvind
São Paulo 1928～

G・1975-2
7 つの "SOMBA"
1973年
孔版　紙　1.02×0.70（紙面）
右下に署名と書き込み：7 "SOMBA" elements, work proof I/I

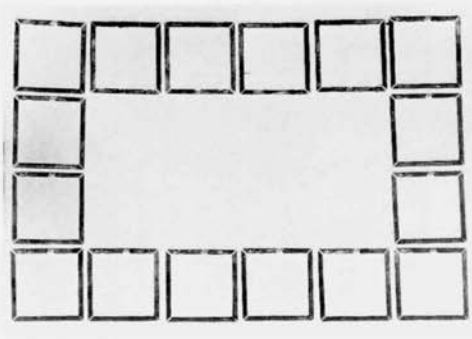
展覧会歴：『第9回東京国際版画ビエンナーレ展』，東京国立近代美術館，1974年11月～1975年1月，カタログ no. 48

昭和50年度購入作品

G • 1975-1
16 BLOCS
1972
Gravure sur bois, papier
H. 0,57; L. 0,84 (dimension du papier)
Signé, daté en bas à droite avec inscription: 1-4

Exp.: "The 8th International Biennal of Prints in Tokyo", The National Museum of Modern Art, Tokyo, Nov.—Dec. 1972, Catalogue No. 102.

Achat du Musée en 1975



G • 1975-2
7 "SOMBA" ÉLÉMENTS
1973
Sérigraphie sur papier
H. 1,02 × 0,70 (dimension du papier)
Signé en bas à droite avec inscription: 7 "SOMBA" elements, work proof I/I

Exp.: *"The 8th International Biennal of Prints in Tokyo"*, The National Museum of Modern Art, Tokyo, Nov. 1974~Jan. 1975, Catalogue No. 48.

Achat du Musée en 1975

ルノワール，ピエール・オーギュスト
リモージュ1841～カーニュ1919年
RENOIR, Pierre Auguste
Limoges 1841～Cagnes 1919

P・1975-3
ルーベンス作《マリー・ド・メディシスの統治》の模写
1861年
油彩　カンヴァス　0.458×0.835
署名なし

来歴：パリ，シャルル・ヴィグィエ（1906年2月9日パリで売立て，53番）；パリ，M・ポティエ；パリ，ジョス・ヘセル；パリ，アレフレッド・サヴォワール；ニューヨーク，個人コレクション；東京，梅原龍三郎氏

文献：F. Daulte, *Auguste Renoir, Catalogue raisonné de l'œuvre peint, I: Figures 1860–1890,* Lausanne, 1971, no. 7.

昭和50年梅原龍三郎氏より寄贈

S・1975・3
キュクラデス彫刻
紀元前2500～2000年
大理石　高さ 0.605

来歴：パリ，ニコラス・クートゥラキス；東京，梅原龍三郎氏

昭和50年梅原龍三郎氏より寄贈

ミレイ，ジョン・エヴァリット
サザンプトン1829～ロンドン1896
MILLAIS, John Everett
Southampton 1829～London 1896

P・1975-4
あひるの子
1889年
油彩　カンヴァス　1.22×0.76
右上に年記とモノグラム
旧松方コレクション

昭和50年水嶋徳蔵氏より寄贈

P • 1975-3
COPIE DU TABLEAU DE RUBENS: LE COURONNEMENT DE MARIE DE MÉDICIS
1861
Huile sur toile H. 0,458; L. 0,835
Non signé

Prov.: Charles Viguier, Paris (Vente Viguier, Paris, 9 février 1906, n° 53); M. Pottier, Paris; Jos. Hessel, Paris; Alfred Savoir, Paris; Collection particulière, New York; M. Ryuzaburo Umehara, Tokyo

Bibl.: F. Daulte, *Auguste Renoir, Catalogue raisonné de l'œuvre peint, I: Figures 1860–1890,* Lausanne, 1971, n° 7

Donnée par M. Ryuzaburo Umehara en 1975

S • 1975-3
IDOLE CYCLADIQUE
2500–2000 av. J.-C.
Marbre H. 0.605

Prov.: Nicolas Koutoulakis, Paris; M. Ryuzaburo Umehara, Tokyo.

Donnée par M. Ryuzaburo Umehara en 1975

P • 1975-4
DUCKLINGS
1889
Huile sur toile H. 1,22; L. 0,76
Daté en haut à droite avec monogramme
Ancienne Collection Matsukata

Donnée par M. Tokuzo Mizushima

管理換作品（2点）

ルノワール，ピエール・オーギュスト
リモージュ1841～カーニュ1919年
RENOIR, Pierre Auguste
Limoges 1841～Cagnes 1919

P・1975-5
風景の中の三人
1916年
油彩　カンヴァス　0.653×0.543

来歴：パリ，アレクス・マギー；東京，梅原龍三郎；東京，嶋田祐一

昭和50年度文化庁より管理換

ジュレ，クロード（通称クロード・ロラン）
シャマーニュ1600～ローマ1682
GELLEE (Lorraine), Claude
Chamagne 1600～Rome 1682

P・1975-8
踊るサテュロスとニンフのいる風景
1646年
油彩　カンヴァス　0.98×1.25
署名年記：CLAVD (...)/I.V.R. (FECIT) 164 (6?)

来歴：サー・トマス・フランクランド；ホウ伯爵；ブリュッセル，個人コレクション；パリ，ハイム画廊

文献：M. Roethlisberger, "Nuovi aspetti di Claude Lorrain" in *Paragone*, n. 273, Novembre 1972, pp. 24–36; M. Roethlisberger / D. Cecchi, *L'opera completa di Claude Lorrain*, Milano, 1975, p. 108 (n.173) e Tav. XXVII.

昭和50年度文化庁より管理換

P • 1975-5
TROIS FIGURES DANS UNE PAYSAGE
Huile sur toile H. 0,653; L. 0,543

Prov.: Collection Alex Maguy, Paris; Ryuzaburo Umehara, Tokyo; Yûichi Shimada, Tokyo.

Transférée de l'Agence des Affaires Culturelles

P • 1975-8
Paysage avec la fête de Pan
1646
Huile sur toile H. 0,98; L. 1,25
Signé: CLAVD (...)/I.V.R. (FECIT) 164 (6?)

Prov.: Sir Thomas Frankland; Earl Howe; Collection particulière, Brussel; Heim, Paris.

Bibl.: M. Roethlisberger, "Nuovi aspetti di Claude Lorrain", in *Paragone*, n. 273, Novembre 1972, pp. 24-36; M. Röthlisberger/D. Cecchi, *L'opera completa di Claude Lorrain*, Milano, 1975, p. 108 (n. 173) e Tav. XXVII.

Transférée de l'Agence des Affaires Cuturelles

アレクサンドロス大王の空中飛行——その美術作品カタログ

越　宏一

DIE LUFTFAHRT ALEXANDER DES GROSSEN —EIN WERKKATALOG DER BILDZEUGNISSE

Koichi Koshi

I

Pseudo-Kallisthenes (II, 41):

① *Ὁ Ἀλ. ὑπέλαβε διὰ τῶν σημείων τούτων ἐκεῖσε εἶναι τὰ ἄκρα τῆς γῆς.* ④ *(Ὡς δὲ ἔφθασαν εἰς τὴν ἀψῖδα ἣν ἔκτισεν Ἀλέξανδρος) ἔγραψε (πάλιν ἐν αὐτῇ) οὕτω διὰ γλυφίδος·* ⑧ *Οἱ βουλόμενοι εἰσελθεῖν ἐν τῇ τῶν μακάρων χώρᾳ, δεξιᾷ πορευέσθωσαν.* [　] ⑳ *Προσέταξεν οὖν συλληφθῆναι ἐκ τῶν ὀρνέων τοῦ τόπου ἐκείνου δύο. Καὶ ἦσαν πάνυ μέγιστα* [　] *καὶ ἀλκιμώτατα καὶ ἥμερα·* ㉕ *βλέποντα γὰρ τοὺς ἀνθρώπους οὐχ ἔφευγον. Τινὲς δὲ τῶν στρατιωτῶν καὶ ἐπέβαινον ἐν τοῖς ὤμοις αὐτῶν·* ㉚ *τὰ δὲ βαστάζοντα* [　] *ἀνίπταντο.* ㉝ *Ἤσθιον δὲ καὶ θῆρας ἀγρίους, ἔνθεν τι καὶ πλεῖστα τῶν* [　] *ὀρνέων ἦλθον πρὸς αὐτοὺς διά τοὺς ἵππους θνήσκοντας.* ㊴ *Δύο δὲ ἐξ αὐτῶν κρατήσας ὁ Ἀλ. προσέταξε μὴ* [　] *φαγεῖν βρώματα μέχρι τριῶν ἡμερῶν.* ㊸ *Τῇ δὲ τρίτῃ ἡμέρα προσέταξε κατασκευασθῆναι ξύλον ὅμοιον ζυγῷ καὶ τοῦτο προσδεθῆναι*
ἐν τοῖς τραχήλοις αὐτῶν. ㊽ *Εἶτα* [　] *ἐλθὼν αὐτὸς ἐν μέσῳ (τοῦ ζυγοῦ), ἐκράτησε τὸ δόρυ ὡσεὶ πῆχυν* [　] *τὸ μῆκος* [　] *ἔχον ἐπάνω ἧπαρ* [　]. ㊾ *Εὐθὺς οὖν ἀναπτάντα τὰ ὄρνεα* [　] *τοῦ φαγεῖν τὸ ἧπαρ* [　], *ἀνῆλθε μετ'αὐτῶν ὁ Ἀλ. ἐν τῷ ἀέρι εἰς τὸ ὕψος.* [　] ㊺ *Πάνυ δὲ ἔτρεμε διὰ τὴν* [　] *τοῦ ἀέρος ψυχρότητα* [　] *τὴν ἐκ τῶν* [　] *ὀρνέων ἐκείνων γεγενημένην.*

① *Εἶτα εὐθὺς συναντᾷ αὐτὸν πετεινὸν ἀνθρωπόμορφον καὶ λέγει αὐτῷ.* [　] *Ἀλέξανδρε,* [　] *τὰ ἐπίγεια μὴ γινώσκων, πῶς τὰ οὐράνια καταλαβεῖν ἐπιζητεῖς; ὑπόστρεψον οὖν διὰ τάχους ἐπὶ τὴν γῆν, μήπως τοῖς ὀρνέοις τούτοις κατάβρωμα γενήσῃ.* ⑦ *Καὶ πάλιν φησὶ* [　]*· πρόσσχες* [　] *ἐπὶ τὴν γῆν κάτω. Ὁ δὲ Ἀλ. μετὰ φόβου προσεῖχε, καὶ ἰδοὺ εἶδεν ὅτι ὄφις μέγας κύκλῳ, μέσον δὲ τοῦ ὄφεως ἅλων* [　]. ⑪ *Καὶ λέγει αὐτῷ ὁ συναντήσας· γινώσκεις τί ἐστὶ ταῦτα; ἡ ἅλων ἐστὶν ὁ κόσμος· ὁ δὲ ὄφις ἡ θάλασσα* [　] *ἡ κυκλοῦσα* [　] *τὴν γῆν.* ⑮ *Αὐτὸς δὲ ὑποστρέψας τῇ βουλῇ τῆς ἄνω προνοίας κατῆλθεν ἐπὶ τὴν γῆν μακρόθεν τοῦ στρατοπέδου (αὐτοῦ) ὁδὸν ἡμερῶν ἑπτά.* [　] ⑳ *Εἶχε δὲ ἐκεῖ σατράπην* [　] *αὐτοῦ καὶ λαβὼν παρ' αὐτοῦ τριακοσίους ἱππεῖς. ἐπορεύθη σὺν αὐτοῖς καὶ*

ἦλθεν εἰς τὸν στρατὸν (αὐτοῦ). Οὐκέτι οὖν προσέθετο ἀδυνάτοις ἐπιχειρεῖν.

(Paris, Bibl. Nat., Cod. suppl. gr. 113)

「①アレクサンドロスはこれらの徴(しるし)によって，そこに大地の果てがあると悟った。④（文意不明）彼は（再びそのアーチ門に）次のように鑿(のみ)を用いて彫り込んだ。⑧福者達の国に入ろうと欲する人々は右手を歩め。[　　]⑳さて彼はその場所で，鳥どもの中から二羽を捕えるように命じた。それらは実に大きな鳥で，[　　]すばらしく丈夫で，しかもおとなしかった。㉕だから人間達を見ても逃げなかった。そこで兵士達の幾人かは，鳥どもの肩に跨った。㉚すると鳥どもは[　　]乗せて飛翔した。㉝鳥どもは野獣を餌食にしていた。そこで[　　]鳥どもはたくさん，死んだ馬を求めて人間達の方にやってきた。㊴彼等の中の二羽をアレクサンドロスは捕えて，三日の間[　　]餌を食べさせぬように命じた。㊸さて三日目に木材を軛そっくりに組み立てて，これを鳥どもの頸に結びつけた。㊽それから[　　]。[　　]彼は（軛の）真ん中に乗り込み，長さ[　　]ペーキュスの槍を持っていたが，その上の方には[　　]肝臓がついていた。㊾さて鳥どもが[　　]肝臓を食べようとして，飛び上がるとすぐに，彼等と一緒にアレクサンドロスも大空高く上がっていった。[　　]㊺彼は[　　]空気と[　　]鳥ども[　　]から生ずる寒気のために激しく身を震わせた。

「①すると突然，人間の姿をした一羽の鳥が現われ，彼に言う。〈[　　]アレクサンドロスよ，[　　]地上のことも知らないで，どうして天上のことを探究しようと望むのか。さあ早く地上に引き返し，これらの鳥どもの餌食にならぬようにしなさい。〉⑦そしてまた[　　]言う。〈[　　]大地を見下ろしなさい。〉そこでアレクサンドロスは恐れを抱きながら見下ろした。すると見よ，彼は大蛇が環を作っていて，その蛇の環の中に[　　]円板があるのを認めた。⑪するとその出会った者が彼に言う。〈汝はあれが何か分かるか。あの円板が世界である。あの蛇は海で[　　]，世界を取り巻き，大地[　　]を巡っているのだ。〉⑮そこで彼は天上の摂理からの勧告に従って引き返し，(彼の)陣営から七日間の道程(みちのり)離れた地点に降りた。[　　]⑳さて彼はその土地に自分が任命した総督(サトラペース)を置いていた。そして彼のもとから三百の騎兵を得て，彼等と共に進んで，(彼の)軍隊に到着した。彼はもはや二度と不可能な事柄を企てようとは思わなかった。」

(偽カリステネス『アレクサンドロス物語』第II章41節より)[1]

＊ 略号で引用した文献については，本稿カタログ篇（独文）の冒頭に掲げた文献リストを参照。なお，本稿は「西洋中世美術における世俗的主題の研究」の一部をなすものである。

(1) 本稿25および30頁参照。

II

西洋中世世界において最も人気があった古代文学・古代史上の人物は，疑い無く，ギリシア世界帝国の建設者アレクサンドロス大王(356—323 B.C.)である。アキレウスやオデュッセウス，カエサルやアウグストゥスも，中世文学・美術において演じたアレクサンドロス大王の役割とは比較できない。実に，アイスランドからインドネシアのスンダ列島に至るまで，35ヵ国語による80以上の文学作品が，この偉大なマケドニア王の生涯とその英雄的行為を称えているのである[2]。

中世におけるアレクサンドロス大王の人気には，幾つかの理由が考えられよう。彼は，彗星の如く現われて数々の軍事上の成功を収めながら若死した歴史上の人物であるが，特にペルシアやインドの戦役における様々の珍しい冒険譚は，死後間もなく伝説化され，3世紀に至って『アレクサンドロス物語(ロマンス)』として集大成された。中世のアレクサンドロス文学[3]が拠所としたのはまさに，大王に関する古代の歴史的な著作（例えば，プルタルコスの『英雄伝』Vitae Parallelae やアリアノスの『アレクサンドロス遠征記』*'Ανάβασις 'Αλεξάνδρου*）ではなく，この空想的な『アレクサンドロス物語』であった。西洋中世美術におけるアレクサンドロス大王も，歴史上の人物というより，むしろ一定の概念の担い手として，あるいは，中世人の空想の対象として登場している。この点で中世美術の作例は，アレクサンドロス大王とダリウス3世との戦いを表わしたモザイク（ナポリ国立美術館）や《アレクサンドロスの石棺（イスタンブール考古学博物館）をはじめとする，歴史人物としての大王を扱った古代美術の作例[4]とは大きく異なるのである。

西欧中世における古代のアレクサンドロス文学の受容は，東方に対する関心が高まった十字軍時代に特に著しいが，もともとキリス

---

(2) H. Buntz, Die deutsche Alexanderdichtung des Mittelalters, Stuttgart 1973, S. 1.

(3) P. Meyer, Alexandre le Grand dans la littérature française du moyen âge, Paris 1886.

(4) これについては PFISTER S. 330 ff. を参照。

(5) 「キッテムの地よりいで来たれる，ピリポの子，マケドニヤびとアレキサンドロスは，ペルシャびとおよびメデアびとの王ダリウスを討ちし後，彼に代わりて王となれり。(彼はさきにギリシャの王となりし者なり)。彼は多くの戦いをなし，とりでを奪い，地の王たちを殺し，地の果てにまで至りて，多くの国々の民を略奪せり。かくて地，彼の前に穏やかとなるや，彼は高められて，その心おごれり。彼は，はなはだしく強き軍隊を集めて，諸国，諸民，諸王を治め，彼らはみな彼にみつぎを納めたり。

この後，かれ病にかかりしが，自ら死の近づけるを悟りぬ。ここにおいて，彼はその若きときよりおのれと共に育てられし，いと尊ばれおる臣下を召し，彼のなお生きおる間にその国を彼らに分かちたり。かくて，アレキサンドロスは十二年の間世を治めて死ねり。

その臣下ら，おのおの，おのが領地にて民を治めたり。彼の死後，彼らはみな王冠をいただきしが，彼らの子らも多くの年の間，そのごとくなして地上に多くの悪をなしぬ。」(『アポクリファ—旧約聖書外典—』，

ト教中世にとっては，アレクサンドロス大王は聖書に言及されていて，従って肯定的であれ，否定的意味合いにおいてであれ，キリスト教救済史上，一定の位置を占めているということも，大王の永続的な人気の原因として見逃せない。彼は，旧約聖書マカベア第一書(I, 1–8 節)[5]に述べられているのみならず，四つの世界帝国についてのダニエルの夢をはじめとする幾つかの話（ダニエル書 VII, 17; VIII, 5–21; XI, 3 以下）もアレクサンドロス大王に関係づけられるのである[6]。

III

ところで，アレクサンドロス大王の伝説的な物語は，一体どのようにして西欧中世の人々に伝えられたのであろうか。

大王の生存中すでに口伝による伝説物語の伝統が始まり，そこからやがて最初の小規模な著作が幾つか生まれたものと思われるが，中世のアレクサンドロス文学にきわめて大きな影響を及ぼした『アレクサンドロス物語』は，比較的遅く，大王の死後 600 年以上たった 3 世紀にアレクサンドリアのギリシア人によって著わされた。この作品の著者は15世紀以来，伝統的に，大王の遠征に従軍した歴史家カリステネス (370—327 B.C.) とされているが，それが全くの誤りであることは周知の通りである。この偽名のカリステネスPseudo-Kallisthenes[7]の『アレクサンドロス物語』には，少なくとも五つの，先行する文献が利用されていることが近年の研究により明らかにされている[8]。

今日，偽カリステネスのギリシア語原本自体は伝えられていないが，幾つかのリセンション（α, β, γ, δ など）に分類できる多数の後代の写本が現存している[9]。しかしながら，西欧中世のアレクサンドロス文学の源泉となったのは，それらの偽カリステネスのギリシア語本ではなく，その二種類のラテン語訳，すなわち，ユリウス・ヴァレリウス Julius

---

日本聖公会出版部，1968 年による）

(6) これについては聖ヒエロニムスの注釈を参照。Hieronym., *Comm. in Danielem* (Migne, P. L., XXV, Sp. 529 ff.).

(7) 偽カリステネスについては，K. Ziegler und W. Sontheimer, Der kleine Pauly, Stuttgart 1969, III, S. 86 f. を参照。

(8) R. Merkelbach, Die Quellen des griechischen Alexanderromans, München 1954; H. Buntz, op. cit., S. 3.

(9) 古代末期にすでに挿絵入りの偽カリステネス写本が存在したという推定に関しては次の文献を参照。
K. Weitzmann, Illustration in Roll and Codex, Princeton 1947, S. 145 f., 188, 196, u. Fig. 134; Idem, Classical Mythology in Byzantine Art, Princeton 1953, S. 102 ff. u. Fig. 108–11; Idem, Ancient Book Illumination, Cambridge, Mass. 1959, S. 105 ff.; D.J.A. Ross, Olympias and the Serpent: the Interpretation of a Baalbek Mosaic and the Date of the illustrated Pseudo-Callisthenes, in: Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, XXVI, 1963, S. 1 ff.
現存する挿絵入りギリシア語偽カリステネス写本は次の 2 点であるが，両方とも空中飛行の挿絵を含まない。Oxford, Bodleian Lib., Cod. Barocci 17 (13世紀); Venezia, San Giorgio dei Greci (14世紀).

Valerius による『マケドニアのアレクサンドロスの業績』Res gestae Alexandri Macedonis（4世紀前半）[10]，および，ナポリの主席司祭レオ Leo の『アレクサンドロス大王の出生と勝利』Nativitas et victoria Alexandri Magni regis（9世紀後半）[11] であった。

ただし，これら二つのラテン語訳も，その当初の形で西欧世界に伝播したわけではなかった。ヴァレリウスのラテン語訳が，9世紀に作られたその『抄録』Epitome[12] によって西欧のアレクサンドロス文学（例えば，12世紀・フランスの『ロマン・ダレクサンドル』群 Roman d'Alexandre[13]）に影響を及ぼしたのと同様に，ナポリのレオのラテン語訳も，11世紀以降に作られた三種類の改定版 Historia de Preliis I^1, I^2, I^3 [14] を通じて西欧世界に広まっていったのである（例えば，本稿カタログ篇に挙げられている13世紀の『古フランス語散文体アレクサンドロス物語』Der altfranzösische Prosa-Alexanderroman[15] は，12世紀後半の Historia de Preliis I^2 から派生したものである）。

IV

このようにラテン語訳を介して西欧世界に伝えられた偽カリステネスの『アレクサンドロス物語』中，西洋中世美術史上最も重要な役割を演じたエピソードは，「アレクサンドロス大王の空中飛行」[16] である。西欧では13世紀以降，ラテン語やフランス語・ドイツ語で書かれた，偽カリステネス系の挿絵入りアレクサンドロス物語写本が多数制作されたが（本稿作品カタログ52—68，83，84番参照），空中飛行の場面はこれらにおいては言うに及ばず，ヤンセン・エニーケル Jansen Enikel の『世界年代記』Weltchronik（1277年以降，

(10) B. Kübler, Iuli Valeri Alexandri Polemi Res Gestae Alexandri Macedonis translatae ex Aesopo Graeco, Leipzig 1888.

(11) F. Pfister, Der Alexanderroman des Archipresbyters Leo, (Sammlung mittellateinischer Texte 6), Heidelberg 1913.
ナポリのレオは，その前置きに述べているように，10世紀中葉コンスタンチノープルに赴き，同市でアレクサンドロス大王物語のギリシア語写本の写しを作製してイタリアに持ち帰った。彼は帰国後（968/69年頃），そのラテン語訳を作った（オリジナルは現存せず）のであるが，そのもととなった写本は，ヴァレリウス訳に使われた，偽カリステネスの原本に最も近いリセンション α とは別のリセンション（δ）に属するものである。

(12) J. Zacher, Iulii Valerii Epitome, Halle 1867.

(13) The Medieval French Roman d'Alexandre, (Elliott Monographs), Princeton 1937 ff.

(14) A. Hilka, Der altfranzösische Prosa-Alexanderroman nach der Berliner Bilderhandschrift nebst dem lateinischen Original der Historia de prelliis (Rez. I^2), Halle 1920.

(15) Ibid.

(16) この物語の起源（特にユダヤのタルムード文学，あるいはバビロニアのエタナ神話との関連）については，次の文献を参照。
Th. Nöldeke, Beiträge zur Geschichte des Alexanderromans, in: Denkschriften der Kais. Akad. der Wissenschaften in Wien, Phil.-Hist, Klasse,

作品カタログ69番以下参照)[17] や，ドイツ語の『歴史聖書』Historienbibel (作品カタログ77—80番参照)[18] を初めとする各種のテキストの写本におけるアレクサンドロス大王に関するセクションの挿絵としても描かれている。その上，空中飛行のテーマは，これと対をなす海中旅行のエピソード[19]の場合と違って，写本においてのみならず，しばしば中世の教会堂を飾る浮彫や床モザイクなど，モニュメンタル美術にもその作例が見出される[20]。海中旅行の話には，単なる伝説あるいは作り話以上のものに解釈されるような要素が欠けているのに対し，空中飛行の話は様々に解釈される可能性を多分に含んでいたからである。

例えば，ビザンチン世界ではアレクサンドロス大王は常にビザンチン皇帝の手本(*κάλος βασιλεύς*)であり，空中飛行のエピソードは勝利のシンボルとみなされ[21]，しばしば魔除けのシリーズ中の一場面として，教会堂の壁面その他に表わされた（作品カタログ11—13番参照)[22]。

西欧世界においても，このような肯定的な意味合いで表現された作例が見出されないわけではない。例えば，ゾエストの聖パトロクルス教会に所蔵されている12世紀の刺繍作品（かつて聖遺骨のクッションとして使われていたもの。作品カタログ87番参照）および，マトリーチェ（南イタリア）のサンタ・マリア・デラ・ストラーダ教会南入口のリュネット浮彫（12世紀，作品カタログ29番参照）では，空中飛行の場面はアグヌス・デイ Agnus Dei（神の子羊）と対をなして表わされている。つまり，アレクサンドロス大王の昇天場面によって，キリスト者はアグヌス・デイが象徴する天国に入れるという教義がここでは図解されているのである[23]。

XXXVIII, 1890, S. 26; M. Lidzbarski, Zu den Arabischen Alexandergeschichten, in: Zeitschrift für Assyriologie, VIII, 1893, S. 266; MILLET S. 111 ff.; SETTIS-FRUGONI S. 133 ff.

(17) Jansen Enikels Weltchronik, hg. von Ph. Strauch, in: Monumenta Germaniae Historica, Deutsche Chroniken I, 1, Hannover 1892; Ross 1971 S. 80 ff.

(18) J. F. L. Th. Merzdorf, Die deutschen Historienbibeln des Mittelalters, Tübingen 1870; Ross 1971 S. 107 ff.

(19) A. Hilka, op. cit., S. xxxviii–xli; D.J.A. Ross, Alexander and the faithless lady: a submarine adventure, London, Birkbeck College, 1967.

(20) 偽カリステネス系のアレクサンドロス物語において，空中飛行の直前に述べられている「海中旅行」を表わすモニュメンタルな作例としては，筆者の知る限り，ローマのパラッツオ・ドーリアにある15世紀・フランドルのタピスリー（作品カタログ88番参照）が挙げられるにすぎない。

(21) H.J. Gleixner, Das Alexanderbild der Byzantiner, Diss. München 1961; H.J. Gleixner, Alexander der Große, in: Reallexikon zur byzantinischen Kunstgeschichte, Bd. I, Stuttgart 1963, Sp. 96 ff.

(22) A. Grabar, L'Art profane en Russie prémongole et le《Dit d'Igor》, in: L'art de la fin de l'antiquité et du Moyen Âge, I, Paris 1968, S. 301 ff.

(23) SETTIS-FRUGONI S. 298 ff.

空中飛行のテーマはしかしながら，南イタリアのオトラント大聖堂およびトラニ大聖堂の床モザイク（共に12世紀，作品カタログ27・28番参照）の場合に見られるごとく，西欧中世では概して，あらゆる悪徳の元であるスペルビア Superbia（傲慢，思いあがり）のシンボルとみなされる傾向にあった[24]。この見方が，アレクサンドロス大王に関する聖書の記述（マカベア第一書 I, 1–8）[25] に影響されたものであることは明らかである。すでに5世紀初頭，パウルス・オロシウス Paulus Orosius はその著『反異教古代史』Historiarum Adversus Paganos Libri Septem 第3章において，アレクサンドロスを反キリストの先駆者とみなしているが，彼同様，12世紀の神学者たちも否定的なアレクサンドロス観を表明している[26]。例えば，修道院長ゴットフリート・フォン・アドモント Gottfried von Admont は，アレクサンドロスをアダムとエヴァを誘惑した悪魔（へび）と比較し[27]，フランスのスコラ哲学者ユゴー・ド・サン・ヴィクトール Hugo de Saint Victor (1096–1141)[28] が引用したイザヤ書の一節 (XXIV, 13–14)[29] を挙げて反キリストの先駆者たるアレクサンドロス大王のスペルビアを強調しているのである[30]。しかも興味深いことに，南イタリアのトラニ大聖堂の床モザイク（12世紀，作品カタログ28番参照）やバーゼル大聖堂内陣周廊の柱頭浮彫（12世紀後半，作品カタログ33番参照）では事実，アレクサンドロスの空中飛行はアダムとエヴァの原罪の場面と対比されて表わされている。

このような一定の道徳的概念の担い手としてアレクサンドロス大王の空中飛行が表わさ

---

(24) これについては次の文献を参照。
GOLDSCHMIDT S. 72; LOOMIS S. 184; J. Sauer, Symbolik der Kirchengebäudes und seine Ausstattung in der Auffassung des Mittelalters, 2. Aufl., Freiburg i. Br. 1924, S. 439; MÂLE S. 270 f.
なお，西欧中世におけるアレクサンドロス像の変遷については次の文献を参照。
E. Grammel, Studien über den Wandel des Alexander-Bildes in der deutschen Dichtung des 12. und 13. Jahrhunderts, Diss. Frankfurt a. M. 1931; HÜBNER S. 32 ff.; CARY S. 77 ff.

(25) 聖書のこの個所に関する中世の解釈については，Fulgent. *De aetatibus mundi et hominis* X, XXXVII-XL (CARY S. 369 f.); Hrabanus Maurus, *Commentaria in libros Machabeorum*, I, 1 (Migne, P L., CIX, Sp. 1127 ff.) を参照。

(26) これについては SETTIS-FRUGONI S. 241 ff. を参照。

(27) Gotifredi Abbatis Admontensis *Homiliae in Scripturam*, Hom. XV (Migne, P.L., CLXXIV, Sp. 1130 f.): *Per hoc nomen Alexandri, quod levans angustiam interpretatur, non incongrue draco ille, serpens antiquus, qui vocatur diabolus et Satanas, accipitur, qui, ex quo primum hominem in paradiso per inoboedientiam seduxit, tam inextricabiles angustias et labores initiavit ac levavit, ut omni posteritati Adae numquam quotidianae angustiae et labores deessent aut desint, quamdiu homo vivit super terram.*

(28) Hugo de Sancto Victore, *Allegoriae in Vetus Testamentum*, XI (Migne, P.L., vol. CLXXV, Sp. 749 f.): *quis inquam per illum significatur nisi diabolus qui dixit: 'In coelo conscendam; super*

れたケースは多いが，しかし西欧中世の作例すべてが何らかの象徴的意味を持つとは限らない[31]。このことはとりわけ，フランスのアレクサンドロス大王物語群の写本における，挿絵シリーズの一場面として描かれたミニアチュール（作品カタログ54番以下参照）についていえることである。フランスではアレクサンドロス大王は，宮廷文学の影響を受けて，騎士道精神に満ちた信心深い中世の王様 le bon roi Alexandre, 寛大な君侯（いわゆる「鷹揚な施主」）としてとらえられ（これは例えば，ローマのパラッツォ・ドーリアにある15世紀・フランドルのタピスリー連作についてもあてはまる。作品カタログ88番参照）[32]，空中飛行の話も単なる空想的な冒険譚として表わされる傾向にあった。一方，ドイツではアレクサンドロス大王のイメージは概して否定的であったと言える。ドイツのアレクサンドロス文学において重要な役割を演じた各種の世界年代記の著者がしばしば聖職者だったからである[33]。

V

すでに触れた如く，偽カリステネスのギリシア語原本は現存せず，後代の写本によって原本の『アレクサンドロス物語』の内容が知られるわけであるが，空中飛行の話は，現存するギリシア語写本のうち年代の早いものには欠けている。すなわち，原本に最も近いリセンション α を代表する 11 世紀の写本 A (Paris, Bibl. Nat. Cod. grec. 1771)[34] にも，また，リセンション α から派生したリセンション β を代表する写本 B (Paris, Bibl. Nat.

---

astra Dei exaltabo solium meum, sedebo in monte testamenti in lateribus aquilonis, ascendam super altitudinem nubium, ero similis Altissimo'? Hic quippe per suam superbiam, et calliditatem, et multitudinem angelorum secum superbientium, et progeniem humani generis in primo parente sibi subiecit.

(29) 「あなたはさきに心のうちに言った，『わたしは天にのぼり，わたしの王座を高く神の星の上におき，北の果なる集会の山に座し，雲のいただきにのぼり，いと高き者のようになろう』。」（日本聖書協会『聖書』1963年による）

(30) *In tatam elatus est mentis superbiam, ut magis sub proprio quam sub Domini dominio esse eligeret, dicens in corde suo: 'Ponam sedem meam ad aquilonem, similis ero Altissimo.*

この外，スペルビアのシンボルとしてのアレクサンドロス大王に関しては特に次の古文献を参照。Ruperti Abb. Tuitiensis *De victoria verbi dei*, lib. IX, cap. XII (Migne, P.L., CLXIX, col. 1408); Berthold von Regensburg, *Seiner Predigten*, Vol. I (ed. F. Pfeiffeir, Wien 1862, S. 388 ff.).

(31) STAMMLER Sp. 334; H. Aurenhammer, Alexanders Luftfahrt (Greifenfahrt), in: Lexikon der christlichen Ikonographie, Wien 1962, S. 85 f.; H. Sachs, E. Badstrübner und H. Neumann, Christliche Ikonographie in Stichworten, München 1973, S. 24 f.

(32) SETTIS-FRUGONI S. 239; LANGEDIJK S. 285.

(33) SETTIS-FRUGONI S. 242 ff.

(34) W. Kroll, Historia Alexandri Magni (Pseudo-Callisthenes), Vol. I, Recensio Vetusta, Berlin 1926.

Cod. grec. 1685)[35] にも空中飛行のエピソードは含まれていないのである。しかしながらこの話は，15世紀にシシリー島で作製されたと推定されるギリシア語写本L (Leyden, Univ. Bibl., Cod. Vulcanius 93)[36] ならびに写本Lと類似の三点のギリシア語写本[37]，さらに，最も年代の新しいリセンションである γ のギリシア語写本C (Paris, Bibl. Nat. Cod. suppl. grec. 113, 1567年)[38] には第二書の終り (II, 41) に記されている[39]。

これらの偽カリステネス写本では，空中飛行の話は，アレクサンドロス大王が彼の母オリンピアスに宛てて書いたという手紙（それらには彼が東方で行なった様々の冒険や，彼がそこで見た巨大な鳥や珍しい動物などが記されている）の一つに述べられているが，写本Cにおける該当個所のギリシア語テキスト（G. ミレの校訂による）ならびにその試訳[40] は，本稿冒頭に掲げた通りである（文中，丸印の中の数字は G. ミレによる校合の行数を，また[　　]は写本Lないし写本V・Ob・Omによって補われるべき個所を示す)。

前述のように，偽カリステネスの『アレクサンドロス物語』を西欧世界に広めたのはその二種類のラテン語訳であるが，空中飛行のエピソードに関してはレオによるラテン語訳が決定的な影響を及ぼしたものと思われる。ヴァレリウスのラテン語には，この話は欠けているからである。レオが手本としたギリシア語写本（リセンション δ)[41] そのものも，また，レオのラテン語訳原本 (968/69年頃) も共に現存しないが，しかし1000年頃南イタリアで筆写された写本 Ba (Bamberg, Staatsbibliothek, Cod. E. iii. 14)[42]，および，1300年頃の写本L (London, Lambeth Palace, Cod. 342)[43] が今日伝えられている。

---

(35) C. Müller, Scriptores rerum Alexandri Magni. Pseudo-Callisthenes, in F. Dübner, Arriani Anabasis et Indica, Paris 1846. なお，リセンション β については L. Bergson, Der griechische Alexanderroman, Rezension β, Uppsala 1965 を参照。

(36) H. Meusel, Pseudo-Callisthenes, nach der Leidener Handschrift herausgegeben, in: Jahrbücher f. klass. Philologie und Pädagogik, Neue Folge, Supplementband V, Leipzig 1871, S. 767. 写本Lは，全体としては写本Bに一致するが，部分的には写本Aおよび写本Cとも重なる写本である。

(37) V (W)=Vat. Gr. 171 (16世紀); Ob (O)=Bodl. Barocc, 23 (14世紀); Om (P)=Bodl. Misc. 283 (16世紀)．これらの写本のテキストについては MILLET S. 90 ff. を参照。

(38) C. Müller, op. cit., S. 91; H. Engelmann, Der griechische Alexanderroman, Rezension Γ, (Beitr. zur klass. Philol., hrsg. v. R. Merkelbach, H. 12), Meisenheim am Glan 1963, S. 315. なお，写本Cに関しては，J. Zacher, Pseudocallisthenes: Forschung zur Kritik und Geschichte der ältesten Aufzeichnungen der Alexandersage, Halle 1867, S. 10 も参照。

(39) C. セッティス＝フルゴーニは，アレクサンドロスの空中飛行の話はローマ皇帝アレクサンデル・セヴェルス (222–235) の時代に成立したものと考えている (SETTIS-FRUGONI S. 131)。かつて A. アウスフェルト (A. Ausfeld, Der griech. Alexanderroman, Leipzig 1907) は，偽カリステネス第 II 書 23–41 を後代の書入れ (Interpolation) と推定したが，今日この説は支

レオのオリジナルに最も近いとされるラテン語写本である写本 Ba (III, 17)[44] によれば，紅海から程遠からぬ地点まできたアレクサンドロス大王は，ほとんど空まで達したと思う程高く山に登り，次いで，いかにしたら実際に天まで昇れるような仕掛け（Ingenium）を作ることができるか，思いを巡らせたという。

Cogitavi cum amicis meis, ut instruerem tale ingenium, quatenus ascenderem celum et viderem, si est hoc celum, quod videmus. Preparavi ingenium, ubi sederem, et apprehendi grifas atque ligui eas cum catenis. Et posui vectes ante eos et in summitate eorum cibaria illorum et ceperunt ascendere celum. Divina quidem virtus obumbrans eos deiecit ad terram longius ab exercitu meo iter dierum decem in loco campestri et nullam lesionem sustinui in ipsis cancellis ferreis. Tantam altitudinem ascendi, ut sicut area videbatur esse terra sub me. Mare autem ita videbatur mihi, sicut draco girans ea et cum forti angustia iunctus sum cum militibus meis.

「私は私の友人たちと，いかにしたら，私が天に昇って，そして我々が見ているものが天であるかどうかを確かめられるような仕掛けを作ることができるかを相談した。私は，私が坐れる装置を準備し，そしてグリフィンを捕えて，それらを鎖でつないだ。そして，グリフィンどもの前に竿と，その先には餌を据えた。するとグリフィンどもは天に昇り始めた。しかしながら天上の力がグリフィンどもをおおい，そして地上に投げ下ろした。そこは私の軍隊から10日以上の道程（みちのり）を離れた平地だった。そして私は鉄の格子の中にいたが

持されていない。これについては，Melkelbach, op. cit., S. 47 f. を参照。

(40) MILLET S. 91–95. なお，ギリシア語テキストの和訳に際しては，塚田孝雄氏ならびに跡見学園女子大学助教授福部信敏氏の御教示を頂いた。ここに記して謝意を表する次第である。

(41) リセッション δ に属するギリシア語写本はこれまで全く知られていなかったが，近年，断片的にではあるが発見された。これについては，G. Ballaira, Frammenti inediti della perduta recensione δ del Romanzo di Alessandro in un codice vaticano, in: Boll. del Comitato per la preparazione dell'ediz. naz. dei classici gr. e lat., Acc. Naz. Lincei, XIII (1965), S. 27 ff.; Idem, Sul Romanzo di Alessandro, ibidem, XVI (1968), S. 1 ff. を参照。

(42). F. Pfister, op. cit.

(43) D.J.A. Ross, A New Manuscript of Archpriest Leo of Naples, Nativitas et victoria Alexandri Magni, in: Classica et Mediaevalia, 20, 1959, S. 98 ff.

(44) F. Pfister, op. cit., S. 126; O. Zingerle, Die Quellen zum Alexander des Rudolf von Ems. Im Anhange: Die Historia de preliis, Germ. Abhandlungen IV, Breslau 1885, S. 48 (Anm. 4); G. Landgraf, Die vita Alexandri Magni des Archipresbyters Leo (Historia de preliis), Erlangen 1885, S. 131; MILLET S. 100.
なお，Historia de Preliis I² の該当個所については O. Zingerle, op. cit., S. 252 f. を参照。

怪我をしなかった。私は地上が私の下で広場のように見える程高く昇った。一方，海は私には大地を取り巻くへびのように見えた。非常に苦労して私は私の兵士たちのもとに戻った。」

VI

このレオのラテン語訳と前述の偽カリステネスのギリシア語写本における記述を比較してみると，空中飛行の美術表現にとり重要な相異点が見出される。すなわち，偽カリステネスにおいては，アレクサンドロスを空中に運ぶのは二羽の鳥（ὄρνις）であるのに対して，レオではグリフィン（grifas）[45] となっている点である。テキストの制約を受けるのが普通である写本挿絵の場合(例えば，Berlin, Kupferstichkabinett, Cod. 78. C. 1 のミニアチュールでは，『古フランス語散文体アレクサンドロス物語』のテキストに従って16頭のグリフィンが描かれている。作品カタログ60番参照)[46] を除外すれば，ビザンチンならびに西欧世界の作例の大多数が，アレクサンドロス大王を中央に，そしてその左右にグリフィンを各1頭ずつ配する，シンメトリカルな構図[47] をとるだけに，この差異は注目に値する。

グリフィンではなく鷲ないし鳥がアレクサンドロスを天に運ぶタイプの作例としては，わずかに，10世紀・ビザンチンならびに12世紀・ドイツの刺繍作品（作品カタログ2，87番参照），モワサック大聖堂の12世紀の柱頭浮彫（作品カタログ36番参照），および，トゥアールのバレ美術館所蔵の12世紀・フランスの柱頭浮彫（作品カタログ37番参照）が挙げられるにすぎない。

グリフィンのモチーフが，翻訳の際にレオが手本とした偽カリステネスのギリシア語写本（リセンション δ）にすでに含まれていたのか，あるいは，レオがラテン語訳の際に手本に変更を加えたのか[48]，これについては必ずしも明らかではないが，いずれにせよ，アレクサンドロスの空中飛行を表わす最古の現存作例（モンペザ・ド・クェルシーにある7世紀のコプト織り断片，作品カタログ1番参照）に，すでにこのモチーフは見出される。そこではグリフィンが，アレクサンドロス大王の乗る二輪車に繋がれているのである。

---

(45) グリフィンの数は写本 Ba では特に規定されていないが，パリ国立図書館の13世紀の Historia de Preliis I¹ 写本 (Cod. lat. 8501) における，該当個所のラテン語註釈では4頭となっている。
fol. 85v: *Quattuor hic griffes praecepit esse simul. / Illos ad currum miserat rex inde ligari / Cum ferri vinclo quo bene tutus erat. / In summo currus illorum ponitur esca...* (MILLET S. 102 参照)
なお，グリフィンのイコノグラフィーについては SETTIS-FRUGONI S. 25 ff. および I. Wegner, Studien zur Ikonographie des Greifen in Mittelalter, Diss. Freiburg i. Br. 1928 を参照。

(46) 『ロマン・ダレクサンドル』（アレクサンドル・ド・パリ Alexandre de Paris 版）のテキストではグリフィンの数は7又は8であるが，この写本のミニアチュールでは多くの場合4頭のみである。作品カタログ63–65番参照。

(47) 無論，シンメトリカルな構図をとらない作例も例外

この最古の現存作例を初めとして，ビザンチンおよびその影響下にある地域の美術においては——例えば，ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂北側ファサードにはめ込まれた11/12 世紀・ビザンチンの浮彫（作品カタログ6番参照）や，イスタンブールのハギア・ソフィア大聖堂内側ナルテックスの浮彫（12/13世紀，作品カタログ7番参照），あるいは，エルミタージュ美術館所蔵の10世紀・ビザンチンの鉛製印章（作品カタログ19番参照）などに見られるように——アレクサンドロス大王が二輪車に乗って昇天する様を表わす作例が数多く見出される。終局的には古代のヘリオス Helios（太陽神）の車ないし凱旋車に遡る，この二輪車のモチーフ[49]については，しかしながら，偽カリステネスもレオも共に特に言及していない。

すなわち，偽カリステネスの写本Cでは，「さて三日目に木材を軛そっくりに組み立てて，これを鳥どもの頸に結びつけた。それから[　　]彼は（軛の）真ん中に乗り込み……」（本稿冒頭のギリシア語テキスト参照）としか記されていないのである。もっとも写本L（およびこれと類似の写本Vならびに Ob）では，アレクサンドロス大王の乗物についてより一層の説明がなされている。これらの写本では，先の写本Cからの引用文中の「それから[　　]」に続いて

㊽[*Εἶτα προσέταξα βύρσαν ἐνεχθῆναι*]
καὶ ταύτην προσδεθῆναι ἐν μέσῳ τοῦ
ζυγοῦ. ㊺*Ταύτην δὲ κατεσκεύασα ὥσ-*
περ σπυρίδα
καὶ εἰς ἦλθον ἐγώ

（[　　]内は写本 Om より補充）

「㊽それから牛の皮を持って来させ，これを軛の中央に結びつけるよう命じた。

㊺この皮を籠のように組み立てると」

となっており，一種の籠の中にアレクサンドロス大王が乗り込んだことが記されている。これに対して，レオのテキストはアレクサンドロスの乗物に関して

Preparavi ingenium, ubi sederem ...

「私は，私が坐れるように装置を準備し…」

と漠然と述べているだけである。

籠形の乗物（あるいはそれに類するもの）に乗って昇天するアレクサンドロス大王を表

的には見出される。例えば，ロンドン個人蔵の12世紀・ライン地方のエマーユがそれであるが，ここではアレクサンドロスはプロフィールで表わされ，右上に向って上昇する（作品カタログ86番参照）。なお，シンメトリカルな構図の空中飛行図がササン朝起源のものであるという指摘については，STAMMLER Sp. 336 および H. Aurenhammer, op. cit., S. 85 f. を参照。

(48) E. ヘルツフェルト (HERZFELD S. 132) は，2頭のグリフィスがシンメトリカルに配された空中飛行のイコノグラフィーは，偽カリステネスの『アレクサンドロス物語』に由来するものであり，このタイプはビザンチン織物を通じて各地に広められたと推定している。一方，W. シュタムラー（STAMMLER Sp. 335）は，グリフィスのモチーフをレオのラテン訳に帰している。なお，シンメトリカルな構図をもつ空中飛行図と織物模様との関連については次の文献を参照。 GRAEVEN S. 270; PANZER S. 11.

(49) これについては PANZER S. 11 参照。

わす作例は，ビザンチン美術（例えば，アトス山ドヒアリウ修道院の 12/13 世紀の浮彫，作品カタログ 8 番参照）においても見られるが，このモチーフは概して，西方のモニュメンタルな作例に多く見出される。その好例として，ナルニのサン・ドメニコ聖堂ファサードの浮彫（12世紀末，作品カタログ32番参照），バーゼル大聖堂内陣周廊の柱頭浮彫（12世紀後半，作品カタログ 33 番参照），フライブルク大聖堂の柱頭浮彫（13世紀初頭，作品カタログ34番参照）などが挙げられよう。

西欧の作例にはこの外，フィデンツァ大聖堂ファサードの浮彫(1180年頃，作品カタログ31番参照）の場合のように，アレクサンドロス大王が玉座について昇天するタイプもあるが，これは偽カリステネスよりむしろレオのテキストとの関連を暗示するものと見るべきであろう。この玉座のタイプは，特にドイツの写本挿絵に多く見出される。ヤンセン・エニーケルの『世界年代記』（特にレーゲンスブルク本，作品カタログ69番参照）やドイツ語『歴史聖書』（特にミュンヘン本，作品カタログ78番参照）におけるアレクサンドロスのセクションでは，乗物として椅子 "sezzel"（＝Sessel）が述べられているからである。これに対して『古フランス語散文体アレクサンドロス物語』のテキストでは鳥籠 "la cage"（作品カタログ54番参照）となっているが，ミニアチュールは必ずしもテキストに忠実ではない。作品カタログ55番の場合のように，家型の乗物が描かれる場合もあれば，作品カタログ58，60，62番のように椅子駕籠の場合もある。

VII

本稿は，伝説的な偽カリステネスの『アレクサンドロス物語』中の一つのエピソードである空中飛行をテーマとした美術作品例の収集とそのカタログ作製を主目的とした資料集成の試みであるが，いかにこの古代的＝世俗的テーマが西洋中世世界においてポピュラーなものであったかは，本稿の作品カタログにリスト・アップされた作品の数がすでに示すところである[50]。しかもそれらのうちに，例

(50) E. マール (MÂLE S. 271) は，空中飛行の話を西欧に広めたのはトルバドーレであると考えている。なお，文学・美術におけるアレクサンドロス大王の空中飛行については，すでに挙げたものの外に次の文献も参照。G. Boffito, La leggenda aviatoria d'Alessandro Magno nella letteratura e nell'arte, in: La Bibliofilia, XXII, 1920/21, S. 316 ff.; Idem, Le figurazioni d'Alessandro Magno. Appendice, in: La Bibliofilia, XXIII, 1921/21, S. 268 ff.

(51) O. Demus, Elijah and Alexander, in: Studies in Memory of David Talbot Rice, Edinburgh 1975, S. 64 ff.; E. Breitenbach, Speculum humanae salvationis, (Studien zur deutschen Kunstgeschichte H. 272), Straßburg 1930, S. 241 (Anm. 2); E. Riefstahl, A Coptic roundel in the Brooklyn Museum, in: Coptic Studies in Honor of W. E. Crum (The Byzantine Institute, 1950), S. 539.

えば，オックスフォードのアシュモレアン美術館蔵のいわゆる〈アルフレッド宝石〉（9世紀末，作品カタログ15番参照）とか，ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂にある〈パラ・ドーロ〉のエマーユ（11世紀，作品カタログ16番参照）といった，きわめて簡略化された作例が含まれているという事実は，中世におけるこのテーマのポピュラリティーを一層裏づけるものに外ならない。きわめて単純化された表現であっても容易に理解されたものと思われる。さらに，O. デームス教授その他が指摘したように[51]，アレクサンドロス大王の空中飛行の構図が他の場面のイコノグラフィー，とりわけ「エリアの昇天」のそれ（例えば，南オーストリアのグルク大聖堂ナルテックスの14世紀の壁画）に影響を及ぼしたということも，注目すべき事実である。

中世において人気を博したアレクサンドロス大王物語のテーマも，近世の始まりと共に根本的な変化を被ることになった。偽カリステネスおよびその後継者たちの空想的な物語に基づいた伝説的なアレクサンドロス像は，歴史的人物としてのそれにとって代わられたからである。それと同時に，アレクサンドロス大王は中世における象徴的，道徳的意味を失い，以後もっぱら歴史画の中に登場することになる。空中飛行のテーマも，ハンス・L・ショイフェラインの一枚刷木版画（16世紀初頭，作品カタログ91番参照）を最後に美術の中からその姿を消した。

Werkkatalog der Bildzeugnisse der Luftfahrt Alexanders des Grossen

Zusammengestellt von Koichi Koshi

Die Erzählung von der Luftfahrt Alexander des Großen:
Nach der *Nativitas et victoria Alexandri Magni regis* (*oder Historia de Preliis*) des Archipresbyters Leo von Neapel, der in der zweiten Hälfte des 10. Jhdts. den spätgriechischen Alexanderroman des Pseudo-Kallisthenes (das dritte Jhdt.) ins Lateinische übersetzte, berichtet Alexander in einem Brief an seine Mutter, er habe mit seinen Freunden überlegt, wie er zum Himmel emporfliegen könne, um festzustellen, ob das, was wir sehen, der Himmel ist: „Ich erfand ein Behältnis, in dem ich sitzen konnte, erfaßte Greifen und band sie mit Ketten an; den Greifen hielt ich Stangen vor, an deren Spitze Lockspeisen befestigt waren, und sie begannen, zum Himmel emporzufliegen. Eine göttliche Gewalt überschattete sie aber und trieb sie zur Erde hinab auf ein Feld, das weiter als 10 Tagesmärsche von meinem Heer entfernt war, doch wurde ich in meinem eisernen Behältnis nicht verletzt. Ich erreichte eine solche Höhe, daß die Erde unter mir wie eine Tenne erschien und das Meer wie ein Drache, der sie umschlingt . . ."

(nach Stammler Sp. 335)

Der Katalog verzeichnet sämtliche Bildzeugnisse der Luftfahrt Alexanders des Grossen, von denen der Verfasser Kenntnis habe.

	Kat. Nr.
I. Byzanz und sein Einflußbereich	
a) Textilkunst	1—4
b) Plastik und Elfenbeinarbeiten	5—15
c) Emailarbeiten	16—18
d) Metallarbeiten	19—24
II. Westliche Kirchenausschmückung (Plastik und Mosaiken)	
a) Italien	25—32
b) Deutschland	33—35
c) Frankreich	36—40
d) England	41—51
III. Westliche Handschriftenillustrationen	
a) *Historia de Preliis*	52—53
b) Der altfranzösische Prosa-Alexanderroman	54—62
c) *Roman d'Alexandre* und Jehan Wauquelin's *Histoire du Bon Roy Alixandre*	63—68
d) Jansen Enikels *Weltchronik*	69—76
e) *Historienbibel*	77—80
f) Sonstige	81—85
IV. Übrige westliche Bildzeugnisse	86—91
V. In zeitgenössischer Literatur genannte Bildzeugnisse	92—94
VI. Bildzeugnisse mit irrtümlichem oder fraglichem Bezug auf die Luftfahrt Alexanders	95—118

Unter der Literatur zu den Denkmälern sind folgende häufig zitierten Arbeiten mit Kurztiteln verzeichnet:

BERTAUX — É. Bertaux, L'art dans l'Italie Méridionale, I, Paris 1904.

BERTELLI — C. Bertelli, Alessandro III di Macedonia, in: Enciclopedia dell'arte antica, I, Rom 1958, S. 243 ff.

BOND — F. Bond, Wood Carvings in English Churches, I.—Misericords, London etc. 1910.

BRÉHIER — L. Bréhier, La sculpture et les arts mineurs, Paris 1936.

CAHIER — Ch. Cahier, Nouveaux Mélanges d'Archéologie, I: Curiosités mysterieuses, Paris 1874.

CARY — G. Cary, The Medieval Alexander, Cambridge 1956.

DODGSON — C. Dodgson, Alexander's Journey to the sky: a woodcut by Schäufflein, in: The Burlington Magazine, 6, 1904/05, S. 395 ff.

GRABAR — A. Grabar, Images de l'Ascension d'Alexandre en Italie et en Russie, in: *ΧΑΡΙΣΤΗΡΙΟΝ ΕΙΣ Α.Κ. ΟΡΛΑΝΔΟΝ*, II, Athen 1964, S. 240 ff.

GRAEVEN — H. Graeven, Mittelalterliche Nachbildungen des lysippischen Herakleskolosses, in: Bonner Jahrbücher, Heft 108/109, S. 252 ff.

DURAND — J. Durand, Légende d'Alexandre le Grand, in: Annales archéologiques, 25, 1865, S. 141 ff.

FRANCOVICH — G. de Francovich, Benedetto Antelami, Architetto e scultore e l'arte del suo tempo, 2 Bde., Mailand—Florenz 1952.

GOLDSCHMIDT — A. Goldschmidt, Der Albanipsalter in Hildesheim und seine Beziehung zur symbolischen Kirchenskulpturen des XII. Jahrhunderts, Berlin 1895.

HAMANN — R. Hamann, Motivwanderungen von West nach Osten, in: Wallraf-Richarz-Jahrbuch, 3/4, 1926/27, S. 49 ff.

HERZFELD — E. Herzfeld, Der Thron des Khosro, Quellenkritische und ikonographische Studien über Grenzgebiete der Kunstgeschichte des Morgen- und Abendlandes, in: Jahrbuch der preußischen Kunstsammlungen, 41, 1920, S. 123 ff.

HOLL — O. Holl, Alexander der Große, in: Lexikon der christlichen Ikonographie, I, Rom—Freiburg—Basel—Wien 1968, S. 94 ff.

HÜBNER — A. Hübner, Alexander der Große in der deutschen Dichtung des Mittelalters, in: Die Antike, 9, 1933, S. 32 ff.

LANGEDIJK — K. Langedijk, Rezension: C. Settis-Frugoni, Historia Alexandri Elevati per Griphos ad Aerem (Rom 1973), in: The Art Bulletin, 58, 1976, S. 283 ff.

LOOMIS — R. S. Loomis, Alexander the Great's celestial journey, in: The Burlington Magazine, 32, 1918, S. 136 ff. u. S. 177 ff.

L'ORANGE — H. P. L'Orange, Studies on the Iconography of Cosmic Kingship in the Ancient World, Oslo 1953, S. 118 ff.

MÂLE — É. Mâle, L'art religieux du XIIe siècle en France, Paris 1953 (6. Aufl.).

MEISSNER — A. L. Meißner, Bildliche Darstellungen der Alexander sage in Kirchen des Mittelalters, in: Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen, 68, 1882, S. 177 ff.

MILLET — G. Millet, L'ascension d'Alexandre, in: Syria, 4, 1923, S. 85 ff.

ORLANDOS — A. K. Orlandos, *Νέον ἀνάγλυφον τῆς ἀναλήψεως τοῦ Ἀλεξάνδρου*, in: *Ἐπιστημονικὴ Ἐπετηρὶς τῆς φιλοσοφικῆς Σχολῆς τοῦ Πανεπιστημίου Ἀθηνῶν*, Serie II, Vol. V (1954–1955) [=*Ἀφιέρωμα εἰς Νικόλαον Ἐξαρχόπουλον*], S. 281 ff.

PANZER — Fr. Panzer, Der romanische Bilderfries am südlichen Choreingang des Freiburger Münsters und seine Deutung, in: Freiburger Münsterblätter, 2, 1906, S. 1 ff.

PFISTER — F. Pfister, Alexander der Große in der bildenden Kunst, in: Forschungen und Fortschritte, 35, 1961, S. 331 ff.

POPPEN — H. Poppen, Alexanders Greifenfahrt am Freiburger Münster und die mittelalterlichen Typen der Alexander-Fahrt, in: Festschrift der Verbindung Cimbria, Dortmund 1926, S. 162 ff.

REMNANT — C. L. Remnant, A Catalogue of Misericords in Great Britain, with an Essay on their Iconography by M. D. Anderson, Oxford 1969.

RICE — D. T. Rice, New light on the Alfred Jewel, in: The Antiquaries Journal, 36, 1956, S. 214 ff.

ROSS 1963 — D.J.A. Ross, Alexander historiatus, A Guide to Medieval Illustrated Alexander Literature, (Warburg Institute Surveys, I), London 1963.

ROSS 1971 — D.J.A. Ross, Illustrated Medieval Alexander-Books in Germany and the Netherlands, A study in comparative iconography, Cambridge 1971.

SCHNÜTGEN — A. Schnütgen, Die kunsthistorische Ausstellung in Düsseldorf, in: Zeitschrift für Christliche Kunst, XV, 1902, Sp. 177 ff.

SETTIS-FRUGONI — C. Settis-Frugoni, Historia Alexandri Elevati per Griphos ad Aerem (Origine, iconographia, e fortuna di un tema), Rom 1973.

STAMMLER — W. Stammler, Alexander d. Gr., in: Reallexikon zur deutschen Kunstgeschichte, I, Stuttgart 1937, Sp. 332 ff.

STRZYGOWSKI — M. v. Berchem und J. Strzygowski, Amida, Heidelberg 1910.

SUPKA — G. Supka, Beiträge zur Darstellung der Luftfahrt Alexanders des Großen, in: Zeitschrift für Christliche Kunst, 24, 1911, Sp. 307 ff.

WARD — H.L.D. Ward, Catalogue of romances in the Department of manuscripts in the British Museum, I, London 1883.

WARNER/GILSON — G.F. Warner und J.P. Gilson, Catalogue of Western Manuscripts in the Old Royal and King's Collection in the British Museum, II, Oxford 1920.

I. Byzanz und sein Einflußbereich

a) Textilkunst

1

Montpézat-de-Quercy (Frankreich), Stiftskirche St. Martin.

Wahrscheinlich koptisch, 7. Jh. Leinwandgewebe (Fragment), das als Umhüllung einer Reliquie in der Stiftskirche in Montpézat diente.

Ältestes erhaltenes Beispiel der Darstellung der Luftfahrt Alexanders: der Mazedonierkönig, der in beiden Händen zwei Kränze hält, fährt mit dem Greifenwagen.

F. Pottier, Tissu historié représentant la légende d'Alexandre, in: Bull. Archéol. et Histor. de la Soc. archéologique de Tarn et Garonne, XXX, 1902, S. 289 u. Taf. 40; Idem, in: Beilage zur Allg. Zeitung, Nr. 269, Nov. 1903, S. 382 f.; PANZER S. 11; G. Migeon, Les Arts du Tissu, Paris 1909, S. 17; C. Picard, Le Trône vide d'Alexandre dans la cérémonie de Cyinda et le culte du thrône vide à travers le monde gréco-romain, in: Cahier archéologiques, VII, 1954, S. 14 ff.; BERTELLI S. 244; SETTIS-FRUGONI S. 82, 150 ff. u. Fig. 31.

2

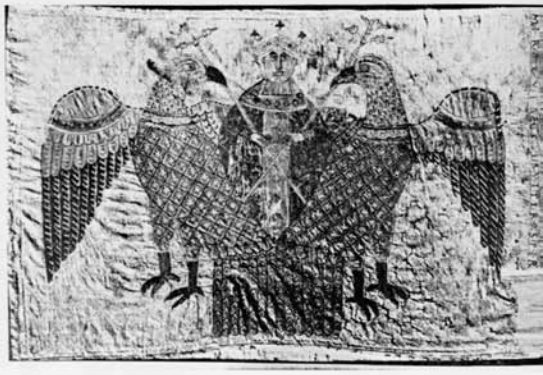
Würzburg, Luitpold Museum.

Eine byzantinische Nadelmalerei vermutlich aus dem 10. Jh., die 1266 auf die sog. Kilians-(Chriacus-)fahne in Würzburg aufgenäht wurde.

Die Inschrift: *Cum paucis promere versi[culis] Miracula poli libuit pro spir[itu sanctu aspicere]*.

Die Stickerei stellt nicht ganz eindeutig Alexanders Luftfahrt dar. Es fehlt eine Verbindung des Königs mit den Vögeln: keine Andeutung eines Korbes oder Thrones, an dem die Adler (!)—statt Greifen—befestigt wären. Anstatt der Stangen mit Fleischködern trägt Alexander zwei Lilienszepter in den Händen.

PANZER S. 10; LOOMIS S. 140; STAMMLER Sp. 340; F. Pfister, Alexander der Große und die Würzburger Kiliansfahne, in: Herbipolis jubilans (Würzburger Diözesangeschichtsblätter 14/15), Würzburg 1952/53, S. 268 ff.; S. Müller-Christensen, Sakrale Gewänder des Mittelalters (Ausstellungskatalog), München 1955, S. 14; A. Grabar, in: Kunstchronik, VII, 1955, S. 310; M. Schütte, S. 27 u. Abb. 34—36; von Hefner-Alteneck, Trachten, Kunstwerke und Gerätschaften des Mittelalters, 2. Aufl., I, S. 17 u. Taf. 29; SETTIS-FRUGONI S. 159 f. u. Fig. 37; LANGEDIJK S. 284 f.



3

Krefeld, Museum.

Byzantinisch-Regensburgischer Stoff (Fragment), 11—12. Jh.

J. Lessing, Die Gewerbesammlung des Künigl. Kunstgewerbe-Museums, Berlin 1900, II, Taf. 98b; A. F. Kendrick, Catalogue of Early Medieval Woven Fabrics (Victoria and Albert Museum, Department of Textiles), London 1925, S. 59; J. H. Schmidt, Deutsche Seidenstoffe des Mittelalters, in: Zeitschrift des Deutschen Vereins für Wissenschaft, I, 1934, S. 109; SETTIS-FRUGONI S. 156 u. Fig. 35.

4

Ehem. Berlin, Schlossmuseum.

Byzantinisch-Regensburgischer Halbseidenstoff, 13. Jh.

In einem gemusterten Kübel thront der König, die angespießten Ferkel in die Höhe hebend.

J. Lessing, Die Gewerbesammlung des Königl. Kunstgewerbe-Museums, Berlin 1900, I, Fig. 81; SCHNÜTGEN S. 180; Fischbach, Die wichtigsten Weberornamente, Taf. 112; LOOMIS S. 178 u. Taf. II/M; J. H. Schmidt, Deutsche Seidenstoffe des Mittelalters, in: Zeitschrift des Deutschen Vereins für Wissenschaft, I, 1934, S. 109 u. Fig. 17; STAMMLER Sp. 337; J.H. Schmidt, Alte Seidenstoffe, Braunschweig 1958, S. 259 u. Fig. 237; SETTIS-FRUGONI S. 154 f. u. Fig. 34.

b) Plastik und Elfenbeinarbeiten

5

Theben (Böotien), Museum (Inv. Nr. 258).

Byzantinische Marmorreliefplatte (Fragment), deren Herkunft unbekannt ist. 10.—11. Jh.

POPPEN S. 169; Schauinsland, 51—53, 1926, S. 100; STAMMLER Sp. 337; A.K. Orlandos, *Γλυπτὰ τοῦ Μουσείου Θεβῶν*, in: *Ἀρχεῖον τῶν βυζαντινῶν τῆς Ἑλλάδος*, V (1939—40), S. 119 ff.; L'ORANGE S. 120 u. Abb. 87; ORLANDOS S. 281 ff. u. Taf. 1/β; RICE S. 215; BERTELLI S. 245; SETTIS-FRUGONI S. 164 f. u. Fig. 41.

6

Venedig, San Marco, Nordfassade.

Byzantinische Marmorreliefplatte, deren Herkunft nicht bekannt ist. 11.—12. Jh.

Über einem Wagen erscheint der Oberkörper Alexanders in der Tracht eines byzantinischen Kaisers. In beiden Händen hält Alexander Stangen, auf deren Spitzen Hasen(?) als Köder für die Greifen gesteckt sind.

DURAND S. 147; BERTAUX S. 490; STRZYGOWSKI S. 350

6

ff. u. Abb. 296; SUPKA Sp. 309 ff. u. Abb. 2; O.M. Dalton, Byzantine Art and Archaeology, Oxford 1911, S. 159; LOOMIS S. 139 u. Taf. I/E; HERZFELD S. 128 f. u. Abb. 26; HAMANN S. 51; HÜBNER Abb. 8; BRÉHIER Taf. XXI; STAMMLER Abb. 3; ORLANDOS Taf. 2/α u. S. 287; FRANCOVICH f. LXXXII (S. 351); RICE S. 215; O. Demus, The Church of San Marco in Venice, Washington 1960, S. 111 ff. u. Abb. 33; W. F. Volbach u. J. Lafontaine-Dosogne, Byzanz und der christliche Osten, Beilin 1968, Abb. 108; SETTIS-FRUGONI S. 164 u. Fig. 40.

7

Istanbul, Hagia Sophia, Esonarthex.

Byzantinische Marmorreliefplatte (Fragment einer Ziborium-Archivolte).
12.—13. Jh.

ORLANDOS Taf. 1/α u. S. 281; SETTIS-FRUGONI S. 161 f. u. Fig. 39.

8

Athos, Dochiariu.

Byzantinische Reliefplatte, 12.—13. Jh.

H. Brockhaus, Die Kunst in den Athos-Klöstern, Leipzig 1891, S. 41; PANZER Abb. 6; STRZYGOWSKI

S. 352 ul Abb. 299; STAMMLER Sp. 337; ORLANDOS S. 285 u. Taf. 2/β; SETTIS-FRUGONI S. 165 f. u. Fig. 42.

9

Mistra, Peribleptos.

Byzantinische Reliefplatte, 14. Jh.

STRZYGOWSKI S. 351 f. u. Abb. 298; LOOMIS S. 139 u. Taf. 1/D; STAMMLER Sp. 337; ORLANDOS S. 285 u. Taf. 2/γ; SETTIS-FRUGONI S. 165 f. u. Fig. 43.

10

Haho (Hahoul, Nordöstliche Türkei), Klosterkirche, Außenwand.

Byzantinisch beeinflußte Reliefplatte, 10. Jh.

Alexander, der über dem Wagen erscheint, hält in beiden Händen die gekreuzten Lanzen mit dem Köder.

D. Winfield, Some Early Medieval Figure Sculpture from North-East Turkey, in: Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, 31, 1968, S. 33 ff. u. Fig. 3 u. 5; Ch. S. Frugoni, An 'Ascent of Alexander', in: Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, 33, 1970, S. 305 ff.; SETTIS-FRUGONI S. 189 ff. u. Fig. 58—59.

11

Wladimir, Marientodskathedrale, Südfassade.

Russisch, 1158—1160. Gehämmert.

GRABAR S. 244 f. u. Taf. II/b; A. Grabar, L'Art profane en Russie pré-mongole et le «Dit d'Igor», in: L'Art de la fin de l'antiquité et du Moyen Âge, I, Paris 1968, S. 301 ff.; SETTIS-FRUGUNI S. 169 u. Fig. 44.

12

Wladimir, St. Dimitri, Südfassade.

Russisch, 1198—1199.

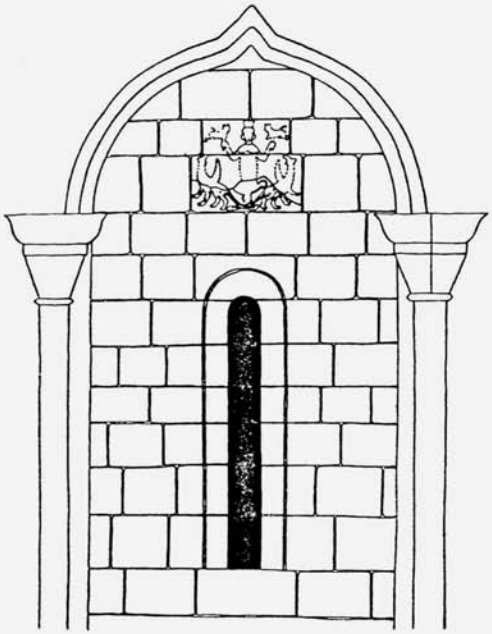
PANZER Abb. 9; A. Bobrinskoi, Reznoi kamen' v Rossij, Moskau 1916, Taf. 12—3; F. Halle, Die Bauplastik von Wladimir-Ssusdal, Russische Romanik, Berlin—Wien—Zürich 1929, Taf. 18; GRABAR S. 244 u. Taf. II/a; A. Grabar, Die mittelalterliche Kunst Osteuropas, Baden-Baden 1968, S. 137; SETTIS-FRUGONI S. 170 u. Fig. 45.

13

Juriew-Polski (Region von Wladimir), St. Georgskirche.

Russisch, um 1234. Fragment. Ursprünglich war das Relief vermutlich in der Südfassade angebracht.

N. N. Voronin, Architektur im nordöstlichen Russland, 12.—15. Jh. (auf Russisch), Moskau 1961, I, S. 208 u. Abb. 64, u. II, Abb. 56; GRABAR S. 246, Fig. 2 u. Taf. III/a; SETTIS-FRUGONI S. 172 u. Fig. 46—47.



14

Darmstadt, Hessisches Landesmuseum (Inv. 33. 36).

Stirnseite eines byzantinischen Elfenbeinkästchens. 10.—11. Jh.

Alexander in byzantinischer Kaisertracht ragt aus dem korbartigen Wagen heraus. Seine Rechte hält eine Gabel mit dem Köder, seine Linke einen jetzt abgebrochenen Gegenstand (Reichsapfel?). Geflügelte Genien, die die Greifen krönen, und die beiden anderen Putten gehören ursprünglich nicht zur Greifenfahrt.

14

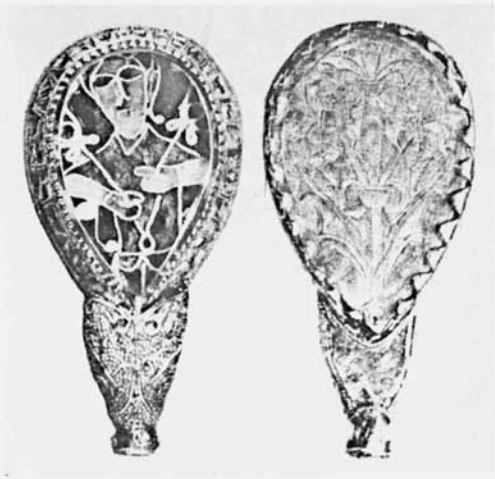
GRAEVEN S. 252 ff.; PANZER Abb. 7; STRZYGOWSKI S. 351 u. Abb. 297; LOOMIS S. 140 u. Taf. I/B; HERZFLD S. 131; A. Goldschmidt u. K. Weitzmann, Die byzantinischen Elfenbeinskulpturen des 10. bis 13. Jhs., Berlin 1930 u. 1934, S. 66 f. u. Abb. 125-d; BRÉHIER Taf. XXXIX; STAMMLER Sp. 337; BERTELLI S. 246; D. T. Rice, Byzantinische Kunst, München 1964, Abb. 407; SETTIS-FRUGONI S. 183 ff. u. Fig. 54.

15

Oxford, Ashmolean Museum.

Vorderseite des sog. Alfred-Juwels. Ende des 9. Jhs.

Äßerst vereinfachte Darstellung der Luftfahrt Alexanders.



J. R. Kirk, The Alfred and Minister Lovel Jewels, Oxford 1948; RICE S. 214 ff. u. Taf. XV/a; SETTIS-FRUGONI S. 174 (Anm. 86).

c) Emailarbeiten

16

Venedig, San Marco.

Zwei Email-Medaillons auf der unteren Bordüre der Pala d'Oro. Byzantinisch, 11. Jh.

Die abgekürzt dargestellte Luftfahrt auf einem der beiden Medaillons ist auf dem anderen von der Darstellung der Erde vervollständigt, die als eine von Ozean in der Form der zwei Schlangen umgebene Scheibe wiedergegeben ist, wie sie Alexander von der Himmelshöhe sah.

SUPKA S. 314 u. Abb. 4; GRABAR S. 240 f. u. Taf. I/a; RICE S. 215 u. Taf. XV/c; W.F. Volbach etc., La Pala d'Oro, Florenz 1965, S. 65 f. u. Taf. LVII; J. de Luigi-Pomorisac, Les émaux byzantins de la pala d'oro de l'église de Saint-Marc à Venise, 2 Bde., Zürich 1966, S. 59 f. u. Nr. 118, 120; K. Wessel, Die byzantinische Emailkunst vom 5. bis 13. Jahrhundert, Recklinghausen 1967, Abb. 46x; SETTIS-FRUGONI S. 186 ff. u. Fig. 56—57.

17

Kiev, Archäologisches Museum (früher Sammlung B. Khanenko).

Mittelstück (Email) eines Golddiadems, das in der Gegend von Kiev gefunden wurde. 11.—12. Jh.

Alexander ist als byzantinischer Kaiser dargestellt.

PANZER S. 8 u. Abb. 10; Collection Khanenko, Croix et Images, 1899—1900, Époque slave, 1909, Taf. XXVII; Istoria Kultury Drevnej Rusi, II, Moskau —Leningrad 1951, Fig. 204; GRABAR S. 248 f. u. Fig. 3; SETTIS-FRUGONI S. 174 u. Fig. 48.

18

Innsbruck, Tiroler Landesmuseum.

Mittelbild der Ortokidenschlüssel des Rukn ed daula Daud (bis 1144 Emir von Amida). Vor 1144, im Orient, wahrscheinlich unter byzantinischem Einfluß entstanden. Arabische und persische Inschriften.

O. v. Falke, Kupferschmelze im Orient und Byzanz, in: Monatshefte für Kunstwissenschaft, 1909, S. 234 f.; STRZYGOWSKI S. 353 u. Taf. XXI/I; SUPKA S. 307 ff.; LOOMIS S. 140 u. Taf. 1/E; HERZFELD S. 132; G. Migeon, Manuel d'art mussulman, Paris 1927, II, 21; STAMMLER Sp. 336 u. Abb. 1; FRANCOVICH f. IL (S. 164); RICE S. 214 u. Taf. XV/b; BERTELLI S. 245; SETTIS-FRUGONI S. 174 f. u. Fig. 49.

d) Metallarbeiten

19

Leningrad, Ermitage.

Vorderseite des Bleisiegels. Byzantinisch, 10. Jh. (911 oder 912).

Der zweirädrige Wagen Alexanders ist mit zwei Greifen gespannt. Der König hält in beiden Händen einen undeutlichen Gegenstand.

A. Bank, 'Une bulle de plomb avec l'image de l'Ascension d'Alexandre le Grand' (auf Russisch), Hermitage Museum, Oriental Department, Travaux, iii, Leningrad 1940; RICE S. 215; GRABAR S. 248 f. u. Taf. IV; SETTIS-FRUGONI S. 192 u. Fig. 61.

20

Lenignrad, Ermitage.

Große Silvervase aus Transkaukasien. Treibarbeit, die im 12.—13. Jh. in der an Byzanz angrenzenden Region entstanden ist.

A. Grabar, Les succès des arts orientaux à la cour byzantine sous les Macédoniens, in: Münchner Jahrbuch der bildenden Kunst, 2, 1951, S. 46; RICE S. 215; GRABAR S. 247 f. u. Taf. III/b; A. Grabar,

L'Art profane en Russie pré-mongole et le «Dit d'Igor», in: L'Art de la fin de l'antiquité et du Moyen Âge, I, Paris 1968, S. 333; SETTIS-FRUGONI S. 178 u. Fig. 50a.

21

Washington, Dumbarton-Oaks Collection.

Goldring. Byzantinisch, 11. Jh.

M. C. Ross, Catalogue of the Byzantine and Early Medieval Antiquities in the Dumbarton Oaks Collection, vol. II: Jewelry, Enamels and Art of the Migration Period, Washington 1965, S. 87 f. u. Taf. LXII; SETTIS-FRUGONI S. 195 f. u. Fig. 63.

22

Athen, Nationalmuseum, Sammlung H. Stathatos.

Ring. Byzantinisch, 12. Jh.

RICE S. 215; É. Coche de la Ferté, Sur quelques bagues de la collection Stathatos, in: Comptes rendu de l'Académie des inscript. et Belles Lettres, 1956, S. 72; É. Coche de la Ferté, Les Objets byzantins et post-byzantins, (Collection Hélène Stathatos, II), Straßburg 1957, S. 34 ff. u. Fig. 20; SETTIS-FRUGONI, S. 196 u. Fig. 64.

23

Rom, Sammlung Giuseppe Cellini.

Ring. Byzantinisch, 13. Jh. (?).

SETTIS-FRGUONI S. 201 u. Fig. 69.

24

Zaraj (Ruβland), Kloster.

Amulett ("Panaghia"), 14. Jh.

A. S. Uvarov, Sbornik Melkih Trudov, I, Moskau 1910, S. 311 u. Fig. 86; SETTIS-FRUGONI S. 194 u. Fig. 62.

II. Westliche Kirchenausschmückung (Plastik und Mosaiken)

a) Italien

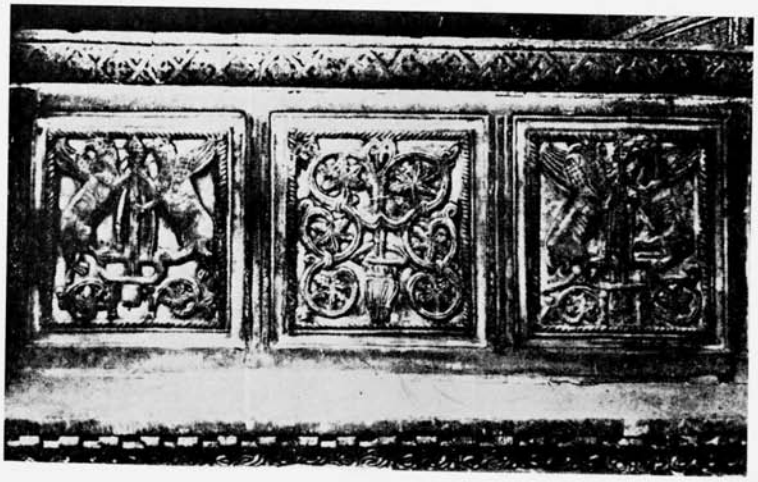
25

Venedig, San Marco, oberer Umgang.

Venezianisch, Ende des 11. Jhs. Eine der Parapetplatten des oberen Umganges (Nr. 36).

In den beiden äußeren Abschnitten des dreigliedrigen Reliefs schwingt die Reminiszenz an die Luftfahrt Alexanders im Greifenwagen mit.

O. Demus, Eine Reliefplatte in San Marco, in: *ΧΑΡΙΣΤΗΡΙΟΝ ΕΙΣ* A. K. *ΟΡΛΑΝΔΟΝ*, II, Athen 1964, 57 f.



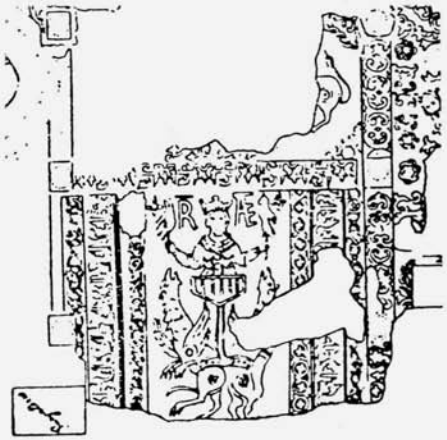
25

26

Taranto (Apulien), Dom, Mittelschiff.

Mosaikfußboden (zerstört), 1160.

BERTAUX S. 492; G. Antonucci, Il mosaico pavimentale del duomo di Taranto e le tradizione musive calabrosicule, in: Archivio Storico per la calabria e la Lucania, XII, 1942, S. 121 ff. u. Fig. auf S. 133; GRABAR S. 242 u. Fig. 1; C. Settis-Frugoni, Per una lettura del mosaico pavimentale della cattedrale di Otranto, in: Bulletino dell'Istituto Storico Italiano per il Medio Evo e Archivo Muratoriano, LXXX, 1968, Fig. 10; SETTIS-FRUGONI S. 294 f. u. Fig. 103.



27

Otranto (Apulien), Dom.

Mosaikfußboden, 1163—1165 von "presbyter Pantaleo" gelegt. Beischrift: *ALEXANDER REX.*

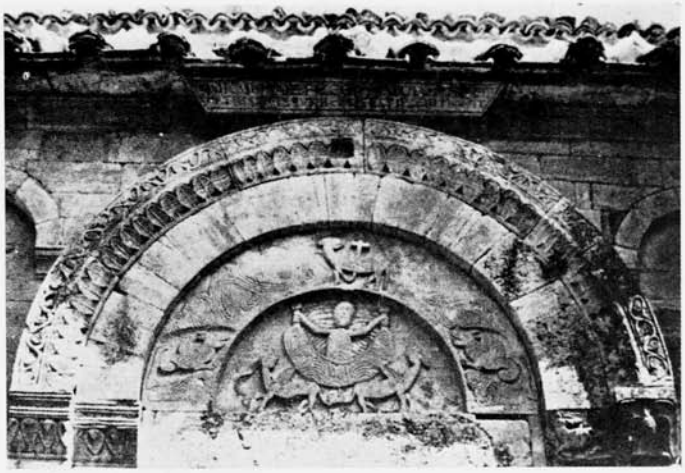
Die Luftfahrt Alexanders gehört in diesem Mosaikfußboden zu den Szenen, die Laster symbolisieren. Zwei adossierte Greifen tragen auf ihren Kruppen einen Thronsessel, auf dem Alexander sitzt.

H. W. Schulz, Denkmäler der Kunst des Mittelalters im Unteritalien, I, Dresden 1860, S. 265; BERTAUX S. 488 f. u. Fig. 214; C. A. Garufi, Il pavimento a mosaico della cattedrale d'Otranto, in: Studi Medievali, 1906/7, II, S. 505 ff. u. Taf. IV; LOOMIS S. 184 u. Taf. I/H; HERZFELD S. 130; FRANCOVICH f. LXXXII (S. 351); MÂLE S. 271; L'ORANGE Fig. 54; RICE S. 216; CARY Taf. I; GRABAR S. 242 f. u. Taf. I/b; HOLL Sp. 95 (mit Abb.); C. Settis-Frugoni, Per una lettura del mosaico pavimentale della cattedrale di Otranto, in: Bulletino dell'Istituto Storico Italiano per il Medio Evo e Archivo Muratoriano, LXXX, 1968, S. 213 ff., u. LXXXII, 1972, S. 243 ff.; SETTIS-FRUGONI S. 285 f. u. Fig. 97.

28

Trani, Dom.

Mosaikfußboden des 12. Jhs. (von Pantaleo gelegt?).



29

Alexanders Luftfahrt ist als Symbol der Superbia neben dem Sündenfall dargestellt.

C. Settis-Frugoni, Per una lettura del mosaico pavimentale della cattedrale di Otranto, in: Buletino dell'Istituto Storico Italiano per il Medio Evo, LXXX, 1968, S. 229; SETTIS-FRUGONI S. 289 u. Fig. 99.

29

Matrice (Campobasso, Süditalien), S. Maria della Strada.

Lünette des Südportals, 12. Jh.

Die Szene der Luftfahrt Alexanders ist vom Text des Mathäusevangeliums (7, 21) und von der oberhalb der Alexander-Szene befindlichen Agnus-Dei-Darstellung begleitet, was darauf hinweist, daß die Luftfahrt nicht im negativen Zusammenhang dargestellt ist. Die Alexander-Szene illustriert nämlich die Möglichkeit eines Menschen, in den Himmel zu kommen, der durch das Lamm Gottes symbolisiert ist.

E. Jamison, Notes on S. Maria della Strada at Matrice, its History and Sculpture, in: Papers of the British School at Rome, XIV, 1938, S. 32 ff.; SETTIS-FRUGONI S. 296 u. Fig. 105; LANGEDIJK S. 285.

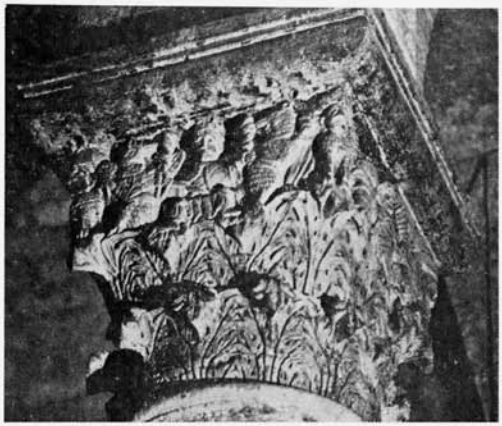
30

Bitonto (Apulien), Dom.

Kapitell des frühen 13. Jhs.

Auf dem zweiten Kapitell des Mittelschiffes (linke Seite) ist die Luftfahrt Alexanders zusammen mit seiner Rückkehr dargestellt.

H.v.d. Gabelentz, Mittelalterliche Plastik in Venedig, Leipzig 1930, S. 127; BERTAUX S. 653 u. Fig. 302; GRABAR S. 242; SETTIS-FRUGONI S. 289 ff. u. Fig. 100—102.



31

Fidenza (ex Borgo San Donnino), Dom, Fassade.

Reliefplatte, um 1180.

G. Zimmermann, Oberitalienische Plastik, Leipzig 1897, Abb. 48; A. Venturi, Storia dell'Arte Italiana, III, Mailand 1904, S. 328, 769 u. II, S. 528; PANZER S. 9; A. K. Porter, Lombard Architecture, IV, Yale 1917, Taf. XXIX, Fig. 3, u. II, S. 191; LOOMIS S. 185 u. Taf. II/N; H. v. d. Gabelentz, Mittelalterliche Plastik in Venedig, Leipzig 1930, S. 127 f. ; FRANCO-

VICH S. 340 u. Fig. 404; MÂLE S. 272 u. Fig. 177; SETTIS-FRUGONI S. 312 f. u. Fig. 108.

32

Narni, San Domenico (ex Santa Maria Maggiore), Fassade.

Ende des 12. Jhs.

J. R. Rahn, Geschichte der bildenden Künste in der Schweiz, S. 218, Amm. 3; G. Dimitrokallis, L'Ascensione di Alexandro Magno nell'Italia del Medioevo, in: Thesaurismata, 4, 1967, S. 214 ff. u. Fig. 7; SETTIS-FRUGONI S. 297 f. u. Fig. 104.

b) Deutschland

33

Basel, Münster, Chorumgang.

Kapitell, zweite Hälfte des 12. Jhs.

Alexander als Symbol der Superbia ist dem Sündenfall und der Vertreibung aus dem Paradies gegenübergestellt.

CAHIER Abb. B u. S. 165 f.; PANZER Abb. 11; LOOMIS S. 178, 184 u. Fig. 2; HAMANN S. 51; J. Gantner, Kunstgeschichte der Schweiz, I, Frauenfeld 1936, S. 235 u. Fig. 178; W. Deonna, Chapiteaux de la cathédrale Saint-Pierre à Genève, in: Genava, XXV, 1947, S. 56; SETTIS-FRUGONI S. 319 ff. u. Fig. 110.

34

Freiburg i. Br., Münster.

Säulenkapitell am Eingang zur ehem. Nikolauskapelle. Anfang des 13. Jhs.

Alexander sitzt in einem kahnartigen Korb, an den zwei Greifen gespannt sind.

F.X. Kraus, in: Christliche Kunst, II, I, S. 402; CAHIER Abb. K; Moller, Denkmäler deutscher Baukunst, II, Taf. XIX; GOLDSCHMIDT S. 71; PANZER Abb. 2 u. 3; HAMANN S. 51 f. u. Abb. 1; LOOMIS S. 178; POPPEN S. 163; HÜBNER Abb. 7; STAMMLER Abb. 6; Ch. Settis-Frugoni, An 'Ascent of Alexander', in: Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, 33, 1970, S. 307 f. ; SETTIS-FRUGONI S. 321 u. Fig. 112.

34

35

Remagen (Rheinland), Portal neben der Pfarrkirche.

Reliefplatte, spätes 12. Jh.

Das Relief stellt den König als Büste in einem mondsichelartigen Gefäße dar, mit Spanferkeln an den beiden Handspiessen.

W. Braun, Kunstarchäologlische Betrachtungen über das Portal zu Remagen, Fest-Programm zu Winckelmann's Geburtstage am 9. December 1859..., Bonn 1859, S. 1 ff.; CAHIER Abb. auf S. 174; GOLDSCHMIDT S. 81 ff.; S. Beissel, Die Skulpturen des Portals zu Remagen, in: Zeitschrift für Christliche Kunst, IX, Sp. 151 ff.; SCHNÜTGEN S. 180; G. Sanoner, Analyse des Sculptures de Remagen, in: Revue de l'art chrêtien, XIV, 1903, S. 445 ff.; PANZER S. 9 u. Abb. 4; HAMANN S. 55 f. u. Abb. 4—5; LOOMIS S. 177 u. Fig. 1; STAMMLER Abb. 5.; Aus'm Werth, Denkmäler des christlichen Mittelalters in den Rheinlanden, Taf. LII/8; G. De Francovich, La corrente comasca nella scultura romanica europea, in: Riv. dell'Istit. di Archeol., VI, 1937—8, S. 105 ff., Fig. 61—62; SETISS-FRUGONI S. 318 f. u. Fig. 109.

c) Frankreich

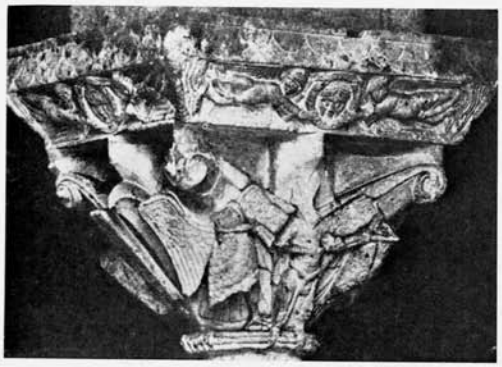
36

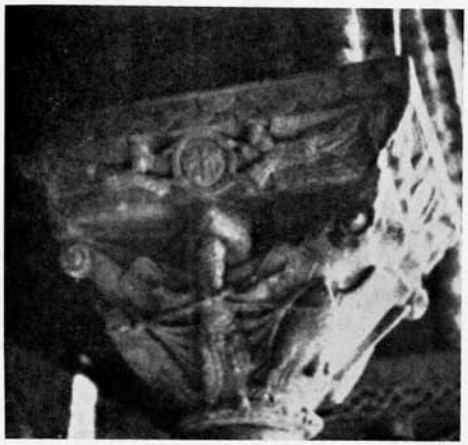
Moissac, Kathedrale, Kreuzgang, Westtrakt.

Kapitell (Nr. 75), 12. Jh.

An demselben Kapitell ist die Luftfahrt Alexanders zweimal dargestellt. Der König ist zwischen zwei Adlern placiert.

K. Porter, Romanesque Sculpture of the Pilgrimage Roads, IV, Boston 1923, Abb. 282; SETTIS-FRUGONI S. 271 u. Fig. 85—87.





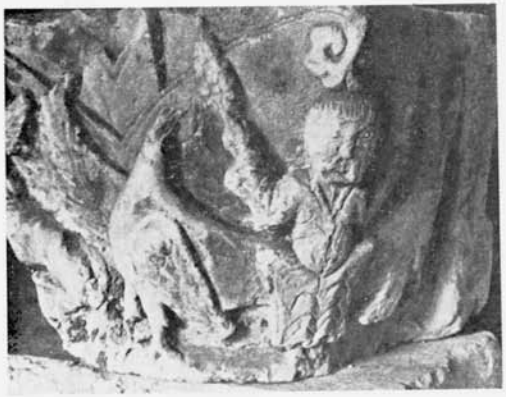
37

Thouars, Musée Barré.

Kapitell des 12. Jhs., das wahrscheinlich aus der Kirche St. Pierre du Châtelet stammt.

Alexander ist zwischen den Adlern dargestellt.

SETTIS-FRUGONI S. 274 ff. u. Fig. 88.



38

Chalon-sur-Saône, Cathédrale Saint Vincent.

Kapitell des 12. Jhs.

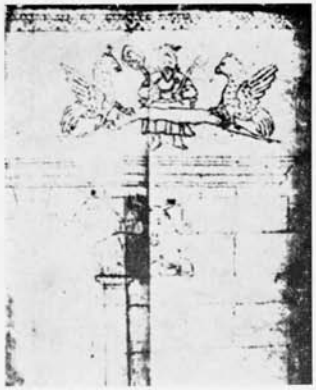
CAHIER S. 172 f.; Chr. Malo, De l'ancien diocèse de Chalon, in: Bull. Monum., XL, 1931, S. 371 ff. u. Fig. auf S. 425; O. Beigbeder, Ce que l'art roman doit à Pythagore, in: Connaisance des Arts, CXV, 1961, settembre, S. 80 ff.; SETTIS-FRUGONI S. 276 ff. u. Fig. 89.

39

Nîmes (Provence), Notre-Dame, Portal.

Zerstörtes Relief des 12. Jhs.: Teilstück eines Frieses (über dem Portal der Kathedrale). Eine alte Zeichnung (von Rulmann, um 1625) nach dem Fries ist in Paris, Bibl. Nat., franç. 8648, erhalten.

STAMMLER S. 339 u. Abb. 4; R. Hamman, Das Tier in der romanischen Plastik Frankreichs, in: Mediaeval Studies in Memory of A. Kingsley Porter, Cambridge 1939, II, S. 434 ff. u. Fig. 18; FRANCOVICH f. LXXXIII (S. 354); SETTIS-FRUGONI S. 278 f. n. Fig. 90.



40

Oloron-Ste.-Marie (Basses-Pyrénées), Ste.-Marie.

Tympanum des Westportals. Rekonstruiertes Relief.

Die Greifenfahrt bildet das Gegenstück zu Daniel in der Löwengrube.

K. Porter, Romanesque Sculpture of the Pilgrimage Roads, IV, Boston 1923, Abb. 461; STAMMLER Sp. 338 f.; SETTIS-FRUGONI S. 279 f. u. Fig. 91.

d) England

41

Charney Basset (Berkshire), Kirche.

Tympanum des 12. Jhs.

C.E. Keyer, Norman Tympana, S. 70; LOOMIS S. 178; SETTIS-FRUGONI S. 82 u. Fig. 28.

42

Bury St. Edmond (Suffolk), Abtei.

Kapitell des 12. Jhs.

G. Zarnecki, Romanesque Objects at Bury St. Edmonds, in: Apollo, LXXXV, 1967, S. 407 ff. u. Fig. 13; SETTIS-FRUGONI S. 287 (Anm. 43) u. Fig. 98.

43

Wells (Somerset), Kathedrale.

Miserikordie, um 1330—1340.

Der Schaft der Lanze ist gebrochen.

BOND S. 226 f.; LOOMIS S. 178 u. Taf. III/R; Archaeologia, LV, 340; English Medieval Art (Ausstellungskatalog), London 1930 (Victoria and Albert Museum), Nr. 109, Taf. 21; Ch. Grössinger, English Misericords of the thirteenth and fourteenth Centuries and their relationship to manuscript illuminations, in: Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, 38 1975, Taf. 17/c; REMMANT S. 138; SETTIS-FRUGONI S. 321 f. u. Fig. 113.

44

Gloucester (Gloucestershire), Kathedrale.

Miserikordie (Nr. 8), Mitte des 14. Jhs.

BOND S. 80; MEISSNER S. 184; PANZER S. 9; LOOMIS S. 178 u. Taf. III/W; REMNANT S. 49; SETTIS-FRUGONI S. 324 u. Fig. 114.

45

Gloucester, Kathedrale.

Miserikordie (Nr. 22), Mitte des 14. Jhs.

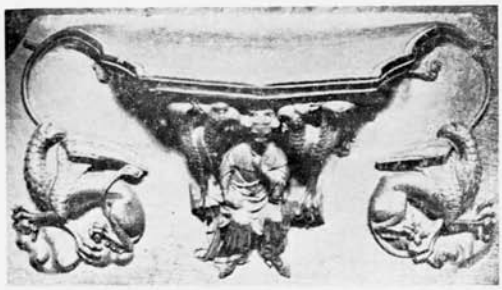
BOND S. 80; MEISSNER S. 184; PANZER S. 9; LOOMIS S. 178 u. Taf. III/Y; REMNANT S. 50; SETTIS-FRUGONI S. 325 u. Fig. 115.

46

Chester (Cheshire), Kathedrale.

Miserikordie, um 1390.

BOND S. 79; LOOMIS S. 178 u. Taf. III/T; REMNANT S. 24; SETTIS-FRUGONI S. 326 u. Fig. 117.

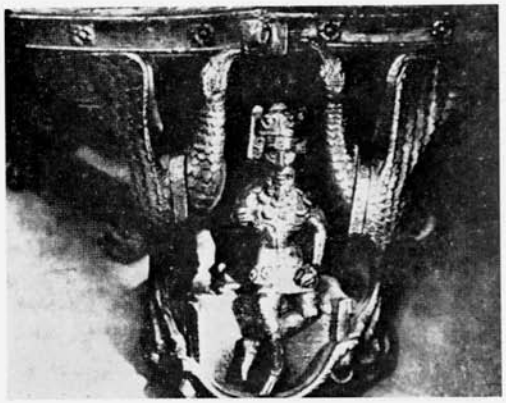


47

Lincoln (Linolnshire), Kathedrale.

Miserikordie, Ende des 14. Jh.

BOND S. 78; LOOMIS S. 178 u. Taf. III/U; REMNANT S. 91 f.; SETTIS-FRUGONI S. 326 u. 116.

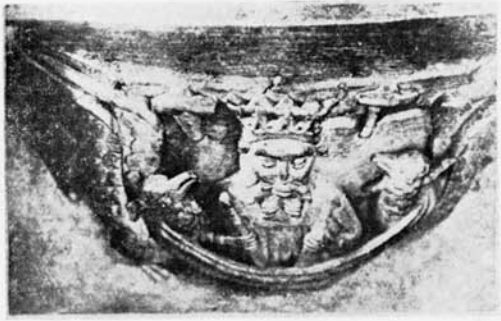


48

Whalley (Lancashire), St. Mary's Church.

Miserikordie, Anfang des 15. Jhs.

LOOMIS S. 178 u. Taf. II/J; REMNANT S. 84, 87; SETTIS-FRUGONI S. 326 u. Fig. 118.



49

Darlington (Durham), St. Curthbert's Church.

Miserikordie, erste Hälfte des 15. Jhs.

LOOMIS S. 178 u. Taf. II/Q; REMNANT S. 40. u. Taf. 21a; SETTIS-FRUGONI S. 328. u. Fig. 119.

50

Cartmel (Lancashire), Priory Church.

Miserikordie, um 1440.

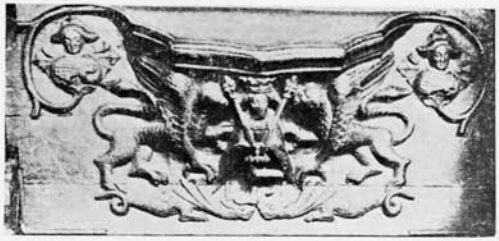
MEISSNER S. 185; PANZER S. 9; LOOMIS S. 178, 184, u. Taf. II/P; REMNANT S. 77 f.; SETTIS-FRUGONI S. 330 u. Fig. 121.

51

Beverly (Yorkshire), S. Mary's Church.

Miserikordie, um 1445.

LOOMIS S. 178 u. Taf. III/S; REMNANT S. 177 f.; SETTIS-FRUGONI S. 328 u. Fig. 119.



III. Westliche Handschriften-illustrationen

a) *Historia de Preliis*

52

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. lat. 8501, fol. 48v.

Illustration der *Historia de Preliis I*[1]. Süditalienisch, frühes 14. Jh.

DURAND S. 153; GRAEVEN S. 273; ROSS 1963 S. 51; SETTIS-FRUGONI S. 236 u. Fig. 79.

53

Leipzig, Universitätsbibliothek (früher Stadtbibliothek), Repositorium II 4to 143 (Cod. 417), fol. 101r.

Illustration der *Historia de Preliis I*[2]. Süditalienisch, spätes 13. Jh.

Alexander sitzt auf seinem Thron, der in ein halbrundes, korbartiges Geflecht gestellt sind.

R. Bruck, Die Malereien in den Handschriften des Königreichs Sachsen, Dresden 1906, S. 176; CARY S. 256 u. Taf. VIII; ROSS 1963 S. 53; K. Secomska, The Miniature Cycle in the Sandomierz Pantheon and the Medieval Iconography of Alexander's Indian Campaign, in: Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, 38, 1975, S. 60; SETTIS-FRUGONI S. 232 (Anm. 77) u. Fig. 77.

b) Der altfranzösische Prosa-Alexanderroman (Ableitung von der *Historia de Preliis I*[2])

54

London, British Museum, Cod. Roy. 19 D I fol. 37r.

Illustration der Sammelhandschrift, die den altfranzösischen Prosa-Alexanderroman (Redaktion I) enthält. Französisch, Mitte des 14. Jhs.

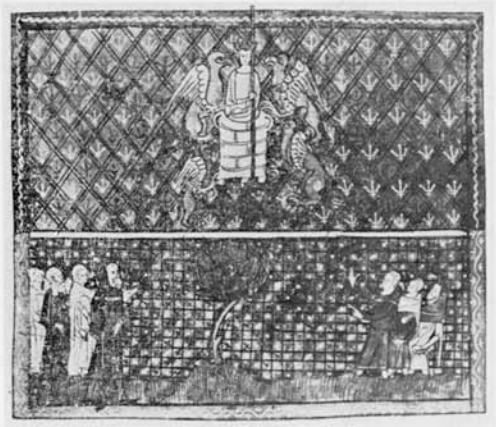
Text:

Et quant la cage fut faite, il fist prendre .xvi. oisiaus grifs & les fist lier par les cuisses o bonnes chaennes de fers. Les queles il fist atachier a la cage & mist aueuques soi char pour donner aux oisiaus & esponges plaines

d'yaue. Quant il fu dedens la cage si auoit une piece de char liee a une lance & la bouta hors par le pertuis.

Die im Text erwähnte Zahl der Greifen ist sechzehn, in der Illustration sind nur vier davon dargestellt.

WARD S.143; DODGSON S.396 u. Taf. I; WARNER/GILSON S. 339 ff.; J. J. A Ross, Methods of book production in a fourteenth century French miscellany, in: Scriptorium, 6, 1952, S. 63 ff.; ROSS 1963, S. 55; SETTIS-FRUGONI S. 232 (Anm. 78) u. Fig. 78.



55

London, British Museum, Cod. Roy. 20 A V, fol. 20v.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans [Redaktion I] (*Le livre et la vray hystoire du bon roy Alixander*). Warscheinlich englisch, spätes 13. Jh. Für den Text siehe Kat. Nr. 54.

Rubrik: *Comment li rois Alix'se feist monter en lair as oyseaux grif.*

WARD S.125; DODGSON S.396; WARNER/GILSON S. 352; SETTIS-FRUGONI S. 212 (Anm. 20) u. Fig. 70.

56

Le Mans, Bibliothèque de la Ville, Cod. 103,

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans (Redaktion I). Italienisch, spätes 14. Jh.

Catalogue général des Bibliothèques publiques de France, XX, S. 85 f.; ROSS S. 55; SETTIS-FRUGONI S. 232 (Anm. 77).

57

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. fr. 1385, fol. 63v.

Unvollendte Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans (Redaktion I). Italienisch, 14. Jh.

ROSS 1963 S. 55.

58

London, British Museum, Cod. Roy. 15 E VI, fol. 20v.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans (Redaktion I). Französisch, nach 1445. Für den Text siehe Kat. Nr. 54.

WARD S. 129; DODGSON S. 396 u. Taf. I; WARNER/GILSON S. 177 ff.; ROSS 1963 S. 55.

59

London, British Museum, Cod. Roy. 20 B XX, fol. 76v.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans (*Le livre et la vraye hystoire du bon roy Alixandre*). Französisch, Mitte des 15. Jhs.

WARD S.128; DODGSON S.396; WARNER/GILSON S.369 f. u. Taf. 116; ROSS 1963 S. 55.

60

Berlin, Kupferstichkabinett, Cod. 78. C. 1.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans (Redaktion II). Franco-flämisch, spätes 13. Jh.

Dem Text gemäß ist die Zahl der Greifen in der Miniatur sechzehn.

L. Olschki, Romanische Literatur des Mittelalters, S. 81 ff.; P. Wescher, Beschreibendes Verzeichnis der Miniaturen, Handschriften und Einzelblätter des Kupferstichkabinetts der Staatlichen Museen zu Berlin, Leipzig 1931, S. 36 ff.; L. Olschki, Manuscrits français à peintures des bibliothèques d'Allemagne, Genf 1932, S. 37 f.; HÜBNER Taf. 3; STAMMLER Sp. 341 f.; F. Anzelewsky, Miniaturen aus deutschen Handsehriften, Baden-Baden 1961, Taf. 5 u. S. 19 f.; ROSS 1963 S. 56.

58

60

61

London, British Museum, Cod. Harley 4979, fol. 70v.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans (Redaktion II). Franco-flämisch, spätes 13. Jh.

WARD S. 127 f.; GODGSON S. 396; ROSS 1963, S. 56.

62

Brüssel, Bibliothèque Royal de Belgique, Cod. 11040, fol. 69v.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans [Redaktion II] (*La vraie ystoire dou bon roi Alexandre*). Franco-flämisch, spätes 13. Jh.

MILLET S. 123; C. Gaspar und F. Lyna, Les principaux manuscrits à peintures de la Bibliothèque Royal de Belgique, I, Paris 1937, S. 228 ff. u. Taf. XLVII; ROSS 1963 S. 56.

c) *Roman d'Alexandre* (Version von Alexandre de Paris) und *Histoire du Bon Roy Alixandre* von Jehan Wauquelin (Prosa-Version des *Roman d'Alexandre*)

63

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. fr. 786, fol. 60v.

Illustration des *Roman d'Alexandre*. Mitte des

13. Jhs. Für den Text siehe H. Michelant, Li romans d'Alixandre par Lambert li Tors et Alexandre de Bernay, Stuttgart 1846, S. 385 ff. Rubrik: *Ci dist com Alixandres se fist haucer à mont vers le ciel en une corbille et tenoit en sa main une lance et car entor.*

MILLET S. 130 u. Taf. XXV; ROSS 1963 S. 12; SETTIS-FRUGONI S. 222 u. Fig. 71.

64

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. fr. 790, fol. 81v.

Illustration des *Roman d'Alexandre*. Mitte des 14. Jhs.

MILLET S. 130 u. Taf. XXV; ROSS 1963 S. 12; SETTIS-FRUGONI S. 223 u. Fig. 72.

65

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. fr. 791, fol. 68v.

Illustration des *Roman d'Alexandre*. Spätes 14. Jh.

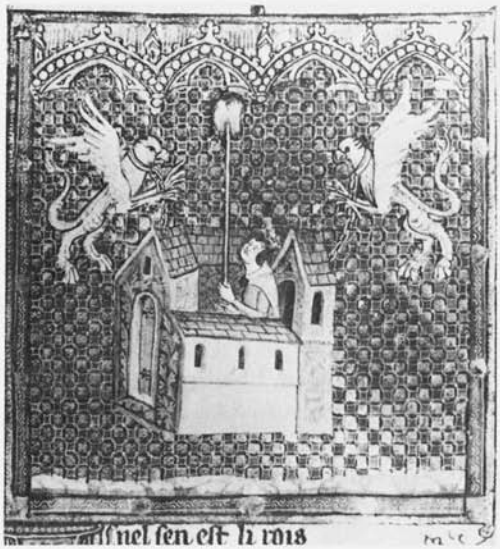
MILLET S. 130 u. Taf. XXV; ROSS 1963 S. 12.

66

Oxford, Bodleian Library, Cod. Bod. 264, fol. 81r.

Illustration des *Roman d'Alexandre*. Flämisch (Jehan de Grise), um 1338—44.
Rubrik: *Comment Alixandre fuit porté en l'eire mervellesment par la vertu de ii greffons et par char cru contrevys par soun engyne.*

M. R. James, The Romance of Alexander, Oxford 1933; ROSS 1963 S. 12; O. Pächt und J. J. G. Alexander, Illuminated Manuscripts in the Bodleian Library Oxford, I, Oxford 1966, S. 22, Nr. 297; K. Secomska, The Miniature Cycle in the Sandomierz Pantheon and the Medieval Iconography of Alexander's Indian Campaign, in: Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, 38, 1975, S. 60; SETTIS-FRUGONI S. 223 u. Fig. 74.



67

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. fr. 9342, fol. 180v.

Illustration der *Histoire du Bon Roy Alixandre* von Jehan Wauquelin. Um 1460.
Text:

...Il fist venir des carpentiers et leur fist faire une cage grande par raison ensi que pour ly mettre dedens et pour soy bien aise conduire dedens. Quant la cage fu faite, il fist prendre. .VIII. grifons, dont il avoit assez en son ost, car en son ost il avoit de toutes choses estranges qu'il avoient trouvet en inde aulcune partie. Et fist ches griffons tres bien loyer de chaines de fer a cette cage a chascun coste. .II. Quant ce fu fait il commanda aux barons de son ost que la ilz que la ilz le attendissent tanz qu'ilz orroient aulcune nouvelle de ly. Adont il entra dans la ditte cage et prist aveuc li esponges plaines d'iauwe. Tantost qu'il fu ens, il prist une lance et mist une pieche de char au bebout de la lanche si le bouta hors de la cage par le deseure contre mont. Adont ces griffons qui faim avoient se commencherent a eslever en air pour aler aprez la viante et en eslevant ilz emportoient la cage aveuc eulx, et plus montoient et plus montoit la cage et la viande et toudis en aloient. Finablement tant monterent que les barons de l'ost perdirent la veuwe de leur maistre, de la cage et des oiseaux et ossi fist Alixandre d'eulx.··· Et comme il fuist si très hault que ia il sentist la caleur du feu, il getta sa veuwe par desoubz. Si nous temoigne l'istore qu'il estoit si tres hault qu'il li sambloit de la terre que ce ne fuist qu'ung bien petiot gardin enclos d'une petite soif, et de la mer qui aloit al environ de la terre ce ly sambloit une petite. coleuvre.···

MILLET S. 125 ff. u. Taf. XXIV; ROSS 1963 S. 17.

68

Paris, Petit Palais, Coll. Dutuit, Cod. 465.

Illustration der *Histoire du Bon Roy Alixandre* von Jehan Wauquelin. Mitte des 15. Jhs. Für den Text siehe Kat. Nr. 67.

MILLET S.125 u. Taf. XXIV; ROSS 1963 S. 17.

68

d) *Weltchronik* von Jansen Enikel

69

Regensburg, Thurn und Taxissche Hofbibliothek, Cod. Perg. III. fol. 110r, col. 2.

Illustration (185 × 79mm) in dem Alexander-Abschnitt der *Weltchronik* von Jansen Enikel. Süddeutsch, spätes 14. Jh.

Text:

dô ieglîch grîfâ fliegend wart,
dô wart niht lenger gespart,
er hiez einen sezzel schôn
bringen und mit sîner krôn
zuo dem sezzel zehant
zwô stark stang, die man vant
und an den sezzel guot
der künic dô vil wol gemuot
hiez binden mit starken îsen.
.....
die grîfen truoc man dar zehant,
daz was an dem morgen fruo,
und bant die ouch den stangen zuo.
die grîfen wârn hungervar,
des nam der künic wol war:
die stangen er gên himel raht,
dâ von daz âs allez blaht.
dô fuorten in die grîfen schôn
gên dem himelischen trôn.
.....
dô kom zuo im ein stimme,
diu sprach zuo im mit grimme:
'Alexander, wâ wil dû hin?
dû hâst nindert rehten sin.
wil dû wider die gotheit
streben, daz wirt dir leit,
dû wirst lîden arbeit
und immer werndez herzenleit. etc.'
.....
er sprach: 'ich sich niur einen huot
sweben in dem wazzer rîch.'
diu stimm sprach: 'dâst daz ertrîch,
daz dû dort sihest sweben,
in dem wazzer an heben. ···'

Alexander sitzt, dem Text entsprechend, auf einem Sessel, an den die Stangen mit der Lockspeise befestigt sind; tief unter ihm ist die Erde "wie ein Hut" auf dem Meer schwimmend.

PANZER S. 9 u. Abb. 15; POPPEN S. 166; ROSS 1963 S. 39; ROSS 1971 S. 84 u. Fig. 86.

70

München, Bayerische Staatsbibliothek, Cod. c.g.m. 5, fol. 180v. col. 2.

Illustration in dem aus Janzen Enikel's *Weltchronik* entlehnten Alexander-Abschnitt der Weltchronik-Handschrift (gemischter Text von Rudolf von Ems *Weltchronik* mit Fortsetzungen aus der *Christherrechnonik* und Enikel's *Weltchronik*). *Süddeutsch, um* 1380. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

PANZER S. 9 u. Abb. 14; E. Petzet, Die deutschen Pergamenthandschriften Nr. 1—200 der Staatsbibliothek in München, München 1920, S. 9 ff.; POPPEN S. 166; ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 94 u. Fig. 122.

71

Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod. 2921, fol. 195v, col. 2.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt der 1397/98 datierten Handschrift von Jansen Enikel's *Weltchronik*. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 99 u. Fig. 141

69

70

71

72

Schloss Harburg, Oettingen-Wallerstein Bibliothek, Cod. I. 3, fol. II. deutsch, fol. 148r, col. 2.

Illustration (87 × 87mm) in dem aus Jansen Enikel's *Weltchronik* entlehnten Alexander-Abschnitt der Handschrift (Rudolf von Ems *Weltchronik* mit Fortsetzungen). Deutsch, zweite Hälfte des 14. Jhs. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 90 u. Fig. 103.

73

Stuttgart, Württembergische Landesbibliothek, Col. H. B. XIII, poet. germ. 6, fol. 254v, col. 2.

Illustration (110 × 85mm) in dem aus Jansen Enikel's *Weltchronik* entlehnten Alexander-Abschnitt der Handschrift (Rudolf von Ems *Weltchronik* mit Fortsetzungen). Deutsch, erste Hälfte des 14. Jhs. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

Rubrik: *Hie fur Allexander ut mit den greiffen.*

ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 87 u. Fig. 96.

74.

Kassel, Hessische Landesbibliothek, Cod. Theol. Fol. 4, fol. 264v, col. 1.

Illustration in dem aus Jansen Enikel's *Weltchronik* entlehnten Alexander-Abschnitt der 1384 datierten deutschen Handschrift (*Christherrechronik*, d.h. *Weltchronik* von Rudolf von Ems mit Forsetzungen), die entweder in Italien (Venedig oder Lombardei) oder von einem italienischen Maler in Deutschland illumineirt worden sein müßte. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

Alexander sitzt auf den Rücken der beiden Greifen. Die Erde, die himmlische Stimme und die beiden Lanzen mit der Lockspeise sind nicht dargestellt.

W. Hopf, Die Landesbibliothek Kassel, Marburg 1930, Teil 2 (von G. Struck), S. 102 ff.; ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 93 u. Fig. 115.

75

Heidelberg, Universitätsbibliothek, Cod. Pal. germ. 336, fol. 155r.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt der *Weltchronik* von Jansen Enikel. Frühes 15. Jh. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

Die Erde ist unten als Inselstadt dargestellt, die vom Meer umgeben ist.

ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 91 u. Fig. 110; SETTIS-FRUGONI Fig. 80.

76

München, Bayerische Staatsbibliothek, Cod. c.g.m. 250, fol. 184v.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt der *Weltchronik* von Jansen Enikel. Süddeutsch, frühes 15. Jh. Für den Text siehe Kat. Nr. 69. Rubrik: *hie furnt die greiffen alexander.*

ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 97 u. Fig. 131.

e) *Historienbibel*

77

Berlin, Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Cod. Germ. Fol. 565, fol. 528r.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt der *Historienbibel* (Rezension IA). Fränkisch, um 1460.

Text:

Und do die griffen ains halben järs alt wurdent do hieß er im ain schönen sessel bringen. Daruff saß er mit siner kron. Und hieß zwo ysni stangen mit ysen an den sessel binden und hieß an ain yegklich an daz ort binden flaisch. Und band die griffen an ain stang und fürtend ihn die griffen über sich gegen dem himelschen tron. Dô kam ain stimm zù im die sprach zornklich zù im: 'Alexander wa wit du hin?'

Rubrik: *furen (?) grieffen in luft.*

Im Text sind zum Unterschied von der Illustration zwei Stangen erwähnt.

H. Vollmer, Ober- und Mitteldeutsche Historienbibeln, I, Berlin 1912, Nr. 3; J.F.L.T. Merzdorf, Die deutschen Historienbibeln des Mittelalters, Tübingen 1870, S. 548 f.; ROSS 1963 S. 39; ROSS 1971 S. 110 u. Fig. 150; SETTIS-FRUGONI Fig. 81.

78

München, Bayerische Staatsbibliothek, Cod. c.g.m. 520, fol. 232r.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt der 1465 geschriebenen deutschen Handschrift der *Historienbibel* (Rezension IA). Für den Text vgl. Kat. Nr. 77.

H. Vollmer, Ober- und Mitteldeutsche Historienbibeln, I, Berlin 1912, Nr. 13; J.F.L.T. Merzdorf, Die deutschen Historienbibeln des Mittelalters, Tübingen 1870, S. 36 ff.; ROSS 1963 S. 39; ROSS 1971 S. 113 f. u. Fig. 160.

79

New York, Pierpont-Morgan Library, Cod. 268, fol. 22r.

Illustration im Alexander-Abschnitte des schwäbischen *Bibel-Bilderbuches* um 1390—1400. Für den mit der *Historienbibel* (Rezension I) identischen Text vgl. Kat. Nr. 77.

S. De Ricci und W. J. Wilson, Census of Medieval and Renaissance Mannuscripts in the United States and Canada, New York 1937, II, S. 1416; M. Harrsen, Central European Manuscripts in the Pierpont-Morgan Library, New York 1958, Nr. 40, S. 55 u. Taf. 59; ROSS 1963 S. 39; ROSS 1971, S. 122 u. Fig. 177.

80

Solothurn, Zentralbibliothek, Cod. (provisor) Nr. 217, fol. 292r.

Elsässisch, um 1440—60. Illustration in dem Alexander-Abschnitt der *Historienbibel* (Rezension IB). Für den mit der Rezension IA identischen Text siehe Kat. Nr. 77.

Rubrik: *Wie sich kúnig Allexander tet zwene griffen gegen himel fůren.*

Die Illustration ist dem entsprechenden Text nicht getreu.

H. Vollmer, Ober- und Mitteldeutsche Historienbibeln, I, Berlin 1912, Nr. 30; L. Altermatt, Die von Staalsche Historienbibel der Zentralbibliothek Solothurn, in: Festschrift Karl Schwarber, Basel 1949, S. 35 ff.; ROSS 1963 S.; ROSS 1971 S. 116 u. Fig. 163; SETTIS-FRUGONI Fig. 84.

f) Sonstige

81

Aachen, Sammlung Peter Ludwig, Cod. 10, fol. 222v.

Historisierte Initiale aus einer in der ersten Hälfte des 13. Jhs. entstandenen Handschrift der *Historia Scholastica* von Petrus Comester.

Im Text von Petrus Comester ist die Luftfahrt Alexanders nicht erwähnt.

H. P. Kraus, Twenty-five Manuscripts (Catalogue), Vaduz 1961, Nr. 12, S. 39 ff.; ROSS 1963 S. 37; SETTIS-FRUGONI S. 225 u. Fig. 75.

82

Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod. 2576, fol. 101r.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt der im 14. Jh. in Venezien entstandenen Handschrift der *Histoire universelle*. Alexanders Meeres- und Himmelfahrt kommen im Vulgär-Text der in der ersten Häflte des 13. Jhs. aus verschiedenen Quellen kompilierten *Histoire universelle* nicht vor: die beiden Episoden stellen die für die Wiener Handschrift spezifische Interpolation dar. Die beiden Abenteuer sind nämlich sehr frei aus dem Gedächtnis des Abschreibers erzählt, der eine Version dieser Episoden kannte, die in einiger Hinsicht mit der Pariser Handschrift des *Roman d'Alexandre* (Bibl. Nat., Cod. fr. 789) übereinstimmt.

Text:

Que Alexandre se fist avaler ens el fons de la mer, et après fist porter en l'air as grifons, et puis se mut en Babilone et la conquist. ·····
(Beginn der Einschaltung)
·····
E puis se pensa il la nuit qu'il voloie veoir l'air. E quant vint a l'endemain si fist il sor la plainne dou sablon qui sor la marine de l'Ocean estoit, qui estoit larges de kascune partie plus de .iii. jornees ····· (Lakune) ·····
Donc fist faire .j. vaxel de fust biaus e larges tant qu'il poïst dedens entrer. E puis fist prendre .ii. porcelés et lé fist lier as .ij. groses lances. E fist faire .ij. kaenes et lier bien li vasel. E cil vaxiaus estoit reons com. j. ouf, si avoit .ij. pertuis par ont il mise les lances qui portoient li porcel. Puis entra dedens li rois Allexandres; e puis qu'il fu dedens il fist lier .ij. oysels grifons et sele kaene grosse a cel vaxel. Cill grifons estoient moult afamés, adonc lor monstra li rois Allexandres lé porcels as grifons, e quant li oysel lé virent, qui grans faim avoient, il s'esmurent tantost a voler por prendre cel porcel que voloient prendre. E toz fois voloient en aus a plus a plus qu'il cuydoient atendre les porcels. E ensi volerent il jusque ore de midi. E quant vint a ore de midi, que li soleil l'escanfoit moult duremens, tant qu'il ne pooit plus durer, e qu'il estoient tant monté en sus que ses gens ne le purent veoir, et il ot moult veu e coneu de l'air, e qu'il ne veoit ne montagne ne planure ne nulle autre cosse fors li ciel et l'air, il compença de cliner li porcels ver li oisels grifons. Cant li oysel orent cel porcels pris il se devalerent aval o toz lé porcels a le vaxel, e vindrent toz droit entre les gens Allexandre. E quant li oyxelz furent yloc keu que mangé avoient li porcels il se reposerent volenters. Adonc vindrent cil qui a li oysel donoient a manger si lé pristrent a lé retornerent en lor gages qu'il soloient ester. E mantenant li rois ysit dou veysel qui moult en fu liés e si princes ausi qui menerent grans joie; e puis tantost furent mises les tables por manger a grans desduit. Adonx fist il metre en

escrit toz cestes mervoiles et toz quant qu'il avoit fait ne conquesté.

Rubrik: *Que Alixandre se fist avalers el fons de la mer et apres se fist porter en lair as grifons et puis sen vint en Babiloine et la conqist.*

Alexander wird von zwei Greifen in die Luft emporgetragen, die mit Ketten an einem langen Spieß angebunden sind; dieser ist durch das ellipsenförmige Fuhrwerk durchstoßen, worüber aber der Text nichts sagt. Die Zuschauergruppe unten ist auch vom Text nicht gefordert, während die eiförmige Form des Fuhrwerkes von den eigenartigen Angaben des Textes bestimmt ist.

(Die Wiener *Histoire universelle* enthält sowohl in den Genesisminiaturen als auch in jenen Miniaturen, die profane Sagen und Geschichte der Antike illustrieren, eine Anzahl von spätantiken Darstellungsformen. In der Szene der Luftfahrt beispielsweise findet die Gruppe der vier aufwärts blickenden Figuren eine nahe Parallele in der Szene des Bundes Gottes mit Noah unter dem Regenbogen in der Wiener Genesis, die sich im 14. Jh. in Venedig befunden haben dürfte.)

H. J. Hermann, Die westeuropäischen Handschriften und Inkunabeln der Gotik und Renaissance, 2. Teil (Berchreibendes Verz. d. illum. Hss. in Österr., N.F. VII/2), Leipzig 1936, S. 176 f. u. Taf. LVI/3; O. Pächt, A Giottesque Episode in English Medieval Art, in: Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, VI, 1943, S. 65 f. u. Taf. 16/c; BERTELLI S.246; D.J.A. Ross, The history of Macedon in the Histoire ancienne jusqu' à César, in: Classica et Medievalia, XXIV, 1963, S. 226 ff.; ROSS 1963 S.20; K. Koshi, Die Wiener „Histoire universelle" (Cod. 2576) unter Berücksichtigung der sogenannten Cottongenesis-Rezension, Diss. Wien 1971, S. 111 ff., u. 116 ff.; K. Koshi, Die Genesisminiaturen in der Wiener „Histoire universelle" (Cod. 2576), (Wiener Kunstgeschichtliche Forschungen I), Wien 1973, S. 29 f. u. Abb. 42; SETTIS-FRUGONI S. 227 ff. u. Fig. 76.

83

Wolfenbüttel, Herzog August Bibliothek, Cod. Guel. 1. 5. 2. Aug. Fol., fol. 129v. col. 1.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt (*Alexander* von Ulrich von Eschenbach) der deut-

schen Sammelhandschrift (*Christherrechronik* etc.) des späten 14. Jhs.
Text:

sô hœrt waz Alexander tet.
Pôrus zwên grîfen het,
die er von jugent het erzogen.
der het ein meister sô gephlogen
und het sie alsô gewent,
daz man sie mit âse zent,
daz sie vlugen war man wolde.
Alexander niht ensolde
der unmâze enbern,
ern wolt ûz der mâze gern.
von seltsænen sachen
hiez er ein gesæze machen,
starc keten dar an smiden
und die an die grîfen widen.
in daz gestüele sazter sich,
als die rede vernomen ich
von der crônike lêre hân,
ouch hiez der muotwillic man
ûf daz gestüelde stecken
zwei âs gar hôle recken:
dar nâch die grîfen ûf vlugen
und in gegen den lüften zugen,
das er an daz hæste kam.

niht mê wunder er vernam
wenn daz daz ertrîch ummegienc
wazzer und daz gar bevienc,
und daz der erde breite
ûf daz wazzer geleite
swebt als ein cleiner huot.

Obwohl im Text zwei Lanzen mit der Lockspeise erwähnt sind, ist in der Illustration nur eine dargestellt.

Heinemann, Katalog der Handschriften der Herzog August Bibliothek zu Wolfenbüttel, Wolfenbüttel 1890—1903, Bd. II, Nr. 1589, S. 26; H. Jerchel, Die bayerische Buchmalerei des 14. Jahrhunderts, in: Münchner Jahrbuch der bildenden Kunst, N.F., 10, 1933, S. 100 f.; ROSS S. 40; D.J.A. Ross, Two new manuscripts of the Alexander of Ulrich von Etzenbach, in: Zeitschrift für deutsche Altertum, XCVI, 1967, S. 239 ff.; ROSS 1971 S. 70 f. u. Fig. 76.

84

München, Bayerische Staatsbibliothek, Cod. c.g.m. 581, fol. 133v.

Illustration von Hector Mülich (Augsburger Kaufmann) in der 1455 datierten Handschrift der von Leo's *Nativitas et Victoria Alexandri Magni* abhängigen *Histori von dem grossen Alexander* (oder *Alexanderbuch*) von Johann Hartlieb.
Text:

Da gedacht ich je, wie ich den Himmel berühren möcht, und ließ mir bereiten ein starken Sessel, der whol mit Eisen beschlagen war, daran hieß ich machen starke Balken, und band daran gezähmte Greifen, und hätt davor eine lange Stangen, daran war den Greifen ihr Essen gemacht; die Stangen mocht

ich zu den Greifen rücken oder von ihnen. Ich ließ die Greifen ihr Aas kosten, darnach recket ich die Stange über sie, aber die Greifen vermeinten die Speise zu erlangen und schwangen ihr Gefieder; mit dem erhuben sie mich und den Sessel von der Erde.

Rubrik: *wie alexander in die lüft vůr mit den greÿffen.*

ROSS 1963, S. 49; ROSS 1971 S. 140 u. Fig. 208.

85

Nürnberg, Stadtbibliothek, Cod. Cent. V, App. 34a, fol. 144v.

Nordbayerische Sammelhandschrift aus der zweiten Hälfte des 15. Jhs. Eine der vier Alexander-Illustrationen im *Bibel-Bilderbuch*, das die Handschrift enthält.

Text:

···wunders am hymel und in den wolken were Und ließ jm ein stůl machen und ließ czwen kolben von fleyßch an czwu stangen pinden an den stůhl und zwen greyffen ließ er auch neben an stůl pinden daz die selbigen greyffen den kolben fleysch noch solten fligen daz sie jn dester hocher mochten furen uncz an die wolcken do furtten die greyffen den kung daz der gotliche wil nit was er hocher solt kummen do kom ein stym die sprach zu jm awß eim grimiglichen zornn alexander wo wildu hin wildu wider got streben daz wirt dir leyt jn dem hymel kumpt nymant dan der es ver dint hat mit gutten wercken do der kung die stym vernam do sprach der kung wo sol ich hin faren Die stym sprach auf das ertrich der kung sprach ich sich nichtes dan ein hwt sweben in dem wasßer Do sprach die stym das ist das gancz ertrich do fare zu das tet er.

Sowohl der Alexander-Text als auch seine Illustrationen in der Nürnberger Handschrift sind aus einer illustrierten Handschrift von Jansen Enikel's *Weltchronik* entlehnt.

K. Schneider und H. Zirnbauer, Die Handschriften der Stadtbibliothek Nürnberg, Wiesbaden 1965, Vol. I, S. 440 ff. u. Taf. 17; ROSS 1971 S. 124 f. u. Fig. 428.

IV Übrige westliche Bildzeugnisse

86

London, Victoria and Albert Museum (Depot von J.C.E. Harding Rolls).

Rheinisch (Umkreis des Godefroid de Claire), Mitte des 12. Jhs. Email.

Die einzigartige Darstellung der Szene im Profil: Alexander sitzt in einem von links kommenden Wagen, und die beiden Greifen streben im Profil hintereinander nach rechts empor. Die Luftfahrt Alexanders ist Simson mit dem Löwen gegenübergestellt.

J. B. Waring and F. Bedfort, Art treasures of the United Kingdom, London 1858, Taf. 6, Nr. 5: PANZER S. 10 u. Abb. 12; LOOMIS S. 178 u. Taf. II/L; STAMMER Sp. 341; W. H. Forsyth, Around Godefroid de Claire, in: Bull. of the Metropolitan Museum of Art, XXV, 1966, Fig. 18; SETTIS-FRUGONI S. 257 u. Fig. 83.

87

Soest, St. Patroklus-Kirche.

Gesticktes Kissen, das ursprünglich in der Reliquienleiste des hl. Patroklus dem Kopf des Heiligen als Unterlage diente. Deutsch, 12. Jh. Inschrift: *ALEXANDER REX.*

Alexander als Symbol der Superbia ist dem Lamm Gottes (auf der anderen Seite) gegenübergestellt. In den Händen hält der König an sehr kurzen Stängelchen Lockspeise für die Vögel, die hier nicht wie überall sonst als Greifen gebildet sind.

SCHNÜTGEN, XII, S. 159 u. XV, 1902, S. 177 ff. u. Fig. 1—2; Clemen, in: Zeitschrift für bildende Kunst, 1903, S. 39; PANZER S. 10; LOOMIS S. 140, 183, u. Taf. I/A; STAMMLER Sp. 337; M. Schutte, S. 27 u. Abb. 39; SETTIS-FRUGONI S. 157 f. u. Fig. 36.

88

Rom, Palazzo Doria

Wandteppich, ca. 1450—60 in Tournai für Philipp den Guten von Burgund gewirkt.

Die literarische Grundlage bildet der Alexander-Roman des Jean Wauquelin von 1448. Alexander sitzt in einem verzierten Metallkäfig, in jeder Hand hält er eine Stange mit den Ködern für die vier Greifen.

A. Warburg, Hamb. Fremdenb., Beilage zu Nr. 252 vom 2. März 1913; B. Kurth, Jb. Allerh. Kaiserh., 34, 1918, Taf. VII u. VIII; LOOMIS S. 183 u. Taf. II/o; HERZFELD S. 128; Got. Bildteppiche aus Frankreich u. Flandern, München 1923, Taf. 30—32; STAMMLER Sp. 342; A. Warburg, Luftschiff und Tauchboot in der mittelalterlichen Vorstellungswelt, wiedergedruckt in: Gesammelte Schriften, I, 1932, Italienische Ausgabe 1966 (in: La rinascita del paganesimo antico, Florenz, S. 275 ff.); G. T. Van Ysselsteyn, Tapesery—The most expensive industry of the XVth and XVIth centuries, Den Haag—Brüssel 1969, S. 53 S. Tf. 28; SETTIS-FRUGONI S. 239.

89

München, Bayerisches Nationalmuseum.

Decke der Weberzunftstube aus Augsburg, die 1457 von Peter Kaltenhaf gemalt wurde. Unterschrift: *Alexander füer in die höchen, Tät zwue span breit die ganz erd sechen.*

Alexander sitzt in einer Art Stuhl, vor den die Greifen gespannt sind.

PANZER S. 9; STAMMLER Sp. 338; Festschrift zum hundertjährigen Bestand des Bayerischen Nationalmuseums, München 1955, S. 45.

90

Zierbildchen in dem auf Plutarch's *Vitae Parallelae* basierenden *Triomphe des neuf preux* (Ausgabe von Michel Le Noir, Paris 1507).

CARY Fig. 4; B.A. Henisch S. 25 u. Fig. 1; SETTIS-FRUGONI S. 225 (Anm. 64).

91

London, British Museum, Print Room.

Einzelblattholzschitt von Hans L. Schäuffelein (ca. 1480/90—1539/40), 210 × 143mm. (Das Blatt des British Museums ist das einzige bekannte Exemplar). Anfang des 16. Jhs.

DODGSON S. 396 f. u. Taf. II; LOOMIS S. 183; M. Geisberg, Der deutsche Einzelblattholzschnitt in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts, München 1930, Nr. 1063; STAMMLER Abb. 7 u. Sp. 341; C. Dodgson, Catalogue of Early German and Flemish Woodcuts preserved in the Department of Prints and Drawings in the British Museum, II, 1971, No. 117.

V. Bildzeugnisse, die in zeitgenössischer Literatur erwähnt werden, aber nicht auf uns gekommen sind.

92

Der Chronist Ayméric de Peyrac (gest. 1406) erwähnt einen Mosaikfußboden von 1063 in Moissac, in dem König Chlodwig zwischen zwei Greifen dargestellt sein soll: möglicherweise handelt es sich hier in Wirklichkeit um Alexanders Luftfahrt.

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. lat. 4941 A, fol. 103v—104r:

Cum ascenderet (Clodoveus) de Bur degala Tholosam talis visio sibi affuit nocturnalis, scilicet, quod duo griffones in rostris lapvides habentes, eos in quadam valle asportavit et ibi quandam ecclesiam debito hediffico iniciabat. ···Unde in pavimentis de lapillis variis duobus griffonibus materialiter artificio compactis prope altare dicti monasteri, major huius proceditur rei geste figura.

E.A. Lagrèze-Fossat, Etudes historiques sur Moissac, 3, Paris 1874, S. 497; J. Monméja, Mosaïques du Moyen Âge et carrelages émaillés de l'abbaye de Moissac, in: Bull. Archéol., 1894, S. 196, 268 ff.; STAMMLER Sp. 338; M. Durliat, L'Église abbatiale de Moissac des origines à la fin du XIe siècle, in: Cahiers Archéologiques, XV (1965), S. 155 ff.; M. Vidal, J. Mavry u. J. Porcher, Quercy Roman, La Pierre-qui-vire (Yonne) 1969, S. 107; SETTIS-FRUGONI S. 268 ff.

93

In der Geschenkliste des Papstes Bonifaz VIII. im Inventar des Domes von Anagni (vor 1303) ist eine Darmatik erwähnt, auf der die Luftfahrt Alexanders gestickt war:

Item j dalmatica de samito viridi cum paraturis in fimbriis historia Alexandri elevati per grifos in aerem.

B. di Montault, in: Annales archéologiques, 18, 1858, S 26; LOOMIS S. 140; STAMMLER Sp. 337; L. Mortari, Il tesoro della cattedrale di Anagni, Rom 1963, S. 14; SETTIS-FRUGONI S. 154.

94

Ein italienisches Gedicht des 14. Jhs., *La Intelligenzia*, beschreibt ein Zimmer mit Wandbildern, von denen eines Alexanders

Greifenfahrt darstellt:

Evvi 'ntagliato Alessandro signore
come si mosse ad acquistar lo mondo···
E come in aria portarlo i griffoni, e come vide tutte le regioni···

J.v. Schlosser, Quellenbuch zur Kunstgeschichte des abendländischen Mittelalters, Wien 1896, S. 347; LOOMIS S. 140; V. Mistruzzi, L'Intelligenza, Bologna 1928, Stanza 216; STAMMLER Sp. 337; SETTIS-FRUGONI S. 160.

VI. Bildzeugnisse, die in der Forschung fälschlich als dem Thema der Luftfahrt Alexanders zugehörig interpretiert wurden, oder solche, deren Zusammenhang mit der Himmelfahrt nicht mit der notwendigen Stringenz bewiesen werden kann.

95

Berlin, Staatliche Museen.

Koptischer Stoff, 6.—7. Jh.

W. F. Volbach, Spätantike und koptische Stoffe, Berlin 1926, S. 16 f. u. Taf. 46; SETTIS-FRUGONI S. 152 u. Fig. 33.

96

Brüssel, Musée du Cinquantenaire.

Koptischer Stoff aus Münsterbilsen, 7. Jh.

I. Errera, Catalogue d'Étoffes anciennes et modernes (des) Musée Royaux des Arts Decoratifs de Bruxelles, Brüssel 1907², S. 13 u. Taf. I[KK]; G. Migeon, Les Arts du Tissu, Paris 1909, S. 21; O. v. Falke, Kunstgeschichte der Seidenweberei, Berlin 1913, S. 57 u. Fig. 74;

LOOMIS S. 140; BRÉHIER S. 99; E. Riefstahl, in: Coptic Studies in Memory of E. Crum, Boston 1950; RICE S. 216; BERTELLI S. 245; SETTIS-FRUGONI S. 150 u. Fig. 27b.

97

Rom, Museo dell'Alto Medioevo (ehem. Castel S. Angelo).

Reliefplatte, aus dem mittelalterlichen Rom stammend. 9.—10. Jh.

J. Sauer, Symbolik des Kirchengebäudes und seine Ausstattung in der Auffassung des Mittelalters, 2. Auflage, Freiburg i. Br. 1924, S. 439; POPPEN S. 169; STAMMLER Sp. 337; L'ORANGE S. 120 f. u. Fig. 88; BERTELLI S. 245; SETTIS-FRUGONI S. 160 f. u. Fig. 38.

98

Palermo, Cappella Palatina.

Gemalte Decke des 12. Jhs.

A. Pavlovskij, Décoration des plafonds de la Chapelle Palatine, in: Byzantinische Zeitschrift, 11, 1893, S. 399 u. Fig. auf S. 395; O. Wulff u. W. J. Volbach, Spätantike und koptische Stoffe, Berlin 1926, S. 16 f.; U. Monnerat de Villard, Le pitture musulmane al soffitto della Capella Palatine, Rom 1950, S. 71 (Anm. 251); BERTELLI S. 246; SETTIS-FRUGONI S. 180 (Anm. 97) u. Fig. 53.

99

Agoune (Schweiz), Église de Saint-Maurice.

Email auf der Goldkanne.

M. Rosenberg, Geschichte der Goldschmiedekunst; Zellenschmelz, III, 1921, Fig. 46; A. Alföldi, Die Goldkanne von Saint Maurice d'Agoune, in: Zeitschrift für Schweizerische Archaeologie und Kunstgeschichte, X, 1948, S. 1 ff.; RICE S. 216; SETTIS-FRUGONI S. 187 (Anm. 115).

100

Genf, Musée d'art et d'histoire.

Kapitell des 11. Jhs. aus der Kathedrale St. Peter in Genf.

W. Déonna, Chapiteaux de la cathédrale Saint Pierre à Genève, in: Genava, XXV, 1947, S. 57 u. Taf. 8; SETTIS-FRUGONI S. 283.

101

Petershausen bei Konstanz, Klosterkirche, Portal. (Eine Zeichnung des Portals ist in dem Buch von J. Bergmann, Sammlung der vorzüglichsten Merkwürdigkeiten des Großherzogtums Baden, Konstanz 1825, erhalten und Zeichnungen der Reliefs sind in N. Hug, Abbildungen alter Kunstwerk, Konstanz 1832, veröffentlicht).

Sandsteinrelief des 12. Jhs. (zwischen 1173 und 1180).

O. Homburger, Materialen zur Baugeschichte der zweiten Kirche zu Peterhausen bei Konstanz, in: Oberrheinische Kunst, II, 1926/27, S. 153 ff. u. Taf. 79; HAMANN S. 52 ff. u. Abb. 2—3; PFISTER S. 333; HOLL Sp. 96; SETTIS-FRUGONI S. 284 f. u. Fig. 94.

102

Zürich, Großmünster.

Pfeilerkapitell.

Abgekürzte Darstellung einer von zwei Greifen getragenen Figur.

STAMMLER Sp. 338.

103

Fritzlar, Dom.

Kapitell aus dem Anfang des 13. Jhs.

Ein nackter Mann sitzt auf den zusammengewachsenen Schweifen von zwei hochstrebenden Greifen.

STAMMLER Sp. 339.

104

Worms, St. Paul, Chor.

Kapitell.

STAMMLER Sp. 340.

105

Köln, Dom.

Miserikordie um 1340.

Zwei geflügelte Wesen packen einen Mann an

der Schulter; dieser sitzt ruhig, mit übergeschlagenen Beinen, und legt seine Hände über den Knien zusammen (die Füße sind zerstört).

B. v. Tieschowitz, Das Chorgestühl des kölner Domes, Berlin 1930, Taf. 92 u. S. 27; STAMMLER Sp. 337; SETTIS-FRUGONI S. 285.

106

Ják (Ungarn), Kirche.

Relief des nördlichen Nebenchores, um 1280.

HAMANN S. 58 u. Abb. 9; G. de Francovich, La corrente comasca nella scultura romanica europea, in: Riv. dell'Ist. di Archeol., VI, 1937/38, S. 115 u. Fig. 74; SETTIS-FRUGONI, S. 285.

107

Leningrad (Ermitage) und Kopenhagen.

Romanische Brettsteine.

A. Goldschmidt, Die Elfenbeinsklupturen, 3, Berlin (1914) Abb. 195 u. 246; STAMMLER Sp. 341.

108

Poitiers, Église de Ste. Radegonde

Kapitell.

A. Prandi, Il Salento provincia dell'arte bizantina, in: Atti del Convegno internazionale sul tema: l'Oriente cristiano nella Storia della Civiltà, Rom 1964, S. 682 f.; SETTIS-FRUGONI S. 282.

109

Amboise, Saint-Denis.

Kapitell.

CAHIER S. 214 f.

110

Caen.

Kapitell.

D. J. A. Ross, Alexander and the Faithless Lady: a Submarine Adventure (an inaugural lecture delivered at Birckbeck College), London 7th Nov. 1967, S. 5; SETTIS-FRUGONI S. 282.

111

Rouen, Dom, Kapelle S. Etienne.

Kapitell.

Adeline, Les Sculptures Grotesques, S. 10, III; MEISSNER S. 185; F. X. Kraus, Christliche Kunst, II, 1, Freiburg i. Br. 1897, S. 403; PANZER S. 9; SETTIS-FRUGONI S. 283.

112

Urcel bei Laon, Kirche.

CAHIER S. 173 u. Fig. B; PANZER S. 9; SETTIS-FRUGONI S. 282.

113

Le Mans, Kathedrale.

Kapitell.

CAHIER S. 171; PANZER S. 9; LOOMIS S. 178.

114

Conques, Sainte Foy, nordliches Querschiff.

Kapitell, Ende des 11. Jhs. oder Anfang des 12. Jhs.

SETTIS-FRUGONI S. 285.

115

Durrow, Friedhof.

Kreuz des 10. Jhs.

SETTIS-FRUGONI S. 285.

116

Lund (Schweden), Kathedrale, nördliches Seitenschiff.

Unvollendetes Kapitell aus der ersten Hälfte des 12. Jhs.

L'ORANGE S. 72 u. Fig. 48; SETTIS-FRUGONI S. 285 u. Fig. 95.

117

Lund, Kloster der Allerheiligen.

Kapitell.

L'ORANGE S. 72 u. Fig. 49; SETTIS-FRUGONI S. 285.

118

Fardheim (Insel Gotland, Schweden), Kirche.

Portalrelief aus der zweiten Hälfte des 12. Jhs.

H. Ronge, Konung Alexander, Uppsala 1957, Taf. I (Fig. 96); SETTIS-FRUGONI S. 285.

BIBLIOGRAFIA (1930-1976) DI GENTILE DA FABRIANO

a cura di Madoka IKUTA

ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノの文献

——B. Molajoli, Bibliografia di Gentile da Fabriano, 1929・以後に刊行された文献——

生　田　　圓

I.—FONTI, DOCUMENTI, CRONOLOGIA

CHIAPPINI DI SORIO, ILEANA—*Documenti bresciani per Gentile da Fabriano*, in «Notizie da Palazzo Albani», 2, 1973, 2 ('74), pp. 17–26.

CORBO, ANNA MARIA—*Artisti e artigiani in Roma al tempo di Martino V e di Eugenio IV*, Roma, 1969, pp. 43–45.

MANCINI, AUGUSTO—*Ancora sull'iscrizione sepolcrale di Gentile da Fabriano*, in «Rivista d'Arte», 1941, pp. 258–263.

PAATZ, WALTER UND ELISABETH—*Die Kirchen von Florenz*, Band IV, 1952, p. 368 segg.; Band V, 1953, p. 293 segg.; Band II, 1955 p. 68.

SAALMAN, HOWARD—*The Church of Santa Trinità in Florence*, 1966, (Published by the College Art Association of America in conjunction with the Art Bulletin).

Theatrum Sanitatis di Ububchasym de Baldach (Codice 4182 della Biblioteca Casanatense di Roma), vol. I, prefazione di Mario Salmi, Parma, 1970; vol. II, introduzione di Antonio Marazzi, Parma, 1970; Vol. III, introduzione di Giovanni Mariotti, Parma, 1971.

VASARI, GIORGIO—*Le Vite de' più eccellenti pittori, scultori e architettori.*

—a cura di Anna Maria Ciaranfi, Firenze, 1927–32, vol. II, pp. 555–565.

—a cura di Carlo L. Ragghianti, Milano, 1945–49; vol. I, 1945, pp. 759–764.

—a cura di Paola della Pergola, Luigi Grassi e Giovanni Previtali, Milano, 1962–66; vol. II, 1962, pp. 511–522.

—testo a cura di Rosanna Bettarini e commento secolare a cura di Paola Barocchi, Firenze, 1966– ; vol. III, Testo, 1971, pp. 365–369.

II.—STORIE DELL'ARTE GENERALI E PARTICOLARI; MANUALI

ALAZARD, JEAN—*L'art italien*, Paris, 1951, vol. II, pp. 160–163.

ARGAN, GIULIO CARLO—*Storia dell'arte italiana*, Firenze, 1968, vol. II, pp. 67–70.

BARONI, COSTANTINO e SAMEK-LUDOVICI, SERGIO—*La pittura lombarda del Quattrocento*, Messina-Firenze, 1952.

BERENSON, BERNARD—*Italian Painters of the Renaissance*, London, 1952.

BIAOSTOCKI, JAN—*Spätmittelalter und beginnende Neuzeit*, «Propyläen Kunstgeschichte», Band 7, Berlin, 1972, p. 40 segg.

BOSKVITS, MIKLOS—*Pittura umbra e marchigiana fra medioevo e rinascimento*, Firenze, 1973.

COLETTI, LUIGI—*I Primitivi: I Padani*, vol. III, Novara, 1947.

Della Chiesa, Di Angela Ottino—*Pittura Lombarda del Quattrocento*, Bergamo, 1961.

CARLI, ENZO e DELL'ACQUA, GIAN ALBERTO—*Storia dell'arte* (*ad uso dei licei classici*), Bergamo, 1964, vol. II, pp. 283–284.

CASTELFRANCHI VEGAS, LIANA e CERCHIARI NECCHI, E—*Storia dell'arte*, Milano, 1963, vol. III, pp. 108–110.

CASTELFRANCHI VEGAS, LIANA—*Il gotico internazionale in Europa* (*I maestri del colore*), Milano, 1966.

CASTELFRANCHI VEGAS, LIANA—*Il gotico internazionale in Italia* (*I maestri del colore*), Milano, 1966.

CASTELFRANCHI VEGAS, LIANA—*Il gotico internazionale in Italia*, Roma, 1966.

CHIAPELLI, RENZO ED ALTRI—*European Painting in the 15th Century*, London, 1961, pp. 9–56.

COLASANTI, ARDUINO—*Italian Painting of the Quattrocento in the Marches*, Firenze, 1932.

EDGELL, G.H.—*A History of Sienese Painting*, New York, 1932.

GAMBA, CARLO—*Pittura umbra del rinascimento; Raffaello*, Novara, 1949.

GENGARO, MARIA LUISA—*Umanesimo e Rinascimento*, «Storia dell'arte classica e italiana», Torino, 1940, vol. III, pp. 222–226.

GODFREY, F.M.—*Early Italian Painting, 1250 –1500*, London, 1956, p. 41 segg.

GRASSI, LUIGI—*La pittura Umbra (Corso Universitario)*, Roma, 1952.

HARTT, FREDERICK—*History of Italian Renaissance Art*, New York, 1969, p. 148 segg.

HEYDENREICH, LUDWIG H.—*Eclosion de la Renaissance, Italie 1400–1460*, Paris, 1972, pp. 252–256.

HAUSER, ARNOLD—*The Social History of Art*, New York, 1951.

MARCHINI, GIUSEPPE—*L'Arte nelle Marche*, in «Marche», Milano, 1965.

—GOMBLICH, E.H.—Recensione in «The Art Bulletin», 1953, pp. 79–84.

MAZZARIOL, GIUSEPPE E PIGNATTI, TERISIO—*Storia dell'arte italiana*, Milano, 1961, vol. II, pp. 120–123.

OCCHINI, BARNA—*L'arte classica e l'arte italiana*, Torino, 1953, vol. II, pp. 121–122.

OERTEL, ROBERT—*Die Frühzeit der italienischen Malerei*, Stuttgart, Berlin, Köln, Mainz, 1966.

PALLUCCHINI, RODOLFO—*La Pittura Veneta del Quattrocento, Il Gotico Internazionale e gli Inizi del Rinascimento*, (Lezioni tenute nell'Università di Bologna durante l'anno accademico 1955–56), Bologna, 1956.

PALLUCCHINI, RODOLFO—*La pittura veneziana del Trecento*, Venezia-Roma, 1964.

PANOFSKY, ERWIN—*Early Netherlandish Painting*, Cambridge, Mass., 1953.

PÄCHT, OTTO—Recensione in "The Burlington Magazine", N. 637, 1956, pp. 110–116; N. 641, 1956, pp. 267–279.

PIGNATTI, TERSIO—*Pittura Veneziana del Quattrocento*, Bergamo, 1959.

PIROVANO, CARLO—*La Pittura in Lombardia*, Milano, 1973.

PITTALUGA, MARY—*La pittura italiana del 400 e del 500*, Firenze, pp. 5–6.

PITTALUGA, MARY—*L'arte italiana*, Firenze, 1959, vol. II, p. 268.

SALMI, MARIO—*L'arte italiana*, Firenze, 1942, vol. II, pp. 142–144.

SALMI, MARIO—*La pittura e la miniatura gotica*, in «Storia di Milano», vol. VI, pp. 767–855.

SERRA, LUIGI—*La pittura del Rinascimento nelle Marche – Relazioni con l'Arte Umbra*, in «Rassegna Marchigiana», IX, 1930/31, pp. 211–228 e 279–293; X, 1932, pp. 1–35.

SERRA, LUIGI—*La pittura del Rinascimento nelle Marche – Relazioni con la scuola veneta, I. La prima metà del Quattrocento*, in «Rassegna Marchigiana», X, 1932, pp. 67–85.

SERRA, LUIGI—*L'arte nelle Marche*, II, Roma, 1934, p. 224 segg.

TROPEA, CESARE—*Storia dell'arte*, Napoli, 1940, vol. II, p. 65 segg.

VENTURI, ADOLFO—*La pittura del quattrocento nell'alta Italia*, Firenze, 1930.

VITALINI SACCONI, G.—*Pittura Marchigiana – La Scuola camerinese*, Trieste, 1968.

WEIGELT, CURT H.—*Sienese Painting of the Trecento*, Firenze, 1930; New York 1974.

ZAMPETTI, PIETRO—*La pittura marchigiana da Gentile a Raffaello*, Roma, 1971, p. 10 segg.

ZERVOS, C.—*Catalan Art*, London-Toronto, 1937.

III.—DIZIONARI, REPERTORI, GUIDE E CATALOGHI

ARSLAN, EDOARDO—*Gentile da Fabriano*, in «Enciclopedia Universale dell'Arte», vol. V, Venezia-Roma, 1961, pp. 679–683.

BUSIGNANI, ALBERTO—*Le Chiesa di Firenze, Quartiere di Santo Spirito*, Firenze, 1974, pp. 202–204.

CARLI, ENZO—*Il Museo di Pisa*, Pisa, 1974, pp. 67–68.

CASTELNUOVO, ENRICO—*Gotico*, in «Enciclopedia Universale dell'Arte», vol. VI, Venezia-Roma, 1958, pp. 441–453.

CATALOGO—*Arte Lombarda dai Visconti agli Sforza*, Milano, 1958.

CATALOGO—*Verzeichnis der ausgestellten Gemälde des 13. bis 18. Jahrhunderts im Museum Dahlem*, Berlin, 1961, p. 35; ed., 1964, p. 50.

CATALOGO—*The International Style. The Arts in Europa around 1400*, Walters Art Gallery, Baltimore, 1962.

CATALOGO—*Europäische Kunst um 1400*, Wien, 1962.

CATALOGO—*National Gallery of Art, Summary Catalogue of European Paintings and Sculpture*, Washington, D.C., 1965, p. 65.

CATALOGO—*Pittura nel Maceratese dal Duecento al Tardo Gotico*, Macerata, 1971.

CATALOGO—*European Paintings: An Illustrated Summary Catalogue, National Gallery of Art, Washington*, Washington, D.C., 1975, p. 148.

CECCHINI, G.—*La Galleria Nazionale dell'Umbria in Perugia*, Roma.

COLASANTI, ARDUINO—*Gentile da Fabriano*, in «Enciclopedia italiana», vol. XVI, Roma, 1932, pp. 579–580.

DELL'ACQUA, GIAN ALBERTO (introduzione)—*Arte Lombarda dai Visconti agli Sforza*, Milano, 1959.

EINSTEIN, LEWIS—*Looking at Italian Pictures in the National Gallery of Art*, Washington, D.C., 1951, p. 30; ed. 1958, pp. 59–61.

EMILIANI, ANDREA—*Gotico internazionale*, in «Enciclopedia Universale dell'Arte», vol. VI, Venezia-Roma, 1958, pp. 312–315.

ENCICLOPEDIA—*Gentile da Fabriano*, in «Lessico Universale Italiano», vol. VIII, Roma, 1971, pp. 623–624.

ENTE MANIFESTAZIONI MILANESI—*Arte Europea da una Collezione Americana*, Milano, 1964, p. 2 segg.

FERRARI, ORESTE—*Treasures of the Vatican*, London, 1971, pp. 7–9.

FRANCIA, ENNIO—*Pinacoteca Vaticana*, Milano, 1968.

GRASSI, LUIGI—*Gentile da Fabriano*, in «Enciclopedia cattorica», vol. VI, Città del Vaticano, 1951, pp. 30–32.

GROSSATO, LUCIO—*Da Giotto al Mantegna* (Catalogo della Mostra), Milano, 1974.

GUIDA—*Marche*, Touring Club Italiano, Milano, 1962.

GUIDA—*Umbria*, Touring Club Italiano, Milano, 1966.

MAGAGNATO, LICISCO—*Da Altichiero a Pisanello* (Catalogo della Mostra), Venezia, 1958.

LONGHI, ROBERTO—*Sul catalogo della Mostra di Verona*, in «Paragone», 107, 1958, pp. 74–76.

MODIGLIANI, ETTORE—*Catalogo della R. Pinacoteca di Brera in Milano*, Milano, 1935, pp. 128–129; ed. 1966, p. 93.

MOLAJOLI, BRUNO—*Fabriano: Monumenti*, in «Enciclopedia Italiana,» vol. XIV, Roma, 1932, p. 701.

MOLAJOLI, BRUNO—*Guide artistica di Fabriano*, Fabriano, 1936; ed. II, Genova, 1968.

MORETTI, ITALO—*La Chiesa di San Niccolò Oltrarno*, Firenze, 1972–3, pp. 61–62 e 73.

MUZZIOLI, GIOVANNI—*Mostra storica nazionale della miniatura*, Firenze, 1953.

OERTEL, ROBERT—*Frühe Italienische Malerei in Altenburg*, Berlin, 1961, p. 45 segg.

POCH-KALOUS, MARGARETHE—*Akademie der Bildenden Künste in Wien*, (Katalog der Gemälde Galerie), Wien, 1972, p. 13.

ROLI, RENATO—*Duomo di Orvieto* (tesori d'arte cristiana), Bologna, 1967, p. 15.

RUSSOLI, FRANCO—*Pinacoteca Poldi Pezzoli*, Milano, 1955, pp. 232–233.

RUSSOLI, FRANCO—*The Berenson Collection*, Milano, 1964, pp. XXIX–XXX.

SALVINI, ROBERTO—*La Galleria degli Uffizi*, Firenze, 1969, p. 16.

SANTI, FRANCESCO—*La Galleria Nazionale dell'Umbria in Perugia*, 1968, p. 15.

SERRA, LUIGI—*Marche: Arte*, in «Enciclopedia Italiana», vol. XXII, Roma, 1934, pp. 233–237.

SHAPLEY, FERN RUSK—*Early Italian Painting in the National Gallery of Art*, Washington, D.C., 1959, pp. 22–23.

SHAPLEY, FERN RUSK—*Paintings from the Samuel H. Kress Collection*, London, 1966, pp. 76–77.

SPENCER, JOHN R.—*Gentile da Fabriano*, in «McGraw-Hill Dictionary of Art», vol. II, New York / Toronto / London / Sydney / Johannesburg, 1969, pp. 483–485.

VIGNI, GIORGIO—*Italiani Centri e Scuole: Umbria e Marche*, in "Enciclopedia Universale dell'Arte", Venezia-Roma, 1958, pp. 293–299.

VERTOVA, LUISA—*Gentile da Fabriano*, in «Kindlers Malerei Lexikon», Band II, Zürich, 1965, pp. 581–585.

WALKER, JOHN—*National Gallery of Art, Washington*, New York, 1975, p. 77.

ZAMPETTI, PIETRO—*Catalogo della Pittura Veneta nelle Marche*, Bergamo, 1950.

IV.—MONOGRAFIE, SAGGI CRITICI, ARTICOLI E SCRITTI VARI

A.-G.-P.—*Pittura nel Maceratese dal Duecento al Tardo Gotico*, in «Arte illustrata,» 1971, pp. 70–71.

ANONIMO—*Postilliana gentilesca*, in «Critica d'Arte», 1954, p. 585.

ANTAL, FREDERICK—*Florentine Painting and its Social Background*, London, 1948.

ARSLAN, EDOARDO—*Riflessioni sulla pittura gotica 'internazionale' in Lombardia nel tardo Trecento*, in «Arte Lombarda», 2, 1963, pp. 25–66.

ARSLAN, EDOARDO—*Aspetti della pittura lombarda nella seconda metà del Trecento*, in «La critica d'arte», nn. 61 e 63, 1964.

BARONI, COSTANTINO—*Tesori d'arte in Lombardia*, Milano, 1952.

BEHLING, LOTTLISA—*Das Italianische Pflanzenbild um 1400 – Zum Wesen des pflanzlichen Dekors auf dem Epiphaniasbild des Gentile da Fabriano in den Uffizien*, in «Pantheon», 24, 1966, pp. 347–359.

BELLOSI, LUCIANO—*Gentile da Fabriano*, Milano, 1966. (註 1)

BERENSON, BERNARD—*Italian Pictures of the Renaissance*, Oxford, 1932.

BERTI, LUCIANO—*Masaccio*, Milano, 1964.

BIAGETTI, BIAGIO—*Il Natale del Redentore in alcuni piccoli dipinti della Pinacoteca Vaticana*, in «L'Illustrazione Vaticana», I, 1930, pp. 39–43.

BIROLLI, ZENO—*Sviluppi ragionali e Gotico internazionale*, in «L'Arte», 18–19/20, 1972, pp. 137–162.

BISOGNI, FABIO—*Per Giacomo di Nicola da Recanati*, in «Paragone», 277, 1973, pp. 44–62.

BOSKOVITS, MIKLOS—*Pittura Fiorentina alla vigilia del Rinascimento*, Firenze.

BRANDI, CESARE—*Giovanni di Paolo*, Firenze, 1947.

BRENZONI, RAFFAELLO—*Pisanello pittore*, Firenze, 1952, p. 88 segg.

BRIZIO, ANNA MARIA—*La mostra d'arte lombarda*, in «Bollettino d'Arte», n. 4, 1958, pp. 356–360.

CADEI, ANTONIO—*Giovannino de' Grassi nel taccuino di Bergamo*, in «La critica d'arte», n. 113, 1970, pp. 17–36.

CÄMMERER-GEORGE, MONIKA—*Die Rahmung der toskanischen Altarbilder im Trecento*, Strasbourg, 1966, p. 191 e Tafel 35.

CHIARELLI, RENZO—*Pisanello*, Milano, 1958, p. 5 segg.

CHIARELLI, RENZO—*L'opera completa del Pisanello*, Milano, 1972.

CHIARELLI, RENZO—*Note pisanelliane*, in «Antichità viva», n. 2, 1972, pp. 3–25.

CLARK, KENNETH—*Architectural Backgrounds in XVth Century Italian Painting*, in «The Arts», I, 1946–1947, p. 13 segg.; p. 33 segg.

CLARK, KENNETH, *International Gothic and Italian Painting*, in «Journal of the Royal Society of Arts», LXXXXV, 1947, pp. 757–770.

COLASANTI, ARDUINO—*Le prime opere di Gentile da Fabriano*, in «Rassegna Marchigiana», XII, 1934, pp. 180–187.

COLETTI, LUIGI—*Pittura veneta dal Trecento al Quattrocento*, in «Arte Veneta», 1947, n. 1, pp. 5–19; n. 4, pp. 251–262.

COLETTI, LUIGI—Pisanello, Milano, 1958, p. 16 segg.

DEGENHART, BERNHARD—*Pisanello, Torino*, 1945, p. 2 segg.

CUPPINI, MARIATERESA—*La mostra veronese della pittura da Altichiero a Pisanello*, in «Vita veronese», 1958, 9–10 settembre-ottobre, pp. 373–379.

DAVIDSON, BERNICE—*News Release; Frick Collection exhibits recently acquired painting by Renaissance Master Gentile da Fabriano*, 1968.

DAVIDSON, BERNICE—*Gentile da Fabriano's Madonna and Child with Saints*, in «Art news», n. 68, 1969, march, pp. 25–26 e 57–60.

DAVIDSON, BERNICE—*Tradition and Innovation: Gentile da Fabriano and Hans Memling*, in «Apollo», May, 1971, pp. 378–385.

DAVISSON, DARRELL, D.—*The Iconology of the S. Trinità Sacristy, 1418–1435: A Study of the Private and Public Function of Religious Art in the Early Quattrocento*, in «The Art Bulletin», September 1975, pp. 315–334.

DE TOLNAY, CHARLES—*The Music of the Universe*, in «Walters Journal», VI, 1934, p. 83 segg.

DEGENHART, BERNHARD—*Antonio Pisanello*, Wien, 1941, p. 7 segg.

DEGENHART, BERNHARD—*Gentile da Fabriano in Rom und die Anfänge des Antikenstudiums*, in «Münchner Jahrbuch des bildenden Kunst», 11, 1960, pp. 59–151.

DEGENHART, BERNHARD e Schmitt, Annegrit—*Corpus der italienischen Zeichnungen 1300–1450*, Berlin, 1968.

DONNINI, GIAMPIERO—*Un ciclo a fresco giovanile di Ottaviano Nelli*, in «Antichità viva», n. 3, 1972, pp. 3–9.

EDITORIAL—*The English and Early Italian Art*, in «Apollo», 1965, April, pp. 254–256.

FOGOLARI, GINO—*Gentile da Fabriano*, in «Celebrazioni Marchigiane», I, Urbino, 1934, pp.

FOGOLARI, GINO—*Gentile da Fabriano*, in «Scritti d'arte di Gino Fogolari», Milano, 1946.

FREMANTLE, RICHARD—*Florentine Gothic Painters*, London, 1975.

GENGARO, MARIA LUISA e COGLIATI ARANO, LUISA—*Miniature Lombarde. Codici miniati dall'VIII al XIV secolo*, Milano, 1970.

GNUDI, CESARE—*Jacobello e Pietro Paolo di Venezia*, in «Critica d'arte», II, 1937, p. 26 segg.

GOLZIO, VINCENZO e ZANDER, GIUSEPPE—*L'arte in Roma nel secolo XV*, Bologna, 1968.

GRANVILLE-FELL, H.—*Gentile da Fabriano*, in «Connoisseur», XCVI, 1935, p. 307.

GRASSI, LUIGI—*Dipinti ignoti di Lorenzo Salimbeni e dell'Alamanno*, in «Critica d'Arte», IX, 1950, pp. 60–69.

GRASSI, LUIGI—*Considerazioni intorno al 'Polittico Quaratesi'*, in «Paragone», 15, Marzo 1951, pp. 20–30.

GRASSI, LUIGI—*Tutta la pittura di Gentile da Fabriano*, Minano, 1953. (註 2)

HUTER, CARL—*Gentile da Fabriano and the Madonna of Humility*, in «Arte veneta», XXIV, 1970, pp. 26–34.

ISERMEYER, C.A.—*Rahmengliederung und Bildfolge in der Florentiner Malerei des 14. Jahrhunderts*, Diss. Göttingen, Würzburg, 1937.

JENNI, ULRIKE—*Das Skizzenbuch der internationalen Gotik in den Uffizien, Der Ubergang vom Musterbuch zum Skizzenbuch*, Wien, 1976.

KAFTAL, GEORGE—*Iconography of the Saints in Tuscan Painting*, Firenze, 1952.

KENNEDY, RUTH W.—*Alesso Baldovinetti, A Critical and Historical Study*, New Haven, 1938.

KRAUTHEIMER, RICHARD—*Lorenzo Ghiberti*, Princeton, 1956; 2nd ed. 1970.

LAVAGNINO, EMILIO—*Un affresco di Gentile da Fabriano a Roma*, in «Arti figurative», 1, 1945, n. 1–2, pp. 40–48.

LONATI, G.—*Gentile da Fabriano a Brescia*, in «Brescia», XIII, 1934, pp. 35–42.

LONGHI, ROBERTO—*Il tramonto della pittura medioevale nell'Italia del Nord* (Lezioni del corso universitario nell'anno accademico 1935–1936), in «Lavori in Valpadana», Firenze, 1973, pp. 91–153.

LONGHI, ROBERTO—*Fatti di Masalino e di Masaccio*, in «La Critica d'Arte», V, 1940, pp. 145–191.

LONGHI, ROBERTO—*Viatico per cinque secoli di pittura veneziana*, Firenze, 1946.

LONGHI, ROBERTO—*Presenza di Masaccio nel Trittico della Neve*, in «Paragone», 25, 1952, pp. 8–16.

LONGHI, ROBERTO—*Una Mostra a Verona*, in «Appordo letterario», 1958, pp. 3–11.

LONGHI, ROBERTO—*Tracciato orvietano*, in «Paragone», 149, 1962, pp. 3–14.

LONGHI, ROBERTO—*Qualche aggiunta antologica al 'gotico internazionale' in Italia*, in «Paragone», 155, 1962, pp.

MALLÈ, L.—*Elementi di cultura francese nella pittura Gotica tarda in Piemonte*, in «Scritti di storia dell'arte in onore di Lionello Venturi», Roma, 1956, p. 141 segg.

MARTINDALE, ANDREW—*Italian art and the international gothic style*, in «Apollo», June 1962, pp. 277–282.

MATALON, STELLA—*Michelino da Besozzo e l'ouvraige de Lombardie*, Milano, 1966.

MATTHIAE, GUGLIELMO ED ALTRI—*Arte, scienza e cultura in Roma cristiana*, Bologna, 1971.

MAYER, AUGUST L.—*Zum Problem Gentile da Fabriano*, in «Pantheon», XI, 1933, pp. 41–46.

MEISS, MILLARD—*An Early Lombard Altarpiece*, in Arte antica e moderna, n. 13/16, 1961, pp. 125–133.

MEISS, MILLARD—*The altered program of the Santa Maria Maggiore*, in «Studien zur tosknischen Kunst (Festschrift für Ludwig Heinrich Heydenreich)», München, 1964, pp. 169–190.

MEISS, MILLARD—*French Painting in the time of Jean de Berry – The late fourteenth century and the patronage of the duke*, London, 1967.

MEISS, MILLARD—*French Painting in the Time of Jean de Berry—The Boucicaut Master*, London, 1968.

MELNIKAS, ANTANAS—*Gentile da Fabriano: The origins and Development of his style*, Michigan, 1961. (註 3)

MICHELETTI, EMMA—*Qualche induzione sugli affreschi di Gentile da Fabriano a Venezia*, in «Rivista d'arte», 28, 1953, pp. 115–120.

MICHELETTI, EMMA—*L'Adorazione dei Magi di Gentile da Fabriano*, Milano, 1963.

MICHELETTI, EMMA—*L'opera completa di Gentile da Fabriano*, Milano, 1976. (註 4)

MOLAJOLI, BRUNO—*Nota su Giovanni Corraduccio da Foligno*, in «Rassegna marchigiana», IX, 1930, pp. 33–37.

MURARO, MICHELANGELO—*Donatello e Squarcione: Proposta per un'esposizione sul Rinascimento a Padova*, in «Donatello e il suo tempo, Atti dell'VIII Convegno Internazionale di Studi sul Rinascimento», Firenze, 1968, pp. 387–397.

MURARO, MICHELANGELO—*Paolo da Venezia*, Milano, 1969.

NEPPI, A.—*Le celebrazioni marchigiane*, in «Brescia», XII, 1934, pp. 9–15.

OERTEL, ROBERT—*Masaccio's Frühwerke*, in «Marburger Jahrbuch für Kunstwissenschaft», VII, 1933, pp. 191–289.

ORLANDI, STEFANO—Beato Angelico, Firenze, 1964.

PACCAGNINI, GIOVANNI—*Pisanello e il ciclo cavalleresco di Mantova*, Venezia, 1972, p. 22 segg.

PÄCHT, OTTO—Early Italian Nature Studies and the Early Calender Landscape, in «Journal of the Warburg and Courtould Institute», XIII, 1950, pp. 13–47.

PANAZZA, GAETANO—*La pittura e la miniatura nel secolo XIV*, in «Storia di Brescia», I, 1963, pp. 929–960.

PANAZZA, GAETANO—*Pitture e sculture nel Broletto di Brescia con particolare riguardo ai secoli 16, 17, 18, e 19*, in «Commentari dell'Ateneo di Brescia 169», 1970, pp. 213–236.

PARRONCHI, ALESSANDRO—*Studi su la Dolce Prospettiva*, Milano, 1964.

PARRONCHI, ALESSANDRO—'*Peregrinus Pinsit*', in «Commentari», Gennaio-Giugno 1975, pp. 3–13.

PIGNATTI, TERISIO—*I Disegni dei Maestri – la scuola veneta*, Milano, 1970.

POPE-HENNESSY, JOHN—*Giovanni di Paolo*, London, 1937.

PROCACCI, UGO—*Gherardo Starnian*, in «Rivista d'arte», XV, 1933, pp. 151–190.; XVII, 1935, pp. 333–384.

PROCACCI, UGO—*Sulla cronologia delle opere di Masaccio e di Masolino tra il 1425 e il 1428*, in «Rivista d'arte», XVIII, 1953, pp. 3–55.

PUDELKO, GEORG—*The Early Works of Paolo Uccello*, in «The Art Bulletin», III, 1934, pp. 231–259.

PUDELKO, GEORG—*The Stylistic Development of Lorenzo Monaco*, in the Burlington Magazine, LXXIII, 1938, pp. 237–248; LXXIV, 1939, pp. 76–81.

RIVOSECCHI, MARIO—*Gentile da Fabriano*, in «Capitolium», 34, 1959, N. 12, pp. 2–10.

ROLI, RENATO—*Considerazioni sull'opera di Ottaviana Nelli*, in «Arte antica e moderna», n. 13/16, 1961, 1961, pp. 114–124.

ROSSI, A.—*Galleria Nazionale delle Marche; Gentile da Fabriano (?): 'Madonna col Bambino'*, in «Bollettino d'arte», 5, 52, 1967, 4, p. 252.

ROSSI, FRANCESCO—*Appunti per una scuola riminese-marchigiana*, in «Bollettino d'arte», 1967, n. 2, pp. 69–77.

ROSSI, FRANCESCO—*Ipotesi per Gentile da Fabriano a Brescia*, in «Notizie da Palazzo Albani», 2, 1973, 1. pp. 11–22.

ROTONDI, PASQUALE—*Lorenzo e Jacopo Salimbeni da Sanseverino*, Fabriano, 1936.

SALMI, MARIO—*Recensione: L. Serra, L'arte nelle Marche dalle origini cristiana alla fine del Gotico*, in «Rivista d'arte», Anno XII, n. 2, 1930, pp. 297–309.

SALMI, MARIO—*L'ouvraige de Lombardie e il primo rinascimento*, in «Actes du XVIIme congrès international d'histoire de l'art», 1955, La Haye, pp. 269–274.

SALMI, MARIO—*La Miniatura Italiana*, Milano 1954.

SALVINI, ROBERTO—*L'arte di Agnolo Gaddi*, Firenze, 1936.

SASSI, ROMUALDO—*Un monaco olivetano scultore*, in «Rivista storica benedettina»,

XXIV, 1955, pp. 43–46.

SCHENDEL, A. VAN—*Les dessin en Lombardie*, Brussels, 1938.

SCHILD-BUNIM, M.—*Space in Medieval Painting and the Forerunners of Perspective*, New York, 1940.

SCHLOSSER, JULIUS VON—*L'Arte di Corte nel secolo XIV* (titolo originale: *Ein veronesisches Bilderbuch und die höfische Kunst des XVI. Jahrhunderts*, in «Jahrbuch der kunsthistorischen Sammlungen der allerhöchsten Kaiserhauses», Wien XVI, 1895), Cremona, 1965.

SERRA, LUIGI—*Urbino* (*Catalogo delle cose d'arte e di antichità d'Italia*), Roma, 1932.

SERRA, LUIGI—*Le origini artistiche di Gentile da Fabriano*, in «Rassagne Marchigiana», Anno XI, 1933, n. 1, pp. 59–65.

SERRA, LUIGI—La scuola pittorica sanseverinate, in «Rassegna marchigiana», XI, 1933, p. 141 segg.

SINDONA, ENIO—*Pisanello*, Milano, 1961, p. 17 segg.

STERLIN, CHARLES—*Un tableau inedit de Gentile da Fabriano*, in «Paragone», IX, 1958, pp. 26–33.

SUIDA, WILHELM—*Two unpublished paintings by Gentile da Fabriano*, in «The Art Quarterly», 3, 1940, n. 4, pp. 348–352.

SUTTON, DENIS—The Challenge of International Gothic, in «Apollo», June 1962, pp. 248–258.

THOMPSON, D.V.—*The Materials of Medieval Painting*, New Haven, 1936.

TIETZE, HANS e TIETZE-CONRAT, ERICA—*The Drawings of the Venetian Paintiers in the 15th and 16th centuries*, New York, 1944; 1969.

TODOROW, MARIA FOSSI—*The Exhibition 'Da Altichiero a Pisanello' in Verona*, in «The Burlington Magazine», CI, 1959, pp. 10–14

TODOROW, MARIA FOSSI—*I Disegni dei Maestri-L'Italia dalle origini a Pisanello*, Milano, 1970.

TOESCA, PIETRO—*L'uffiziolo visconteo Landau-Finaly*, Firenze, 1951.

TOESCA, PIETRO—*Il Trecento*, Torino, 1951.

VAN OS, H.W.—*Marias Demut und Verherrlichung in der sienesischen Malerei 1300–1450*, 's-Gravenhage / Staatsuitgeverij / Ministerie van Cultuur, Recreatie en Maatschappelijk Werk, 1969.

VAYER, LAJOS—*Masolino és Róma*, Budapest, 1962.

VERTOVA, LUISA, *I Tatti*, in «Antichità viva», n. 6, 1969, pp. 53–78.

VERTOVA, LUISA—*Painting in the Maceratese*, in «The Burlignton Magazine» n. 824, November, 1971, pp. 687–692.

VOLPE, CARLO—*Due frammenti di Gentile da Fabriano*, in «Paragone» 9, 1958, 101, pp. 53–55.

VOLPE, CARLO—*Da Altichiero a Pisanello*, in «Arte Antica e Moderna», n. IV, 1958, pp. 409–412.

WEISE, C.—*Die geistige Welt der Gotik und ihre Bedeutung für Italien*, Halle, 1939.

WHITE, JOHN—*Development in Renaissance Perspective*, in «Journal of the Warburg and Courtauld Institutes», XII, 1949, pp. 58–79; XIV, 1951, pp. 42–69.

WHITE, JOHN—*The Birth and Rebirth of Pictorial Space*, London, 1957.

WINKLER, F.—*Paul de Limburg in Florence*, in «The Burlington Magazine», LVI, 1930, pp. 95–96.

WITTHOFT, BRUCIA—*A Saint Michael by Bonifacio Bembo*", in «Arte lombarda», XIX/41, 1974, pp. 43–50.

ZAMPETTI, PIETRO—*La Mostra della Pittura Veneta nelle Marche*, in «Bollettino d'Arte», 1950, pp. 372–375.

ZERI, FEDERICO—*Un'ipotesi sui rapporti tra Allegretto Nuzi e Francecuccio Ghissi*, in «Antichità viva», n. 5, 1975, pp. 3–7.

（註）

1

BELLOSI, LUCIANO—*Gentile da Fabriano*, Milano, 1966.

"I Maestri del Colore" シリーズの一冊で，一般向けの画集である。ジェンティーレの初期における Allegretto Nuzi との関係を，またシエナ芸術からの，特に Taddeo di Bartolo からの影響を否定し，ロンギの主張するオルヴィエートがジェンティーレの芸術形成に与ったとする意見を支持する。しかし多くの学者と同様，ベルリンの《聖母子》には，Giovannino de' Grassi や Michelino da Besozzo を主とする 14 世紀末のミラーノ芸術から受けた教養を認めている。著者によるジェンティーレの作品のクロノロジーは，ヴェネツィア時代に "Madonna col Bambino" (Perugia, Galleria Nazionale dell'Umbria), "Polittico di Valle Romita" (Milano, Pinacoteca di Brera), "San Francesco che riceve le stimmate" (Gallarate, raccolta Carmitani), ブレッシア時代に "Incoronazione della Vergine" (Paris, Collection de Heugel), "Madonna col Bambino" (Pisa, Museo Nazionale di San Matteo), "Madonna col Bambino" (Washington, National Gallery), フィレンツェ時代に "Madonna col Bambino e I Santi Lorenzo e Giuliano" (New York, Frick Collection), "Madonna col Bambino" (New Haven, Yale University Art Gallery), "Madonna col Bambino" (New York, Metropolitan Museum of Art) となっている。

2

GRASSI, LUIGI *Lutta la pittuna di Gentile da Fabriano*, Minano, 1953.

Bruno Molajoli, Gentile da Fabriano, Fabriano, 1927 以後に刊行された最初のジェンティーレのモノグラフである。著者はまず冒頭でジェンティーレの芸術の誕生とその展開の解明の難しさを訴えたのち，Allegretto Nuzi をジェンティーレの直接の師とする伝統的な意見をクロノロジーの上で否定し，ジェンティーレの最初の作品とみなすファブリアーノのサン・ニッコロ聖堂にあった《聖母子》(西ベルリン国立美術館)から判断して，彼の最初の修業の場をイタリアにおける国際ゴシックの中心地の一つ，ロンバルディアに求める．著者によればジェンティーレの最初のロンバルディア行きは，父親の死（1385 年頃——当時ジェンティーレは 15 歳位）の直後であったとされている。このベルリンの《聖母子》を育てたのは "Ouvraige de Lombardie" と呼ばれているロンバルディアのミニアチュールや絵画であり，また Giovannino de' Grassi や Michelino da Besozzo などのミニアチュールの画家たちであったとし，逆にカヴァルカッセルレ，ベレンソン，ロンギらの主張するジェンティーレとウンブリア派の早期の関係を否定している。

現在ミラーノのブレラ美術館にある《ヴァルレ・ロミタ多翼祭壇画》に関しては，そこにヴェネツィア的モチーフを認めて 1410 年頃の作とする A.L. Mayer の説に異論をとなえ，特に中央パネルの《聖母戴冠》に描かれている神，キリスト，聖母のグループにロンバルディアのミニアチュールの影響が未だに強いことを指摘し，その制作年を 1400 年頃に早めている。同時に同パネルの奏楽天使たちや他のパネルにシエナ絵画，特に Taddeo di Bartolo の絵画との接触の最初の徴候が顕れているとする。「おそらくジェンティーレは，タッデオ・ディ・バルトロの作品を見たか，あるいは北イタリアで彼を直接に知っていたのであろう。換言すれば，ジェンティーレの若い頃のシエナ旅行を必ずしも仮定する必要はない」(p. 15)。

この《ヴァルレ・ロミタ多翼祭壇画》を完成したのち，著者の考えでは，ジェンティーレはファブリアーノからペルージアに移り，《聖母子と天使たち》(ペルージア，ウンブリア国立美術館）と《聖痕を受ける聖フランチェスコ》（イタリア，個人蔵）の制作に携わったとする。「《聖痕を受ける聖フランチェスコ》では，象牙色に近い聖者の僧服の大きく流暢なリズムは，タッデオが 1403 年に描いたペルージアの絵画館にある多翼祭壇画の中央パネルの聖フランチェスコのそれをほとんど正確に写している」(pp. 15～16)。また《聖母子と天使たち》については，ロンバルディア的なものが未だ強く，一方柔いキアーロスクーロや肉付けにシエナの流れをみている。

ここで著者はそれまでにしばしば論じられてきたジェンティーレと Salimbeni 兄弟や Ottaviano Nelli らのウンブリア＝マルケ地方の画家たちとの様式上の親近性について触れ，そこに双方の相互依存関係よりも，ロンバルディアやフランスのミニアチュールを共通の基盤として生れた芸術の平行関係を認め，サリンベーニ兄弟の合場には，影響関係はむしろジェンティーレから彼らにあるとしている．

1408 年にジェンティーレがヴェネツィアに滞在していたことは記録から知られるが，著者はジェンティーレのヴェネツィア行きが，先の《聖痕を受ける聖フランチェスコ》と《聖母子と天使たち》を完成したのちの 1405 年よりやや後とする。ヴェネツィアでジェンティーレは，フランチェスコ・アマディのための祭壇画，パラッツォ・ドゥカーレのサーラ・デル・マッジョール・コンシリオに海戦の壁

画，アントニオ・バスクァリーノのための二枚の肖像画，そして《海上の嵐》を描いているが，いずれも現存しない。上記のような重要な作品が彼に委嘱され，またかなりの額の支払いが彼になされているので，ジェンティーレがヴェネツィアにあってすでに画家としての高い地位を確立し，また当時のヴェネツィアの絵画情況を考えると，当地の画家たちに大きな影響を及ぼしたのであろうことは，グラッシだけではなく多くの学者たちによって推測されている。なお著者は，ワシントン国立美術館（クレス・コレクション）の《聖母子》をこの期の作としている。

ヴェネツィア時代に続くのがブレッシァ時代（1414年から1419年までの記録あり）である。この地で制作したジェンティーレの作品（市会議所内の一礼拝堂の装飾，教皇マルティヌス五世のための祭壇画）は現存しないが，ビサの《聖母子》が著者によってブレッシァ時代のカタログに載せられている。著者は1420—21年のほぼ2年間をジェンティーレが郷里のファブリアーノで送ったと想像している。記録によるとジェンティーレは残りの生涯をファブリアーノで過す予定をしているが，それを変更して1422年にフィレンツェに現われ，居を構えている。この変更の理由をグラッシは地方の狭隘な芸術環境に満足できず，新しい芸術の息吹きに触れたいという画家の願望からと説明する。

ペルージアの《聖母子》と図像的に多くの共通点を具えたニューヨーク・メトロポリタン美術館の《聖母子》は，ジェンティーレのフィレンツェ芸術との初めての接触を示す作品として位置づけられている。ゴシックのリズムのうちにありながらも，そのゆったりとして堂々とした聖母子像は，線と量感との調和という点においてヤコポ・デルラ・クエルチァやナンニ・ディ・バンコを想起させるとしている。

ジェンティーレの代表作である1423年作の《東方三博士の礼拝》（フィレンツェ，ウフィーツィ美館）に関して著者は，幻想的な物語を伝える想像力に富んだ画面に，豪華な衣裳や，肖像画を思わせる人物たち，動植物などの正確な自然描写を巧みに融合させて織り込んだこの画家の特異な才能を強調する。画面の中の動物を描写する際，ジェンティーレは，ロンバルディアの画家たちや彼の弟子とされるピサネルロの写生帖を利用したのではないかとし，人物像に関してはJacques Coëne やJacquemart de Hesdinのミニアチュールの中の人物との関連が述べられている。しかし洞窟，飼い葉桶，雄牛，驢馬，聖ヨゼフなどのモチーフはシエナのキエーザ・ディ・セルヴィにある1404年のタッデオ・ディ・バルトロの手になる《降誕図》によく似ていることから，ジェンティーレはフィレンツェに赴く以前にすでに短期間シエナに滞在したのであろうと推定している。この作品とフィレンツェ芸術との関係は，祭壇上部のキリストの半身像や予言者像の強い造形力に求められ，さらに彼らの表情に見られる深い精神性は，例外的にマザッチオのウマニタに近づいているとする。

この《東方三博士の礼拝》に次いでジェンティーレはフィレンツェで《クァラテジ多翼祭壇画》（ハンプトン・コート，ロイヤル・コレクション；フィレンツェ，ウフィーツィ美術館他）を1425年に完成させるが，著者によればその前に《聖母戴冠》（パリ，個人コレクション），ワシントン・ナショナル・ギャラリー（クレス・コレクション）の《聖母子》，ベレンソン・コレクションの《聖母子》が置かれ，いずれもシエナの影響が強いとし，「ファブリアーノの画家は，フィレンツェでの長い滞在をシエナである期間仕事をするためにしばしば中断し，二つの町での活動を交互にしていたのではないか」（p. 31）と考えている。なおパリの《聖母戴冠》のコピーがウィーンのアカデミア美術館にあるが，ここではマルケの画家Antonio da Fabrianoの手に帰されている。

《東方三博士の礼拝》から《クァラテジ多翼祭壇画》に至る二年間に，「画家（ジェンティーレ）の関心は，1423年から1427年にかけて《Fatti di Masolino e di Masaccio》に導かれたフィレンツェの芸術活動とその熱気にますます決定的に向けられる。ジェンティーレの目には，両者の仕事は現代のわれわれが考えるように相反するものとは映らなかったにちがいない。たとえジェンティーレがその意義を誤解していたとしても，フィレンツェで起っている変化に心を奪われたトスカナ人以外の最初の一人であったであろう」（p. 33）。「《クァラテジ多翼祭壇画》ではシエナの伝統との接触が例外的に中断されている。そして常に強く明確なロンバルディアへの追憶がブレデルラの二場面に再び蘇っている。他方ロンドンにある《聖母子と天使たち》（祭壇画中央パネル）とウフィーツィの四人の《聖者》（両側パネル）には，フィレンツェの文化が浸透している」（p. 33）。著者は，聖母や天使，そしてマグダラのマリアにマゾリーノ＝ギベルティ的特徴を認め，また聖ニコラウス伝を扱ったブレデルラのうち，《聖ニコラウスの誕生》の場面の中の一女性に，ヘレニズム＝ローマ期の石棺からその図像を得ていることを指摘している。なお著者は祭壇上部の三角形の部分に描かれた人物や中央パネルの王座の両側の天使たちに，フィレンツェの画家Bicci di Lorenzo，あるいはMaestro del Bambino Vispoの協力があるとしている。この《クァラテジ多翼祭壇画》に制

作年において近い作品として，《受胎告知》（ローマ，ヴァティカーノ美術館），《聖母子》（ニュー・ヘヴン，イェール大学附属美術館）が挙げられている。

フィレンツェでの滞在を終えたジェンティーレは，シエナとオルヴィエートで仕事をし，最後にローマを訪れ，サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノで壁画装飾を手がけるが，未完のままに残し，ピサネルロが完成させた。この壁画はその後破壊されている。ジェンティーレがローマで描いた作品で，現存する唯一の《聖母子》（ヴェルレトリ，大聖堂）に著者は，比類のないコスモポリタン的感覚によって様々に異なった，ときに全く正反対の諸文化を吸収同化し，質の高い作品を生みだした画家ジェンティーレの芸術の結晶を見る。最後に著者はジェンティーレ・ダ・ファブリアーノが 1400 年代の絵画の中で占める位置について言及し，ピサネルロを除いた他の国際ゴシック様式の画家たちに比してのその芸術の美的優位性，フィレンツェ時代に見せたその鋭い造形的直観力，そしてヤコポ・ベルリーニ，ピサネルロ，ジャンボーノ，ヤコベルロ・デル・フィオーレといった画家たちに与えた大きな影響力を考えた場合，ジェンティーレは追随的画家というよりも，むしろ指導的画家であったとする。

3

MELNIKAS, ANTANAS—*Gemtile da Fabriano: The origins and Development of his style*, Michigan, 1961.

1961 年にミシガン大学に提出された Ph. D 論文で，序論と四つの章，作品カタログ，アペンディクス，文献目録とからなり，四つの章には The Marchigian Period (ca. 1360–1406), The Venetian and Brescian Periods (1406/7–1413 and 1413–1419), Early Florentine Period (1419–1423), Late Florentine Period (1423–1426)という標題がそれぞれに付されている。

序論では，それまでのジェンティーレの研究史と論文内容の要旨を伝え，ジェンティーレの研究の上で 1958年の春と夏にミラーノとヴェローナで開かれた Arte Lombarda dai Visconti agli Sforza と Mostra d'Arte della Città di Verona: da Altichiero a Pisanello の二つの展覧会を高く評価し，「本研究は，これらの展覧会で得られた諸成果や，最近ジェンティーレに帰された何点かの作品を用いて，彼の様式の起源と発展に関する初期の研究の限界を払拭しようとするものである」(p. 7) と本論文の狙いとするところを述べている。

第一章のジェンティーレの〈マルケ時代〉に，著者は《聖母戴冠》(Paris, Heugel Collection),《ヴァルレ・ロミタ多翼祭壇画》(Milano, Pinacoteca di Brera),《聖母子》(Perugia, Galleria Nazionale dell'Umbria) の三点を置き，これらの作品を通してジェンティーレの芸術修業がマルケおよびウンブリアの両地方でなされたことを明らかにしている。特にオルヴィエートに焦点を当てて，「ルイージ・グラッシが言うようにジェンティーレはロンバルディアへ行く代わりに，彼の郷里から遠くない所で活躍していた芸術家の助手としてその活動を開始したとする方がいっそう可能性が強い。14世紀末のファブリアーノの若い芸術家が金銀細工，七宝，写本装飾のエキスパートになるにはオルヴィエート以上に格好の地は有りえなかったであろう。ジェンティーレがフレスコ絵画における洗練されたシエナの色彩を学びうるのはオルヴィエートだけで，Ugolino di Prete Illario のもとであった」(p. 27) とする。

次にヴェネツィア絵画の伝統と初期国際ゴシック様式がヴェネツィアの画家たち，Catarino, Maestro Guglielmo, Jacobello Bonomo, Jacobello del Fiore らの作品によってマルケ地方に紹介されていく過程を巡り，著者が《聖母戴冠》に続く 1405 年の作とみる《ヴァルレ・ロミタ多翼祭壇画》にヴェネツィア絵画やウンブリア＝マルケ地方での初期国際ゴシック様式への傾斜が現われていることを確認する。さらに筆を進めて，北方との交流をもとにロンバルディア地方を中心に流行する盛期国際ゴシック様式が，ヴェネツィアやリミニを経由してウンブリア＝マルケ地方にもたらされ，それが Ottaviano Nelli や Lorenzo e Jacopo Salimbeni 兄弟の諸作品に開花していることを指摘し，ジェンティーレのペルージアの《聖母子》もこのコスモポリタン的流行への同化を示す好例とみ，ジェンティーレの早期のロンバルディアへの旅を再び強く否定する。最後に，マルケ派絵画の価値を理解した最初の人として Lionello Venturi の名を挙げ，彼の以下の言葉をもってこの章を締め括っている。「ジェンティーレは確かにマルケを去った。だがしかし彼はラファエルロ，バロッチ，そしてマラッタのようにさらに学ぼうとして去ったのではなく，祖国で学んだことを教えるためであった」("Attraverso le Marche", *L'Arte* XVIII, 1915, p. 28)

次の章〈ヴェネツィアおよびブレッシア時代〉では，先の章の最後のヴェントゥーリの言葉を受けてジェンティーレのヴェネツィア行きは，彼の作品が祖国で彼に名声をもたらした後に初めて実現されたものと考えるのが妥当であるとし，当時のヴェネツィア総督と親しい関係にあったファブリアーノの領主キアヴェルリ家からの推薦によるもの

であろうとする。またアマディ家の記録からヴェネツィアでもジェンティーレが高い評価を受け，さらにパラッツォ・ドゥカーレの仕事を委嘱されていることから彼が当時ヴェネツィアで最も優れた画家の一人であったことを想像し，それを裏づけるためにジェンティーレが一日1ドゥカートの俸給を得，貴族のトーガを纏う特権を与えられていたというサンソヴィーノの報告を引用している。このジェンティーレのヴェネツィア時代を彼の生涯において次のように著者は位置づける。「ヴェネツィア時代はジェンティーレの生涯のうちでの転換点とみなすことができる。この時から彼は次第に教会のための画家という慎ましい立場から，世俗の政府，豪華な宮廷，富裕な商人，そして最後に，その晩年にはローマのマルティヌス五世の法皇宮をパトロンとする方向に進んで行くのである」(p. 61)。

著者によれば，ブレッシア時代はジェンティーレにとって二つの大きな意味を持ったという。一つは北イタリアの国際ゴシック芸術の環境の中に入り，そこで活躍していたフランスやフランドルの芸術家たちと接触する機会をもったこと，いま一つはマラテスタの宮廷でマルティヌス五世と接し，教皇宁の画家となるよう招請されたこととされる。第一の点に関連して著者は，1389年に決定されたミラーノ大聖堂造営のために北方の建築家，画家，彫刻家たちが招請され，その結果アヴィニョンのシエナ風ゴシック，ヴァロワ家の宮廷様式，フランドルとボヘミアのリアリズムが合体して一つの様式となり，北イタリアにおけるジオット的伝統を駆逐し，気取った形態や洗練されたイデアリズムへの熱狂を示す新しい世代の芸術家が誕生したとする。その代表者として Giovannino de' Grassi と Michelino da Besozzo が挙げられ，特に「ミケリーノの鋭い観察，リズミカルな筆線，そしてデリケートな陰影，そして人物のエーテル的彩色は疑いなくジエンティーレを引きつけた」(pp. 69–70) とみる。

ところで著者は，1419年9月18日付のパンドルフォ・マラテスタ宛のジェンティーレ自筆の手紙と1420年3月23日，および同年4月6日の彼のトンマーソ・キアヴェッリへの税金免除願いの記録に基づいて，1419年から1422年までのジェンティーレの行動をこう想定している。すなわち教皇マルティヌス五世の招きを受諾したジェンティーレは教皇に従ってローマ行きを予定するが，諸般の事情によりローマに入れないため教皇とともにフィレンツェ滞在を余儀なくさせられる。こうした不安定な情況と経済的な問題からフィレンツェにいてファブリアーノの領主宛に，残りの生涯を郷里で過す予定であるが，ついては税金を免除してほしい旨の手紙を出したとする。したがって著者は，他の学者たちが想像するようにジェンティーレがファブリアーノにいったん戻ることなく，ブレッシアからフィレンツェに赴き，そのままそこに滞在していたと判断する。

第三章の〈初期フィレンツェ時代〉では，先ず14世紀末から15世紀初頭にかけてのフィレンツェの絵画情況が著者によって以下のように展望される。——フィレンツェにおいては，ジオッテスキやガッデスキの伝統が根強く，北の国際様式の存在が明瞭に確認されるのは1404年以降になってからである。この国際ゴシック様式と相並んで，一方にドナテルロやナンニ・ディ・バンコらによる古典古代への復帰の気運の芽生えがあり，15世紀第1四半世紀のフィレンツェでは〈国際ゴシック〉と古典古代とが，いずれも新しいものとみなされ，歓迎されていた。しかし自然の模倣＝写実主義という，一般には重要視されていない第三の「リアリスト・ムーヴメント」があり，15世紀の前半にあってはこの写実主義と先の古典古代の世界とが一つの目的のために統合されず，別々に探究され，15世紀中葉に至って初めて写実主義が古典の原理によって支配され，ルネサンスの確立をみる。——「ジェンティーレのフィレンツェ到来が少なからぬ貢献をなすのはこの第三の写実的傾向に対してである。マルケ特有の穏やかなリリシズムとロンバルディア的な観察の鋭さは，視覚世界をよりよく理解しようとする方向に向ってのフィレンツェの芸術家たちの散発的な試みを強化することになる」(p. 83)。

フィレンツェで制作されたジェンティーレの代表作《東方三博士の礼拝》に関して著者は，当時のイタリアで宗教上の，あるいは市民的行事の際に組織された宗教劇や行列を記録しようと意図して制作されたものであり，また「それは安定した社会によって印された歴史上の一時代，封建主義の桎梏を打破し，貴族によって享受されていた排他的諸特権を廃して，新しい自由な市民階級，商人やパッラ・ストロッツィもその一人であった銀行家を新たに誕生させた新秩序を反映している」(p. 85) との見方をとっている。なお著者は，当時のフィレンツェにおける〈国際ゴシック様式〉の代表的画家ロレンツォ・モナコの同一主題の祭壇画とを比較して「ロレンツォの祭壇画では，フィレンツェ的形式主義とシエナ的幻想性が一諸になって一種の宗教的情緒性を高めているのに対し，ジェンティーレの作品はより世俗的で，非宗教的である」(p. 89) として，両画家の作品の性格の相違を看取している。この《東方三博士の礼拝》を含めて著者がジェンティーレのフィレンツェ時代の前期に帰している作品には，ピサの《聖母子》，ワシントン・ナショナル・ギャラリーの《聖母子》の二点があり，

これらの作品で「ファブリアーノの画家は，いっそう合理的なプロポーションへの高まる関心と，装飾的なものと造形的なものとの均衡を求めるフィレンツェの芸術家たちへの称賛を見せている」(p. 106) としている。

第四章で著者は，ジェンティーレのフィレンツェでの後期の活動を分析することによって，ジェンティーレが革新的芸術を代表する画家ではないが，「国際様式の様々の地方的およびコスモポリタン的諸相を完成にもたらし，それらをフィレンツェ派絵画の新しい目標に融合させた」(p. 114) ことを明らかにしようとする。

先ず《クァラテジ多翼祭壇画》をとりあげ，聖母子を描いた中央パネルにはシエナ的な仕上げの繊細さ，聖母の外衣の襞の流れにみるギベルティ的優雅さ，そしてフィレンツェ的形態感覚等の融合，また側パネルには洗練された色彩感覚と顕著な彫塑的効果を認める。《クァラテジ多翼祭壇画》と同じようにフィレンツェ的形態感覚を具えた他の小作品として，最近フリック・コレクションの所有となった《聖母子と聖ラウレンティウスおよび聖ユリアヌス》とニューヨク・メトロポリタンの《聖母子》が挙げられている。フリックの《聖母子》に関する説明の中で，著者は幼児キリストの図像に触れ，初期の作品では北イタリアの国際ゴシック様式での表現に見られるように，脚の周囲を透明のヴェールで被っただけのほぼ完全な裸体で表現されているのに対し，《東方三博士の礼拝》よりも後の作品では優雅な衣装を身につけていることを指摘し，それをシエナ派の影響とみる。この事実と，画面の比較的簡素なこと，聖母のモニュメンタルな表現等を考慮に入れて，フリックの《聖母子》は「《クァラテジ多翼祭壇画》よりも“革新的”かつ“ルネサンス的”様式で描かれていて，後の作品である」(p. 152) とし，1426 年にその制作年を定めている。

メトロポリタンの《聖母子》の彫刻的な力強さに，著者はドナテルロのフィレンツェ大聖堂の予言者像や，ヤコポ・デルラ・クエルチァのフォンテ・ガイアの諸徳像の影響をみている。そして最後にジェンティーレとヤコポの芸術に触れ，「メトロポリタン美術館の作品は，理想の優雅さとモニュメンタルな彫塑性を希求したヤコポ・デルラ・クエルチァへの傾倒を示している。……二人は初期にはゴシック様式に影響を受けたが，円熟期に至って初めてそれを超克することができたのである」(pp. 156–7) と結んでいる。

4

MICHELETTI, EMMA—*L'opera completa di Gentie da Fabriano*, Milano, 1976.

"L'opera completa di ..." のシリーズのひとつで，ジェンティーレの最新のモノグラフである。ジェンティーレの作品カタログにベレンソン・コレクションの《聖パウロ》と《聖ペテロ》(C. Volpe が 1958 年にジェンティーレに帰した。Cfr. C. Volpe, Due frammenti di Gentile da Fabriano, *Paragone*, 9, 1958, 101, pp. 53–55.)，およびブッリュセルの《大天使聖ミカエル》(R. Longhi が 1928年にジェンティーレの作としている。Cfr. R. Longhi, "Me pinxit": I.—Un S. Michele Arcangelo di Gentile da Fabriano, *Pinacoteca*, I, 1928–9, pp. 71–5.) が加わり，また近年発見され，フリック・コレクションに納まった《聖母子と二聖人》(Cfr. C. Sterling, Un tableau inedit de Gentile a da Fabriano, *Paragone*, IX, 1958, 101, pp. 27–33; B.F. Davidosn, Gentile da Fabriano's Madonna and Child with Saints, Art news, 68, 1969, 1, pp. 25–6, 57–60) も掲載され，フィレンツェ時代の作とされている。

様々に議論がなされているジェンティーレの初期の芸術形成に関しては，彼の現存作品にはマルケ地方の芸術と結びつくものはなく，一般に最も初期の作とされるベルリンの《聖母子》はシエナ文化とロンバルディアのミニアチュールとの関連を示しているとする。シエナ芸術との接触は直接の旅行，ないしはオルヴィエート経由によって，ロンバルディア的教養は 1385 年の父の死後に直ちに実行されたと著者が考える現地への旅行によって説明がなされている。1400 年代のイタリア美術におけるジェンティーレの位置については，ジェンティーレは革新的な芸術家ではなかったが，さりとて絵画における種々の傾向を巧みに同化し，表現しただけの画家ではなく，彼の造形感覚のうちには後のヴェネツィア派やドメニコ・ヴェネツィアーノの絵画の中で開花する新しい種子が宿されていたとみる。

著者によるジェンティーレの作品のクロノロジーは以下の通りである。

"Madonna con il Bambino" (Berlin, Staatlich Museen)—forse alla fine del Trecento, certo prima della partenza per Venezia; "Polittico di Valle Romita" (Milano, Pinacoteca Brera)—intorno al 1400; "Madonna con il Bambino e Angeli Musicanti" (Perugia, Galleria Nazionale dell 'Umbria)—primo decennio del 1400, forse subito prima della partenza per Venezia/ "Madonna con il Bambino e due Angeli" (Tulsa,

Philbrook Art Center)—intorno al 1410/"Madonna con il Bambino"(pisa, Museo Civico)—intorno al 1415–16/"Madonna con il Bambino e Angeli Musicanti" (New York, Metropolitan Museum of Art)—primissimi tempi del soggiorno fiorentino; "Incoronazione della Vergine" (Paris, prop, priv.)—durante il soggiorno fabrianese, cioè subito prima dell'Adorazione dei Magi; "San Paolo", "San Pietro" (Collezione Berenson)—periodo fiorentino; "Pala dell'Adorazione dei Magi"—1423; "Polittico Quaratesi"—1425; "Madonna con il Bambino e I Santi Lorenzo e Giuliano" (New York, Frick Collection)—period fiorentino; "Madonna con il Bambino" (Washington, National Gallery)—intorno al 1425; "Annunziazione" (Roma, Pinacoteca Vaticana)—intorno al 1425; "Madonna con il Bambino" (Firenze, collezione Berenson)—intorno al 1425; "Madonna con il Bambino" (New Haven, Yale University Art Gallery)—periodo fiorentino / "Madonna con il Bambino" (Orvieto, Duomo)—1426/"Madonna con il Bambino" (Velletri, Capitolo del Duomo)—periodo romano.

後記

1929年に Bruno Molajoli が初めてジェンティーレ・ダ・ファブリアーノの総合文献目録 *Bibliografia di Gentile da Fabriano*, in "Bollettino del R. Istituto di Archeologia e Storia dell'Arte", III, 1929, pp. 102–107. を編んで以来，ほぼ半世紀近くが経過した。その間，質量ともに必ずしも豊富とはいえないが，ジェンティーレに関する数冊のモノグラフ，雑誌論文，その他が新たに刊行され，また一方ではジェンティーレの芸術と密接な関係にある〈国際ゴシック様式〉，および1300年代末から1400年代初頭にかけての "vigilia del Rinascimento" 期のフィレンツェ絵画に対する研究の注目すべき成果が相当にあげられている。だがそれらの文献をジェンティーレを中心に体系的に総集した目録は筆者の知るかぎり未だ紹介されていない。本文献目録は筆者が構想しているジェンティーレ・ダ・ファブリアーノとイタリアにおける〈国際ゴシック様式〉の研究の端緒として，またさきの Molajoli の文献目録に付加する目的で試作したものである。したがって掲載する文献は1930年以降に刊行されたものに限定し，分類の仕方も Molajoli のそれと全く同一にした。しかし筆者の置かれている現状況では徹底した文献調査をすることは不可能であり，直接にあたることのできなかった文献も何点かある。それ故に，誤記や重要な文献の遺漏が多々あるのではないかと危惧している。それらが判り次第，今後の研究過程で訂正，補塡し，できうるかぎり完璧なものに近づけたい意向である。なお当初，O. H. Giglioli, *Masaccio e la sua Bibliografia*, in "Bollettino del R. Istituto di Archeologia e Storia dell'Arte", III, 1929, pp. 55–101. あるいは R. Salvini, *Giotto—Bibliografia*, Roma, 1938; C. De Benedictis, *Giotto—Bibliografia*, vol. II (1937–1970), Roma, 1973. のように，文献内容を逐一紹介する予定でいたが準備不足と時間に限りがあったため，四点のモノグラフだけに留めざるをえなかった。これも将来の課題として残しておきたい。

最後に本文献目録を作成するにあたって御協力を頂いたローマ在住の浅井朋子氏に心から感謝致します。

特別展記録

＊ホドラー展
EXPOSITION FERDINAND HODLER

1975年4月5日～5月25日
主催：国立西洋美術館・スイス＝プロヘルヴェティア文化財団・京都市・朝日新聞社
出品内容＝油彩58点，素描・水彩42点，彫刻1点，計101点

ベックリン，クレー，ジャコメッティ，ル・コルビュジェ等，近代のスイスからは個性的な大芸術家が輩出しているが，ホドラーもその一人で，世紀末から今世紀初頭にかけて，アール・ヌーヴォーあるいは象徴主義的な時代背景のもとに活躍した。ホドラーはドイツ，イタリア等にも旅行したが，生涯の大半を祖国ですごしたため，国際的な知名度は必ずしも高くなく，それだけにスイスの風土に深く根ざした極めてスイス的な画家として，近代絵画史に独自の地位を占めている。ホドラーの作品は風景画，肖像画，それに象徴主義的な寓意画が中心を占めているが，特に晩年の作品は，ドイツ，オーストリアの表現主義の画家たちに大きな影響を与え，ムンク，ヴァン・ゴッホ，アンソール等と共に表現主義の先駆者としても重要な地位を占めている。朝日新聞社と共催の本展の出品作は，スイスの国際文化交流を使命とするプロヘルヴェティア財団およびホドラー研究の権威ユラ・ブリュッシュヴァイラー氏の協力のもとに，スイス各地の公私のコレクションから集められたもので，初期から最晩年に至る彼の芸術の全貌をうかがわせるに十分なものであった。

＊英国の肖像画

哲学者フランシス・ベイコンから
画家フランシス・ベイコンまで

ENGLISH PORTRAITS

from Francis Bacon, the Philosopher
to Francis Bacon, the Painter

1975年10月25日～12月14日
主催：国立西洋美術館・ブリティッシュ・カウンシル
出品内容＝油彩73点，ミニアチュール31点，素描・水彩55点，版画27点，計186点

18世紀以前の英国画壇は，ホルバイン，ヴァン・ダイクなどの外来の画家の活躍を除けば，ヨーロッパ絵画史上特に重要な地位をしめているとはいい難い。しかし18世紀に入り，ホガース，レノルズ，ゲインズバラ等が輩出し，いわゆる国民画派が形成されるに及んでにわかに脚光を浴び出した。これらの画家たちは歴史画や風俗画も手がけたが，特に肖像画に多くの秀作を残し，英国の肖像画の黄金時代を築くと同時に，その後の伝統の基礎を築いた。特に家族や知人たちの親しい集いを描いた風俗的な集団肖像画（カンヴァセーション・ピース）は，18世紀の英国社会が生んだユニークなジャンルとして知られる。19世紀に入ると，ターナー，コンスタブルに代表される風景画が抬頭しているが，肖像画もその地位を失わず，その傾向は今世紀に入っても変らない。

当館では1970年に「英国風景画展」を開催し，好評を博したが，今回もまたブリティッシュ・カウンシルの全面的な協力をあおいで，英国の60有余の美術館およびコレクターから186点に及ぶ出品を得た。その内訳は油彩画の他，水彩，素描，版画，ミニアチュール等各方面に及び，また時代的には，本展の副題「哲学者フランシス・ベーコンから画家フランシス・ベーコンまで」にある通り16世紀末から現代に及び，英国肖像画の豊かな展開を総覧するに十分なものであった。

＊松方コレクション展

1975年11月1日～11月30日
主催：国立西洋美術館・山形県・山形県教育委員会・山形市・山形市教育委員会・山形美術博物館・山形新聞・山形放送
会場：山形美術博物館
出品内容＝絵画60点，彫刻20点

講演会記録

「ホドラー展」特別講演会

4月5日（1975年）
〈フェルディナント・ホドラーの人と芸術〉
美術史家　ユラ・ブリュッシュヴァイラー（通訳　穴沢一夫）

4月17日
〈文学と美術におけるアルプス〉
上智大学教授　トーマス・インモース

「英国の肖像画展」特別講演会

10月25日
〈英国の肖像画〉
元ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館長
サー・トレンチャード・コックス（通訳　千足伸行）

11月1日
〈英国18世紀の生活と絵画〉
元ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館長
サー・トレンチャード・コックス（通訳　八重樫春樹）

11月8日
「ホガースとディケンズ――絵画と文学」
東京教育大学教授　桜庭信之

修復記録

1　ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ
《貧しき漁夫》（P・1959–175）
1883年頃　油彩　カンヴァス　105×68cm
状態概要：画面は1959年に一度洗浄されたが，麻布裏面の亀裂，ひび割れの周辺にその洗剤による染みが残っていた。絵具層・地塗層のひび割れは深く，特に中央部はひび割れの背後の麻布の糸が著しく劣化していて，絵具層が鱗片状の凹凸をなしていた。絵具層そのものの保存状態は，ひび割れ，亀裂の点を別にすれば比較的良好であった。一度行われた洗浄も穏やかなもので洗い残しも見られた。
描き直しのカンヴァス（“古キャン”）を使用した形跡があり，従ってもともと絵具層が厚く，ひび割れを生じ易い状態にあったと推定される。
修復処置：蜜臘およびダンマール樹脂等の混合接着材を用いて新しい麻布による全面裏打。テレビン精油，ミネラル・スピリットを用いて，画面に滲透してきた接着材の余剰の除去および画面の洗浄。保護膜塗装（スプレータイプのセミ・マット・タブロー・ニス使用）。

2　ウジェーヌ・ドラクロワ
《聖母の教育》（P・1970–1）
1852年　油彩　カンヴァス　46×55.5cm
状態概要：基底材は薄手の麻布で，たるみを矯正するため楔を強く打込んで張ってあった。そのため麻布は全般的に劣化し，周辺部では特に繊維の強度が失われていた。また地塗りに亀裂が生じ，それによって麻布は横に収縮し縦にこまかい起伏をなすに至っていた。地塗りは全面にひび割れを生じ，特に右上隅に斜めに深いひび割れが認められた。絵具層は，ひび割れ，亀裂の点を除いて良好な状態にあったが，右上隅の樹木を塗りつぶして空に描き替えた部分に変色が認められた。保護膜のニスは黄変が甚しい。
修復処置：蜜臘およびダンマール樹脂等の混合接着

材を用いて新しい麻布による全面裏打。テレビン精油，アルコール，ミネラル・スピリット，トルエンを使用して黄変ニスの除去と画面の洗浄。変色した絵具層の補彩若干。保護膜塗装（スプレータイプのタブロー・ニス使用）。

3　ギュスターヴ・モロー
《ピエタ》（P・1959–161）
1888年以前　油彩　板　23×16cm
状態概要：保護膜が著しく黄変して，特に暗部では細部の図柄も判然としない程であった。基底材の板には異状はなかったが，地塗りは左上隅の極く僅かの部分が欠損していた。絵具層の保存状態は良好。
修復処置：アルコール，テレビン精油，ミネラル・スピリットを使用して黄変ニスの除去，画面洗浄。保護膜塗装（スプレータイプのタブロー・ニスおよびセミ・マット・タブロー・ニス併用）。
以上の修復処置に伴い，旧来の隅丸型の額縁を長方形の額縁に変更した。　（写真参照）

4　アンリ・ルバスク
《窓》（P・1959–118）
1923年　油彩　カンヴァス　80×65cm

5　クロード・モネ
《舟遊び》（P・1959–148）
1887年　油彩　カンヴァス　145×132cm

6　マックス・エルンスト
《石化した森》（P・1965–5）
油彩　カンヴァス　81×100cm

7　フェルナン・レジェ
《青い空と赤い鶏》（P・1965–10）
1953年　油彩　カンヴァス　65×92cm
以上の4点は，何れも数箇所絵具の剝離が発見された。
修復処置：蜜臘およびダンマール樹脂等の混合接着材による剝離箇所の固定。デトランプ，テレビン精油で稀釈した油絵具等を用いて欠損部分の補彩。

（以上7点の修復は何れも黒江光彦氏による。）

資料

国立西洋美術館新館建設計画

国立西洋美術館は，昭和34年にフランス政府から寄贈された旧松方コレクションの作品371点をもって開館したが，その後系統的に作品収集を行い，現在では644点の所蔵作品を数えるに至っている。

一方，その間事業面では特別展と所蔵品による常設展示とを交互に実施しながら西洋美術の普及活動を続けてきたが，所蔵作品の増加に伴う充実した常設展示を行うためには，会場が狭すぎたり，特別展と常設展示との同時開催が不可能であるなどの理由から，新館建設の必要が早くから痛感されてきた。

懸案解決の足がかりとして，昭和42, 43年度に用地取得の予算166,983千円が認められ隣接地2,208 m² を取得，昭和50年度に至り，調査及び基本設計の予算20,090千円が認められ，ようやく計画実現の運びとなった。

1　調査委員会の開催

新館の基本構想について意見を求めるため，文部省，文化庁，建設省関東地方建設局等の関係者と，美術，建築の学識経験者等12人に委嘱して，昭和50年5月20日調査委員会を開催し，およそ次のような基本構想に基づいて基本設計を行うことに決定した。

調査委員会委員（五十音順）

磯村光男	東京都副知事
犬塚恵三	法政大学教授
内山　正	文化庁次長
柏木健三郎	文部省教育施設部長
鹿海信也	文化庁文化部長
関野　克	東京国立文化財研究所長
高階秀爾	東京大学助教授
登石健三	東京大学講師
富永惣一	評論家
橋本　真	文化庁文化部文化普及課長
益田義信	日本美術家連盟理事
森田　稔	建設省関東地方建設局営繕部長

2　新館の基本構想

(1)　規　模

鉄筋コンクリート造（一部鉄骨を含む）

地上2階地下2階（一部地下中1階を含む）耐火造とする。

建面積　約1,455m²

延面積　約5,000m²

(2)　新旧両館の一体化

本館と新館を一つの美術館として一体化させるため，本館の一部をエントランスロビーに改造し，このロビーから渡り廊下で新館につなぐ。渡り廊下の連繋により新旧両館の展示室を一連の展示空間として効果的に使用できるようにすること。

(3)　作品保管，空調等管理設備の集中

イ　作品の搬出入施設と収蔵庫はすべて新館に集中させること。

ロ　新館に設けられた空調，電気，給排水の設備に対し監視盤を既存機械室に付設すること。

ハ　防災・防盗設備についても，既存監視盤に付加して新館監視盤を増設すること。

(4)　自然光による照明

当館の展示作品は，ルネッサンスの初めから19世紀後半に至るまでの比較的古い時代に属するものが主体であり，その鑑賞には自然光をベースにすることが望ましい。自然光の採光方式は，光量及び色温度の調節に最も効率的なガラス屋根とし，天井部分に光量調整のための絞り機構を設けること。

3　基本設計

上記基本構想に基づき，昭和50年7月12日付で前川国男建築設計事務所と設計契約を締結し，昭和51年3月5日，基本設計を完了した。

4　昭和50年度予算

(1)	基本設計料	19,870千円
(2)	調査委員会経費	97千円
(3)	調査旅費	123千円
	計	20,090千円

昭和50年度主要記事

昭和50年

4 月 1 日　国立西洋美術館観覧規則の一部改正
国立西洋美術館評議員会評議員委嘱
国立西洋美術館新館建設調査委員会委員委嘱

4 月 2 日　国立西洋美術館協力会からカレル・N・フィッサー作版画「16のブロック」及びオイヴィンド・ファールシュトレーム作セリグラフィー「7つのSOMBA」の寄贈を受けた

4 月 4 日　ホドラー展(朝日新聞社共催)開会式挙行

4 月30日　英王室秘蔵素描展（文化庁，東京国立博物館国立西洋美術館共催）開会式挙行（会場　東京国立博物館）

5 月 1 日　山田館長，エリザベス女王から名誉大英勲章（Commander of the Order of the British Empire）受賞

5 月16日　美術作品購入選考委員会並びに同価格審査員会開催，4点の購入決定
15世紀フランドル派作　油彩「悲しみの聖母」
ウジェーヌ・ドラクロワ作　油彩「墓に運ばれるキリスト」
コルネイユ・ヴァン・クレーヴ作　ブロンズ「ヴィーナスとキューピッド」
コルネイユ・ヴァン・クレーヴ作　ブロンズ「プシュケとキューピッド」

5 月20日　国立西洋美術館新館建設調査委員会開催
新館建設の基本構想かたまる

5 月25日　ホドラー展終了

6 月 1 日　英王室秘蔵素描展終了

6 月12日　梅原龍三郎氏からピエール・オーギュスト・ルノワール作　油彩「ルーベンス作マリー・ド・メディシスの模写」，「キュクラデス彫刻」石彫の寄贈を受けた

6 月13日　水嶋徳蔵氏からジョン・E・ミレース作「あひるの子」油彩の寄贈を受けた

7 月 6 日　無料観覧日実施

7 月 9 日　文化庁からピエール・オーギュスト・ルノワール作「風景の中の三人」油彩の管理換を受けた

7 月11日　国立西洋美術館所蔵美術作品等の分類基準の制定

7 月12日　新館基本設計契約を前川国男建築設計事務所と締結する

8 月 3 日　無料観覧日実施

9 月 7 日　〃

10月 7 日　〃

10月24日　英国の肖像画展開会式挙行

10月30日　松方コレクション地方巡回展（山形）開会式挙行（会場　山形美術博物館）

11月21日　英国の肖像画展御観覧のため，秩父宮妃殿下，三笠宮妃殿下，同容子内親王殿下御来館

11月30日　松方コレクション地方巡回展終了

12月 1 日　国立西洋美術館特別観覧規則の一部改正

12月14日　英国の肖像画展終了

昭和51年

1 月10日　本館展示場非常放送設備工事完了

1 月14日　昭和51年度開催の「全米美術館収集世界名作展」打合せのため，日米文化教育会議米側博物館交流小委員会委員長シャーマン・E・リー氏（クリーヴランド美術館長）が来日。文化庁，国立西洋美術館，東京国立博物館及び京都国立博物館の関係者と当館会議室で合同会議開催。開催要綱かたまる。

2 月 1 日　無料観覧日実施

2 月16日　美術作品購入選考委員会並びに同価格審査員会開催，3点の購入決定
フィリップ・ド・シャンパーニュ作　油彩「マグダラのマリア」，フランソワ・ブーシェ作　素描「ヘベ」，ジョルジュ・ルオー作　油彩「リュリュ（道化の顔）」

3 月 5 日　新館基本設計完了
3 月15日　国立西洋美術館所蔵作品等の分類基準の一部改正
3 月17日　国立西洋美術館評議員会開催
3 月22日　文化庁からクロード・ロラン作　油彩「踊るサテュロスとニンフのいる風景」の管理換を受けた。

規則の制定・改正

昭和50年 4 月 1 日　「国立西洋美術館観覧規則」の一部改正
（改正要旨）
優待券の有効期間を 1 年から 2 年に改め煩瑣な手続を改善するものである。

昭和50年 7 月11日　「国立西洋美術館所蔵美術作品等の分類基準」の制定
（制定要旨）
従来から行われている収蔵品の分類方法（種類・記号・番号）を改善するとともに成文化して作品管理の万全を図る。

昭和50年12月 1 日　「国立西洋美術館特別観覧規則」の一部改正
（改正要旨）
従来，特別観覧を許可するに当っては、特別観覧券を交付していたが実情にそぐわないので，許可書を交付する制度に改め，それに伴う必要な改正を行う。

昭和51年 3 月15日　「国立西洋美術館所蔵美術作品等の分類基準」の一部改正
（改正要旨）
分類表の種類を簡略化するための必要な改正を行うとともに作品に付する記号番号のうち「暦年」を「会計年度」に改める。

1. 昭和50年度歳入実績額

項　　目	金額（単位　円）
1．建物及物件貸付料	218,341
2．版権及特許権等収入	410,250
3．入場料等収入	32,342,620
4．講　習　料	20,000
5．不用物品売払代	3,263
計	32,994,474

2. 昭和50年度歳出予算額

項　　目	金額（単位千円）	前年度比較増△減額(単位千円)
1．人　件　費	113,097	27,665
2．庶務部運営	12,793	2,239
3．事業部運営	136,052	18,114
（美術作品購入）	(123,000)	(17,500)
4．特　別　展	40,165	7,660
5．施設設備整備	3,111	△ 680
6．新館建設調査	20,090	20,090
計	325,308	75,088

3. 昭和50年度観覧者一覧表――――次ページ

4. 所蔵作品一覧

（昭和51年3月末現在）

	当初所蔵松方コレクション	購　入	寄　贈	管理換	小　計	寄　託
絵　　画	194	30	27	4	255	31
素　　描	80	10	7	1	98	8
版　　画	24	49	36	0	109	0
彫　　刻	63	10	10	0	83	5
工　　芸	0	0	1	0	1	1
その他の資料	10	87	1	0	98	0
計	371	186	82	5	644	45

3．昭和50年度観覧者一覧表

	開催日数	個人観覧				団体観覧				無料観覧日	優待招待	合計	一日平均観覧者数
		一般	学生	小人	計	一般	学生	小人	計				
	日	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
平常展	180	109,245	42,552	25,155	176,952	1,397	5,582	15,845	22,824	12,274	877	212,927	1,182
特別展 ホドラー展	44	53,067	28,574	4,032	85,673	222	4,032	19,951	24,205		18,277 (789)	128,155 (789)	2,912
特別展 「英国の肖像画」展	44	23,655	11,973	2,923	38,551	201	2,762	2,176	5,139		3,023 (460)	46,713 (460)	1,061
計	268	185,967	83,099	32,110	301,176	1,820	12,376	37,972	52,168	12,274	22,177 (1,249)	387,795 (1,249)	
巡回展・松方コレクション展(山形)	30	41,238	8,237	12,703	62,178	30,786	8,574	11,311	50,671		2,774	115,623	3,854
合計		227,205	91,336	44,813	363,354	32,606	20,950	49,283	102,839	12,274	24,951 (1,249)	503,418 (1,249)	

(注)「優待・招待」欄の(　　)数は、特別招待日の入場者数を示す外数である。

職員名簿

昭和51年3月31日現在

国立西洋美術館評議員会評議員

（五十音順）

東京国立近代美術館長
安達　健二

財団法人 社会教育協会理事長
有光　次郎

ブリヂストンタイヤ株式会社社長
石橋幹一郎

東京都副知事
磯村　光男

評論家
今泉　篤男

京都国立近代美術館長
河北　倫明

東京国立博物館長
斎藤　　正

日本芸術院長
高橋誠一郎

評論家
谷川　徹三

株式会社丸善相談役
司　　忠

杏林大学理事
寺中　作雄

評論家
富永　惣一

神奈川県立近代美術館長
土方　定一

建築家
前川　国男

国際文化会館理事長
松本　重治

東海大学教授　東京大学名誉教授
吉川　逸治

日本学士院会員　東京大学名誉教授
脇村義太郎

国立西洋美術館職員

館　長	山田智三郎
次　長	土生　武則

庶務課

庶務課長	新山　忠弘
庶務課課長補佐	山本　昌志
庶務係長	西山　　博
福祉主任	舟橋さち子
	戸松　靖子
	湯口太多史
守衛長	浜田　　孝
	樋口　泰一
	山王堂正行
	井上武運児
	羽山　正公
	石井　茂夫
	内藤　満枝
経理係長	白石　治美
	須田　文子
	市川　　勇
	古山　則夫
	小林江考子
用度係長	田島　庄平
	肥後　豊司
	太田原　武
	白倉　由夫
	大竹　乙弘
	小宮　勝男
	平山　節子
	長島　武夫

事業課

事業課長	穴澤　一夫
（併）主任研究官（東京芸術大学助教授）	佐々木英也
渉外調査係長	越　　宏一
	生田　　圓
陳列保存係長	八重樫春樹
（併）	長谷川三郎
普及広報係長	千足　伸行
	長谷川三郎

国立西洋美術館年報 NO. 10

発行　1977年3月31日
編集　国立西洋美術館　東京都台東区上野公園
製作　美術出版デザインセンター
印刷　凸版印刷株式会社

BULLETIN ANNUEL DU MUSÉE NATIONAL
D'ART OCCIDENTAL, NO. 10
Publié le 31 mars 1977 par le Musée National
d'Art Occidental, Tokyo
Imprimerie: Bijutsu Shuppan Design Center

©The National Museum of Western Art, Tokyo, 1977
Printed in Japan